TERROR OF HERNIATED DISC VOL.22

EL ZINE

the [international] kvlt conspiracy

Riot City Records
Simon Edwards interview

LOS CRUDOS

Sadist

NEGATIVE INSIGHT

ブラジルのパンクスが見た
RIO OLYMPICS

Master Musicians of
Joujouka Festival

infiAl

X『LOS ANGELES』

GIG REVIEWS
NOWHERE TO RUN FEST
PUNK DEPARTURE

PSYCHO SQUATT

APURTU



Poison Idea

Interview & Column

the [international] kvlt conspiracy EL ZINE TERROR OF HERNIATED DISC VOL.22

CONTENTS VOL.22



Front Cover : Photo by Jason Charles

左から Jerry A, Eric "Vegetable" Olson, Brandon Bentley, Chris "Spider" Carey, Mickey Widmer (Photo by Jason Charles)



Poison Idea

interview HANDLE WITH CARE!

いちファンとして長年追いかけてきたバンドやミュージシャンに、レコード屋という職についた今の状況で接することが出来るのは、とても幸せなことですし光栄でもありますが、小遣い稼ぎ程度のショボいモチベーションで終活を謳歌しているような姿に直面した時は、なんだか切なくなることがあるのも事実です。しかし、ここ数年、特にアメリカのハードコア・パンク・レジェンド達の復活作のテンションとクォリティーの高さにドギモを抜かれることが続いていて、完全に見落としていた2014年発表のSHEER TERROR「Standing Up For Falling Down」に始まり、BATTALION OF SAINTSの2015年7"EP、Harley Flanaganの2016年発表ソロ・アルバム「Cro-Mags」などは個人的には完膚なきまでにノックアウトされてしまいました。そして、それらのKings of USHC Punkに含めるべき現在進行形のバンドが、言うまでもなくこのPOISON IDEAです。Vo.のJerry A.とともにバンドの中心人物であったギタリストPig Championの2006年の死後、初のフル・アルバムとなる「Confuse & Conquer」をSouthern Lordから2015年に発表し、しかも過去の参加作品は少なかったにも関わらず、80年代後期のPOISON IDEAを支えたギタリストとしてファンの間で評価の高いEric "Vegetable" Olsonのカムバックというサプライズもあって、大変話題となりました。内容もPOISON IDEA節全開で申し分なく、スウェディッシュ・ハードコア・パンク旧友ROVSVETTとのSplit 7"、さらに地元ポートランドにてパーティー形式で行われたライヴを収録した「Company Party」アルバムと、リリースも立て続けに連発して、絶好調っぷりをアピールしてきています。昔からのファンならばご存じの通り、コレクター魂を刺激するようになってきてこそ、POISON IDEAはいよいよ調子づいてきている証拠なのですが、それを証明するような決定打が今年2016年夏にリリース。彼ら自身のレーベルAmerican Leather Recordsを遂に復活させ、新曲5曲を収録した12"EPを限定1000枚で自主リリースしたのです。ロゴがプリントされたクリア・プラスチック・バッグに収納されたスプラッター・ヴィニール（非スプラッターのカラー盤も数種存在しますが、レッド・ヴィニール以外の詳細は不明）は、Eric Olsonが参加した作品で内容/評価/人気のいずれも非常に高く、2014年のRecord Store Day 7"ヴァージョン再発もコレクターを狂喜させた、傑作「Getting The Fear」12"EPを彷彿させるレコードで、このたび、RECORD BOYで日本限定のレッド・ヴィニールも販売させてもらい、大反響を呼びました。こうなったらもうミーハー根性を出してしまおうと思い立ち、インタヴューも申し出たところ、ヴォーカルのJerry A.に快く承諾していただきました。POISON IDEAに参加する以前にSlayer Hippieが実は「Kings of Punk」1stアルバムをプロデュースしていた事実など、過去のメンバーについても本当は突っ込んで聞きたかったのですが、2004年来日時にMasaki氏（kriegshög）がDollのインタヴューで試みて撃沈していましたので、今回は2004年来日時のDollインタヴュー以降の経緯に焦点を絞って質問してみました。

INTERVIEWED:RECORD BOY 大倉 了

■2004年の来日ツアーの際にDoll Magazineでインタヴューされたのは覚えていますか?El ZineのエディターはDoll Magazineで働いていた人なんですよ。なので、今回のインタヴューは初期の話をうかがったDoll Magazineでのインタヴューとはなるべく質問が被らないように、2004年の来日後から現在までを振り返っていろいろお聞きしたいと思います。しかし、どうしても避けられない悲しい話題から始めなければなりません。故Pig Championのことです。「Latest Will and Testament」アルバムは彼の死後のリリースとなった訳ですが、「Latest Will and Testament」レコーディング時の彼の健康状態はどんな感じだったのでしょうか?

「もちろんDoll Magazineのことは覚えてるよ。俺の大好きな日本のパンク・マガジンだったし、コレクションもしてたからね。まだ持ってる号もいろいろある。「Latest Will and Testament」を録ってるときのTom(※Pig Championの本名Tom Roberts)の健康状態は悪くはなかったけど、彼自身は自分がベストな状態ではないことは分かっていたし、それは俺も知っていた。つまり俺達2人とも、彼の病状がそこまで深刻だとは真に理解してなかったんだ。でもさ、ヘルシーな生活を日々送っていて、今日突然人生を終えてしまう奴だって毎日どこかにいるんだぜ。あの前日、彼に会った時は何も変わった様子はなかった。でもその次の日の朝、車で迎えに行くことになってたから行ったんだけど、呼んでも玄関に出てこないんだ。仕方ないから俺は家に帰り、しばらく待ってから電話して、で、もう一度戻って家の中に入って、そして彼を見つけたんだ。彼自身も予測してなかっただろう。でも、誰かに別れを言うとか、何かひとこと書き残すとか、自分が今やるべきことの順番は考えていたのかも知れないな。もしかしたら、あの次の日にそれらをいろいろやるつもりだったかも知れないし。"If you want to hear God laugh, announce your plans."(※ウディ・アレンの名言)神様に自分のプランを教えたって、笑われるだけ、ってことだ。人間の思い通りになんかならない。彼には既に他のプランが用意されていたんだよ」

■「Latest Will and Testament」アルバムは、POISON IDEAの過去と現在が調和した素晴らしい復活作でした。あの作品から参加したベーシストのChris Careyは復活後のPOISON IDEAでは長年在籍するメンバーですが、メタルとパンクをプレイしてきた彼の経歴(スラッシュ・メタルのDEAD CONSPIRACYや、DEFIANCE、RELIGIOUS WAR、BURNING LEATHER、etc)は、実にPOISON IDEAらしくてユニークです(Eric Olsonをはじめ、80年代後期のPOISON IDEAには、地元ポートランドのメタル・ミュージシャンが数名在籍)。彼が加入したきっかけを教えてください。昔からの知り合いでしたか?

「Chrisのことはずいぶん昔から知っていた。POISON IDEAが「Record Collectors Are Pretentious Assholes E.P.」を制作している1984年には、もう彼も他のバンドでプレイしていて、その頃から俺達の周辺に居た奴なんだ。でも彼は今大学に通って講習を受け始めて、ちょっとバンドと大学の両立が難しくなってきてる。あと、家庭があるとそっちにも強く縛られるからね」

■「Latest Will and Testament」アルバムはSmegmaスタジオでの録音でしたよね。1stアルバム「Kings of Punk」のエクストラ・ポスター(1986年にPusmortからリリースされた「Kings of Punk」オリジナル盤LPのバンド直販"Portland Edition"には、一般流通の初回盤に付属の有刺鉄線スカル・デザインのポスターとは別のポスターが付いていて、そこに好きなバンドやインスパイアされたバンドの名前を多数掲載しています。2013年の「Kings of Punk」アルバム再発盤で、そのポスターのレイアウトをインナーに再現しているので、気になる人はぜひチェックしてみてください)にもSMEGMAの名前が載っていましたし、Pig Championも昔からSMEGMAのTシャツを着ていたりしましたが、僕はSMEGMAについて全く詳しくないので、少しSMEGMAのことを聞かせてください。パンクとして自由な発想を持ち、R&RとしてとてもピュアなPOISON IDEAのようなパンク・バンドがポートランドで生まれたのは、SMEGMAのようなアーティストの存在が大きかったのではないですか?SMEGMAはポートランドのパンク・シーンにも大きな影響を与えていたのでしょうか?

「SMEGMAはレザー・ジャケットとスパイキー・ヘアーでキメて予定調和の曲を楽しむようなパンク・バンドではないよ。でも、感じるままに自己を表現する自由な音楽性は、パンクそのものだ。彼らの結成は1970年代のL.A.で、SUN RAのようなフリー・ジャズと、あとCAPTAIN BEEFHEARTに強く影響されて、多くの作品を発表し、世界中をツアーした。中心だったメンバーは現在SMEGMAを離脱して、各々が独自の活動をしている。Dr. AMAZONという新しいバンドをスタートさせてる人物がいて、彼がSMEGMAの精神を継承した音楽を表現しているね(※このDr. AMAZONをやっているMichael Lastraという人物が、Smegmaスタジオのオーナー)。SMEGMAのコピーライトは今は他の連中が掲げてるんだけど、ハッキリ言って俺にとってはそっちはもう音楽性もスピリッツもオリジナルのSMEGMAには及ばない。名前を使ってるだけだ」

■「Latest Will and Testament」アルバムをリリースしたドイツのFarewell Recordsについてお尋ねします。「Latest Will and Testament」のLPは数種のカラー・ヴィニールがありましたし、ボックス・セットもあったんですよね?ボックス・セットの付属品とピクチャー盤のスリーヴにPusheadのアートワークが使われていましたが、そういった様々なアイデアは全てFarewellによるものでしたか?FarewellはPusheadの画集を勝手に作ったりして、Pusheadとは良好な関係ではなかったと思っていたのですが。

「Farewell Recordsは100%ブートレグな組織だ。奴らは俺達に公式な書面やプランなど一切伝えてくることなく全て行い、俺達が何度も販売やプレスの中止を要請しても無視し続け、レコードをひたすらプレスし売りさばいている。カラー・ヴィニールなどのヴァージョン各種も、俺達が聞いてなかったものが存在してるし、奴らがやることはデタラメばかり。全く信用できない連中で、作りも最悪だ。俺の発言を疑うのなら、君からPusheadに直接聞いてみろよ。まぁ、Pusheadがこの件について話す気になればの話だが。彼はFarewell Recordsに勝手にアートワークを使われて本当に怒ってる。俺達は奴らとは何も共謀なんてしてないし、むしろFarewell Recordsに好き勝手やられてる側なんだが、Pusheadはホントもう怒り狂っちゃってさ、俺達の話さえ聞こうともしなかったんだから。Pusheadまで巻き込んでしまって、彼には本当に申し訳なく思っている。もう一度強く言いたい。俺達はFarewell Recordsとは共同作業は一切していない。奴らは密造業者のコソドロ野郎だ。見かけたらタダじゃおかねぇぜ」(※「Farewell RecordsからはPOISON IDEAのカヴァー集も出てましたが、あのカヴァー集はFarewell Recordsからのオファーだったんですか?作品を聴いて印象に残ってるバンドがあったら教えてください」という質問もしたのですが、Farewell Recordsとの関係についての回答はここに集約されているようで、カヴァー集については無回答でした)

■Pig Championの死後、2007年のKILL YOUR IDOLSとのSplitリリースに合わせてライヴを再開するまでは、全く活動はしていませんでしたか?KILL YOUR IDOLSとのSplitリリースの経緯について教えてください。KILL YOUR IDOLSとは以前から親し

かったのですか？
「Tomは体調が悪くなってからはもうライヴには参加しなくなって、俺達は彼を除いたラインナップでライヴはもともとやってたけど、Tomが逝ってしまった後は俺達もしばらくライヴはやらなかった。Tomは「Latest Will and Testament」レコーディングの頃も既にライヴには参加しなくてレコーディングのみだったけど、でも彼はサポート・メンバーなんかではなく、常にPOISON IDEAの一員でいてくれた。KILL YOUR IDOLSとは長い付き合いだよ。東海岸では一緒にやってた。あのSplit 7"自体は俺達はたいして関わってないレーベル主体のリリースで、まぁ業界の連中のための企画だね」
■Eric Olson氏の復帰した「Confuse & Conquer」アルバムについて教えてください。Eric Olson氏の復活に狂喜したファンは世界中にたくさん居たと思いますが、Doll Magazineでのインタヴューでは、Slayer HippieとMondoの名前をあげて昔のメンバーについて切り出した時、あなたは多くを語りたがらなかったですよね？実はEric Olson氏とだけは連絡をとったりしていたのですか？それとも久しぶりの再会だったのでしょうか？
「「Confuse & Conquer」の仕上がりには俺達もとても満足している。Ericが戻ってきてくれたのは、ファンだけでなく俺達自身も凄く嬉しかったよ。いいギタリストだ。Slayer HippieとMondoについては、嫌なことを言うことになるだけで、感謝や称賛の言葉を並べる気にはなれないから、今も何も語りたくないな。俺が他の誰にどんなにののしられてるのかなんて知る由もないだろ？映画の"羅生門"って知ってる？こういうのは、当事者それぞれ違った言い分になるもんなんだよ。Ericとも、彼が1度POISON IDEAを追い出された後は全く接触してなかった。でも、Ericがあの時クビになったのは、全部彼の嫁のせいなんだ。あの女がガンだったんだよ。"Spinal Tap"のギタリストの嫁いるだろ？Ericの嫁より、あの映画の女の方がまだマシだぜ(※落ち目のハードロック・バンドを疑似ドキュメントで描いた映画"Spinal Tap"では、バンドの方針にあれこれ口を出してメンバー間に亀裂を生じさせるギタリストのガールフレンドが登場する)。Ericは嫁にホレてたけど、俺達にはあの嫁は無理だった。Ericには嫁との生活があったけど、俺達はあの女との共同生活なんてゴメンだった。だからEricにはあの時POISON IDEAを辞めてもらった。で、彼らには子供も居たんだけど大きくなって、結局Ericもあの女と離婚したから、POISON IDEAとEricがよりを戻した、ってことだ」
■Eric Olsonのプレイは往年を彷彿させますし、彼ならではのトーンみたいなものも健在ですね。でも僕が「Confuse & Conquer」を聴いて1番驚いたのはあなたのヴォーカルです。加齢や劣化をごまかすようなところは全く感じさせないどころか、最近はシェイプアップもして見た目にも若返ってますね。今はヘルシーな生活を送ってますか？
「うん、Ericは歳を重ねてプレイも良くなってる。彼は今もギターについて学習を怠らないし、練習はもちろん、息子達にレッスンもしてるよ。でも、なぜ歳をとると衰えるものと考えるんだ？俺のヴォーカルだって、改善すべきところを理解するようになって、呼吸法も上手く出来るようになったし、そうやって人は上達していくものだ。でもまぁ、Johnny Rottenは違うな！『ずっと同じことをやってたって、誰もそんなの望んでない』って言うだろうし、確かにその通りだけど、Johnny Rottenの場合は、もうちょっと若い時のスタイルを維持する努力もしてほしかった。素晴らしくパワフルで、ムチャクチャだったしね。やっぱり歳とると劣化するってことなのかな？俺の体調は20年前の若い時よりもずっといいよ。ドラッグをやめたから。ハードなヤツばっかやってたから依存症だったし、薬物中毒でバンドのヴォーカル続けるなんて出来るわけがない。絶対不可能だ。クスリをやってる瞬間だけは自分が輝いてるように感じるんだよ。でもそれが確実に身体をむしばんでるし、実はヴォーカルだって酷いことになってる。俺はもうドラッグは懲り懲りだったし、やめることができたから、ヴォーカルもまた怒りと鋭さを取り戻すことが出来た。まだくたびれてないぜ」
■「Confuse & Conquer」はTOXIC HOLOCAUSTのJoel Grind氏によるレコーディングでしたが、彼との仕事はどうでしたか？彼は純粋なヘヴィメタル・キッズでとても好青年ですが、彼の仕事自体にも満足しましたか？
「Joelはとても良い仕事をしてくれたよ。一緒に楽しんで、最高にガツンとくるモノに仕上げてくれた。彼は本当にいい奴でさ、あんなにも楽しくレコーディングさせてくれた奴は他にいないよ。彼も面白いアイデアをいろいろ提案してきて、「Confuse & Conquer」は俺と彼との共同プロデュースみたいな感じだった。レコーディングの時はメンバー以外全員外に出ていかせて、数日間にいろいろ出し合ったアイデアにトライしたんだ。もしレコーディング期間があと1週間くらいあれば、Joelのレコーディングと、Brad Boatwrightのマスタリングで、「London Calling」とか、「The Black Album」(THE DAMNED)、あと、「Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band」みたいな、つまりコンセプト・アルバムのようなヴォリュームのモノになってたかも知れない。でも、代金は小銭で払って、マスター・テープは俺達が所有するけどな」
■Split 7"をリリースしたROVSVETTとの交流は昔からありましたか？「Kings of Punk」アルバムのエクストラ・ポスターで名前が載ってましたから、昔からROVSVETTは好きで聴いてたんですよね？
「ROVSVETTはみんな素晴らしい連中だ。大好きなバンドだよ。彼らの音楽性は常に進化してる。あと、何度も世話になってるしね。俺の娘はぜひあの連中に嫁がせたい！俺に娘がいたらだけど」
■「Triple Chocolate Penetration」7"と「Company Party」ライヴ・アルバムをリリースしたVoodoo Doughnut Recordingsはポートランドの有名なドーナツ屋さんなんですよね？「Triple Chocolate Penetration」は奇妙な曲だけどカッコいいな、と思ってましたが、「Company Party」ライヴ・アルバムのライナーノートを読んで経緯を理解しました。あと、あまり公に言わない方がいいのかも知れませんのでNGの質問なら飛ばしてもらっていいですが、「Company Party」ライヴ・アルバムのサプライズ・ソングの数々も最高ですね。よく演奏してる曲なのですか？
「そう、ポートランドのドーナツ屋が始めたレーベルだね。俺達はシングルとアルバムを1枚ずつ出した。"Penetration"ってのは、その店のドーナツの種類の1つで、日本にも出店してるから、そっちでもそのドーナツはあるんじゃないかな？(※出店計画はあったようですが、現時点では日本には未出店)スッゲー、超〜チョコレートたっぷりなヤツだよ。だからチョコが嫌いならやめといた方がいいけど、まぁ1度は食べてみたほうがいいな。あとあの曲はダブル・ミーニングも含んでいて、バカバ





カしく下品な曲でもあるんだ。シリアスに捉えないでくれ。ライヴ・アルバムのカヴァー曲については、あの時1度しかやったことがない曲もある。パーティーだったからね。俺達は今までいろいろな曲を純粋に楽しむためにカヴァーしてきた。カヴァーって他人が作った音楽を演奏することだけど、サンドウィッチを発明したのは自分自身じゃなくても、誰もがしょっちゅう自分で作って食べてるみたいに、"Louie, Louie"のような革命的なナンバーは、いろいろな人に愛され演奏され続けるってことだ」

■新作の5曲入り12"はAmerican Leather名義でのリリースですね。シンプルな作りながら、「Getting The Fear」の12"を思い出させるカラー・ヴィニールのバリエーションで、見た瞬間に興奮してしまいました。さらに、キャッチーだけどガラが悪くて、そして猛烈なスピード感と重量感を備えた内容も、まさにPOISON IDEAらしい作品だと思います。今回またAmerican Leatherの名義で、クラシックなスカルのイメージを使おうと決めたのはなぜですか？あと、出来たらヴァージョンの詳細も教えてください。

「American LeatherはPOISON IDEAのレーベルだ。俺自身そのもの。もし俺達のレーベルで他のバンドも出せるようなことになったら、それも凄いよな。でも俺達は今原点に回帰してるから、DIYが何よりもベストだと実感している。バンドを始めたばかりの頃のように、全部自分でやるんだよ。だから今回のレコードが出来た。初回は1000枚プレスで、カラー・バリエーションはいくつかあるけど、レッド・ヴィニールは完全に日本限定だ。次のプレスはブラック・ヴィニールになるだろう」

■"Calling All Ghosts"のPVが最高なんですけど、Ericがギターに使って火を噴いてるものは一体何ですか？

「金属用のグラインダーだね。メタル・グラインダー。Ericはメタル・ギタリストだからさ。火花も散って、ちょっとインダストリアル・ミュージックっぽい危険なヴィジュアルを狙ったところもある」

■POISON IDEAは多様な音楽性を持ったパンク・バンドですが、個人的には、特に「We Must Burn」以降にその多彩なアイデアは統率されて、現在まで一貫しているように僕は感じてきました。これはPOISON IDEAがメンバー各々曲を持ち寄って良い作品を作ることが出来る非常に稀なバンドだからだと思うのですが、新作12"も曲は各メンバーが持ち寄ったものですか？あなたがPOISON IDEAで音楽を創作するうえで心がけていることや、メンバーに求めていることなどがあれば教えてください。

「その通り、俺達は今まで常に曲作りも全メンバーに求めてきたし、全員曲を書いて、良かったモノはドンドン使って演奏/録音してきた。音楽にブレがなく統一性があったのは俺のカラーがそうさせたのだろうし、しかしバラエティーが生まれてたのは、そういった各メンバーのカラーが出ていたからだろう。新作の5曲入り12"は、Ericと俺が最初の2曲、3曲目は俺、Chrisと俺が4曲目、そしてラストの曲は俺が書いたモノだ。歌詞もたまに他メンバーの作ったものを1～2行使ったりするけど、ほぼ全て俺が書いてるかな。あとは、メンバーが作ってきた曲をタイトルだけ言ってもらって(Atonement)、そのタイトルに沿って俺が歌詞を書いたりもする(※恐らく「Latest Will and Testament」アルバムに収録の"Atonement for the Cursed"のこと?)。俺達は民主的なバンドなんだぜ。でも最終決断は俺がするけどね」

■歌詞は今後も掲載しないつもりですか？「Kings of Punk」アルバムのエクストラ・ポスターの中で、「歌詞についてなんかは、本当はみんなどうでもいいと思ってるんだ」とあなたは言ってましたし、「Latest Will and Testament」アルバム以降の作品にはどれも歌詞が付属されてませんでしたが、今もその考えは変わりませんか？

「いや、『みんなどうでもいいと思ってる』のではなく『気にしてもらえないこともある』なのかも知れないけど、「Latest Will and Testament」アルバムを再発する際に歌詞を掲載することになれば、俺の考えも理解してもらえるだろう。でも、斬新なアイデアや、率直な意見をぶつけてくる者もいて、それが案外的を得ることもあるから、多くの意見を聞いて決める方がいいのかもな。本当に望んでるのなら、「Confuse & Conquer」アルバムの歌詞ブックレットだって、作って配布してやるぜ」

■SLAPSHOTとのツアーはいかがでしたか？ボストンのシーンとは昔から交流がありましたし、NYのSHEER TERRORとも昔から今も親密で、POISON IDEAは東海岸のシーンとは以前から関係が良好ですよね。イギリスのEXTREME NOISE TERRORや、CHAOS UK、あとHERESY/In Your Face RecordsのKalvがやってるGERIATRIC UNIT、さらにはオーストラリアのHARD-ONSなど、アメリカ国外でも昔交流のあったバンドやミュージシャンで今も頑張ってる人達がいますが、最近でも連絡をとったり再会したりはしましたか？

「俺はNEGATIVE FXの頃からChokeの大ファンで、もちろんSLAPSHOTも大好きなんだ。バンド同士で付き合ってると言うより、Chokeの前ではいちファンに戻ってしまうよ。SHEER TERRORは付き合ってきたバンドの中でも最も良い連中だ。でもファンの一部がムチャクチャなんだよな。どこの地域でもどこの国でも、嫌な奴もいるしいい奴もいる。会うまでは嫌いだったバンドと実際会ってみたらとてもいい人だったり、その逆もある。CHAOS UKの奴らだと、Gabbaのやってる FUKとは共演したよ。CHAOS UKを継承したような完全なパンク・バンドで、彼らも気のいい連中だ。HARD-ONSのRayとBlackieは、俺達がオーストラリアに行った時にライヴに来てくれた。彼らは言葉にできないくらい素晴らしい人間だ。俺は彼らを本当の兄弟のように思ってる。Kalvには会ってないな～。俺のこと、猛獣のように思ってるんじゃないかな。E.N.T.？知らん。ブリストルでプレイした時、DISORDERのTafは来てくれた。POISON IDEAのショウには、年老いた古い仲間がゾロゾロと集まってくるけどさ、嫌いな奴とは付き合ってないから、みんな同志みたいな連中だよ」

■僕は来日するまで聴いたことがなかったんですが、LONG KNIFEは2015年の来日で知って大好きになりました。他にも若手で注目してるバンドは何かありますか？

「みんなLONG KNIFEはPOISON IDEAに良く似てるって言うけど、俺はそうは思わない。彼らはしっかり彼ら自身のサウンドを持ってるよ。どこが似てる？RAMONESみたいな、とか、MOTORHEADみたい、とか、そういう表現は本当に安易だ。音楽の中に何をどう感じたのか、語るべきだよ。パワーを感じたのか？ならば、それでいいじゃないか。それが重要なんだよ。笑顔にしてくれる音楽か？飛び回って叫びたくなるような音楽か？愛に満ちた音楽か？俺には新旧たくさんのお気に入りバンドがあって、そういう音楽を聴いて毎日誰かに入れ込んでる。それが俺の生きる糧になってるんだよ」

■ありがとうございました。それでは最後に日本のファンにメッセージをお願いします。

「OK、日本のファンは昔から本当に大好きだ。お前らのことだぜ、わかるだろう！たくさん笑って、打ち解けあって、秘密も共有して、そして俺の手を直にとってさ、酒も飲んだよな。また会える日を楽しみにしてるぜ。ありがとう」

Column
ボクとPoison Idea

大倉さんによるJerry Aへのインタヴューに続きまして、「ボクとPOISON IDEA」と題したコラムを、バンド/レーベル関係の方々に執筆して頂きました。皆さんそれぞれ、POISON IDEAに対する愛が目一杯に詰まった内容となっています。どうぞお楽しみくださいませ!!

山口大介
(MIDNIGHT RESURRECTOR/TECHNOCRACYギタリスト)

PIは音楽的に優れている。PIの飲むアルコールの量は天文学的量だ。PIのライヴ・パフォーマンスの凄さはKISSのそれの100倍にあたる。PIの出したアルバムのほとんどはグラミー賞を獲得するレベルにある。

キング・オブ・パンク、キング・オブ・バンド、いつの時代にも輝いている、僕はそんなイメージをいつも抱いている。"僕とPI"というタイトルのコラムなのでいいでしょう?いや、僕以外にも同じ思いを持っている音楽ファンは沢山いるだろう。

僕が一番最初に触れたPIのアルバムは「Record Collectors Are…」だ。弟と2人で住んでいた頃だから1991年頃だと思う。僕はレコードをあまり買う方ではなかったが、弟はその収入から考えると少し買いすぎ(買える余裕はなかったはず)だと思う程ハードコア・パンクのレコードを買って持っていた。そして彼の部屋のステレオも良いものだったので、そこでよくレコードを聴いていた。聴いていくうちにだんだんとかっこよく感じた、みるみるうちに自分が一番好きなアルバムになった。

その頃は工場のバイトで知り合った大学生の奴もよくそこへ来て酒を飲んでレコードを聴いて、朝になると工場へ、という生活だった。そいつとバンドを組むことになる。意外に変わった物好きで、ジャンク、オルタナティヴと言われるような音楽を目指していたが、すぐにストレートなハードコアをプレイしたくなりNO SIDEというバンドを組んだ、1994年のことだった。

その頃には弟のレコードでなく、自分でもPIのレコードを買って持っていた。コレクターではないので、新品をレコード屋で買えるPIは全部持っていた。そのバンドで幸運にも2枚の7epを出すことができた。USハードコア・パンクに傾倒しており、かなりリフ作りにもPIの影響を受けていた(現在活動中のバンドも影響を受けています)。もしPIのメンバーがその7epを聴いたら僕を訴えるかもしれない、いや、訴えられても幸せだ、と考えておこう。

兎に角、TAANG!から出ていたVHSも買って、カッコ良すぎて震えていた、何度も見た。何かのインタヴューで「王様になりたいだけなんだ…」というのを見た(現時点でそのようなインタヴューは未確認)。このインタヴューを読んでまた惚れた。勿論バンドのヴォーカリストにはライヴで口から火を噴いてもらった。そしてヴォーカリストにもっと食べて体重を増やせと頼んだが、中途半端なビール腹のおっさんになっただけだった。

バンド・メンバーの目標はPIのようなバンドになること、ライヴではPIの曲を演奏したことも何度かある。ひとつのエピソードを挙げれば、十三ファンダンゴでPIのカヴァーを一曲交えたライヴのステージから楽屋に上がる階段を上っている時に、憧れていたNightmareのドラマー、オサムーンさんに肩をバシっと叩かれ、「かっこええわ、PI好きなん?」と話しかけてもらったことは自分にとってとてもエキサイティングな出来事であり、あの時の緊張を今でも思い出す。そうだ、僕はとても気の小さな人間だが、ハードコア・パンクが大好きだ。

話をPIのアルバムに戻す。先程コレクターではない、と書いたがどうしても欲しかったので「Ian MacKaye」は中古屋で5000円出して買った。ジャケットも含めて大好きなレコードのひとつだ。因みに「一番好きなPIのアルバムは?」と聞かれたら「Blank Blackout…」と答えているが勿論全部当然名作と言える。

さてさて、その後PIの来日公演、僕は住まいが大阪なのでキングコブラの2日、両日に行くことができた。生で見るのが初めてでドキドキしながらキングコブラのトイレ待ちをしていたら中からジェリーAさんが、紳士的に出て来た。あ、本当に今日ライヴが見れるんだなと実感し、とても興奮した。ライヴはキラーチューンのオンパレード、僕は残念ながら英語を話せないので自分なりのカタカナでフロアで大声で歌い、乗り、踊り、大興奮状態であった。ステージ上ではジェリーAさんが、サントリー角瓶を一気に飲み干したシーンに感動すら覚えた。あ、僕などまだまだ酒飲みのレベルでは赤ちゃんみたいなものなんだ…と思った。

まとめになるが、僕は色々な音楽(ほとんどロック音楽)が好きで聴いているが職場等で「にいちゃん音楽やってんの?どんなんが好きなん?」と尋ねられると、「知らないと思いますが一番好きなバンドはPIです」と長年答えている。「Confuse…」も最高だった。次も、楽しみにしています。



マエダ シンゴ (TOO CIRCLE RECORDS)

以前から好きで主要な作品は一通り聴いているが単なる「一リスナー」である。彼らのホームタウンであるポートランドに行った事もなく直接関わりがある訳でもないので、この様な文章を書くに値するかは些か疑問ではある。しかし折角頂いた機会なので自分なりに振り返ってみたい。

最初に聴いたのはTAANG! RECORDSからリリースされた「KINGS OF PUNK」を日本のトイズファクトリーがライセンス販売した編集盤で、これには最初のシングル(とは云っても13曲も入っているが)「PICK YOUR KING」EPと2nd EP「RECORD COLLECTORS ARE PRETENTIOUS ASSHOLES」と1stフル・レングス「KINGS OF PUNK」の音源がまとめて収録されている。これ以降、作品毎に意図的な変化が見られるが上記3枚に関しては比較的近い路線で所謂80's US HARDCORE範疇内のスラッシュ・サウンドである。とは云え、短い曲中にも関わらず様々なリズムを絶妙に取り入れた楽曲群は今聴いても新鮮であり、様々なロックを聴き込んでいないと表現出来ないスキルの高さが垣間みられる。当時は自身の耳が追いついておらず、そこまで気づいてはいなかったが…。一聴するとシンプルであるが実はよく練られており一筋縄では行かないのだ。

次の「WAR ALL THE TIME」以降ツイン・ギターになり、カッチリとしたドラムを叩くThee Slayer Hippyが加入。本作以降がPOISON IDEAの真骨頂であろう。更なる演奏力向上に伴い(決して前作の演奏者の技術が低いと云う訳ではない)HEAVY METAL/HARD ROCKのダイナミズムとシャープさが際立つが、改めて聴くと本作も「KINGS OF PUNK」の延長上にはある。しかし音作りに於いては確実にメタリックになり90年代以降のHARDCOREの雛形の一つを創ったと云っても過言ではないだろう。

その後に「FILTH KICK」EP、「GETTING THE FEAR」12"をリリースし、前者は重複する曲の関係もあるが「WAR ALL THE TIME」の路線、「GETTING THE FEAR」は次作の3rdアルバム「FEEL THE DARKNESS」の布石になる作品と云って良い。その「FEEL THE DARKNESS」であるが、更にHARD ROCK的なうねりを感じさせ「ロック」に近づいた印象だ。これを機に改めて聴き直すと同時期または00年代以降の日本のハードコアにも聴こえる。推測の域を出ないが確実に日本のハードコアを意識して作られたのではないか?当時のレヴュー等では「ENT等のUKハードコアにアプローチした」と評されていたが(勿論、そのカラーは間違いなくあるが)個人的には最もジャパニーズ・ハードコアに近接した作品ではないかと感じている。

4thアルバム「BLANK BLACKOUT VACANT」は前作のロック要素をより強調させた内容と云ってよい。P.Iの作品中最も聴き易くキャッチーだ。Jerry A(Vo)もより歌を意識した歌唱法を採っている様に聴こえる。とは云っても音も(体も)重量級であるが故、万人に好まれるかは知る由もない。それを差し引いても比較的、一般的なロック・ファンが入り易い内容と云って良いだろう。

その後は「DUTCH COURAGE」と云うユーロ・ツアーの模様が収録されたライヴ盤やカヴァー・アルバム「PAJAMA PARTY」がリリースされ、黄金期最後の作品「WE MUST BURN」に繋がって行く。

話の本筋からは外れるが4年前VA「TRIBUTE TO OUT COLD.」LPと云う90年代から00年代に掛けて活動したボストン拠点のハードコア・バンドOUT COLD.の国内バンドでのトリビュート作をリリースした事がある。ジャケット・デザインの良案が浮かばず苦肉の策としてP.Iの「RECORD COLLECTORS ARE PRETENTIOUS ASSHOLES」をオーマージュした、要は真似をした写真を自宅で仲間の手を借り撮影し使用した経緯がある。OUT COLD.とPOISON IDEAは地域も異なり大きな接点がある訳ではないだろう。しかし私の中には薄々潜在的な共通点を感じていた。が、それに対する具体的な答えまではなかった。この機会に改めて振り返ると「多作品でありながら作品毎に異なるカラーがある。しかし確固とした一貫性はある」と気づいたが如何だろうか?また実現不可能と云われたユーロ・ツアーを実施し、後にそれがアルバムでリリースされた事も潜在的に共通していた要因であろう。興味のある方は上記トリビュート作と併せてOUT COLD.「LIVE IN AMSTERDAM」LPも探して貰えれば幸いだ。両作品ともP.Iが好きな方であれば楽しめる内容であろう。

93年にリリースした5thアルバム「WE MUST BURN」は初期作品からの総決算だ。作品中最もメタリックでテクニカルな内容が際立つが過去の作品を踏襲し最深化した内容と云って良い。ここまでが中心人物であるJerry A(Vo)とPig Champion(Gu)在籍時の音源であり個人的に思い入れのある時期である。

またPig Championは不参加であったが04年に初の来日公演も実施。06年にPig Champion他界後も「LATEST WILL AND TESTAMENT」「CONFUSE AND CONQUER」と2枚のアルバムをリリースし現在まで活動を継続中である。前述した通り「WE MUST BURN」以前程の思い入れはないが良作をリリースし続けている事は賞賛に値する。引き続き注視していきたい。　2016年9月3日

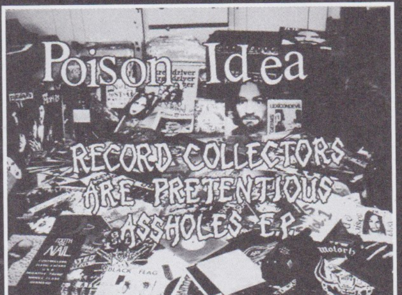




Photo by Jason Charles

Souichi
(FORWARD/G.I.S.M./UNDER THE SURFACE RECORDS)

個人的に一番好きなバンドは？と聞かれたら、迷わずPOISON IDEAと言ってきた僕ですが、作品のレヴュー等は割愛させて頂くとして、僭越ながら個人的な目に映ったメンバーのお話しをさせて頂きたいと思います。

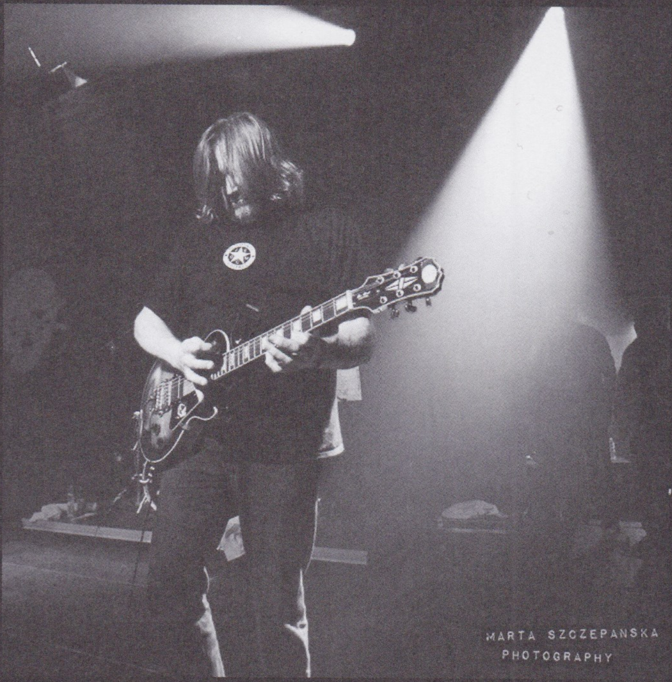
まず最初に彼等と共演したのは2004年の初夏、ポートランドの地下駐車場でのライヴでした。Pig Championは体調の理由から椅子に座ってのライヴでしたが、彼の華麗なギター・プレイには終始圧倒されっぱなしでした。でも、もうステージの上り下りも1人では出来なく2人掛かりで担がれている状態で、今思うとその頃から体調が芳しくなかったんだと思います。ライヴ後に日本で一緒にプレイしようと約束していましたが、2004年のPI来日時には健康上の理由から彼の来日は叶いませんでした。しかもその翌々年の2006年初頭に他界する事になるとは夢にも思っていなかったので、ショックで暫く立ち直れなかったのを覚えています。

2004年の初来日時のメンバーは基本的に1999年からの再結成メンバーでした(ギタリストはJim Taylor)。PIの来日ツアーをツアーメイトとしてサポートした印象は、やはり無茶苦茶な奴らだなという事でしたし、ここでは書けない事、トラブルも多々ありましたが、思い起こせば非常に楽しいツアーとなりました。それ以来、個人的にポートランドには翌年から頻繁に遊びに行くようにもなり、メンバーとの個人的な付き合いを重ねました。その後にPIのライヴを観たのが2008年でした。以前とは若干のメンバー・チェンジがあって、再結成時のメンバーのギタリストであるMatt Brainardが復帰して、Jimとのツイン・ギターという編成になっていました。そのライヴ中には興奮した客の1人が靴をJerryに投げつけたんですが彼はその靴を取るや、ウオッカを靴に注ぎ込んでそのまま喉に流し込み「お前なんか飲み干してやるわ」位に靴を客席に投げ返してましたが、これには痺れました。靴やブーツに酒を入れて飲むのはShoe Beerと言って向こうでのパンク・パーティーでたまに行われますが、Jerryがステージでそれをやるとは皆思ってなかったのでかなりウケてましたね。それから彼等と再会したのは2年後のテキサスでした。フェス(Chaos In Tejas 2010)に出演していた彼等と記憶が飛んでしまう位痛飲しましたが、彼等が「WE MUST BURN」に収録されている、ライヴではやってはいけない日本のバンドのカヴァーをやってしまって僕がうろたえていた事だけは憶えています(笑)。

その後はPIを見る機会は暫くなかったんですが、当時のメンバーのMatt Brainard、Chris Cuthbert、Rawbo Knox達とはよく連絡を取り合っていました。もちろんJerryとも。ジャパン・ツアーの話もその当時から打診はしていましたがなかなか双方のタイミングが合わず、時間だけが過ぎて行きました。そしてChris Careyが復帰し、それ以外のメンバーが脱退したりと幾多のトラブルを経て僕が現行のPIと再会したのは2014年11月のこれまたポートランドでした。

FORWARDのUSツアーのキックオフ・ショーがBlack Waterで行われまして、その時のライヴで10年ぶりに彼らと共演しました。初期のギタリストの1人であるEric Lee Olson(ベジタブル)が復帰しているのは知ってたので、彼と共演する事を心待ちにしていました。かなりフレンドリーな人で彼の2人の息子も紹介してもらったりと楽しくバーで談笑してましたが、本番でいざステージに上がると2m近い巨体を揺らしながらギターを掻き鳴らすその様は、まさに「WAR ALL THE TIME」、「GETTING THE FEAR」、「IAN MACKAYE」時代のベジタブルでした。あまりに当時と同じ音だったので"The Temple"のイントロで不覚にも目から汗が出てしまいました。それ以来、今一度のジャパン・ツアーを打診してましたが来年は是非という事なので、多分2017年は楽しい年になりそうな気がします。

僕にとってのPOISON IDEAは本当の意味での不良であり、音楽的に各々の演奏レベルも最高で、でもやっぱり無茶苦茶と言うか、まあ、本当に無茶苦茶な男達の集まりです。過去メンバーもそうですが一度PIに在籍するとそうなるのか、もともと無茶苦茶な人間が集まっているのか全く同じ匂いがします。これからも長く付き合っていきたい大好きであり続けるバンドです。



骸 aka Guy/大小田伸二
(ORIGIN OF M/DISK SHOP MISERY/BLOODSUCKER RECORDS/SAVE THE HIROSHIMA)

POISON IDEAとの出会いは85年だった。

イラストレーターでもあり、ハードコア・バンドSEPTIC DEATHのヴォーカル、Pusheadが作ったワールド・ハードコア・コンピレーション「Cleanse The Bacteria」だったと記憶している。

NAPALM DEATHに影響を与えたボストン・カルト・スラッシュ、SIEGEが初めて世に出た名盤コンピレーション(日本からEXECUTEが参加している)。そのあとに1stアルバム「Kings Of Punk」を聴いた。

まずジャケットに目を惹かれた。身体を自ら切りつけて書かれた「POISON IDEA」の文字にインパクトを受けた!サウンドは勢い重視の直球サウンド!もちろん一発で好きになった。

でもルックスにはまだ、ピンとこなかった。パンク、ハードコアのイメージって、スリムでお洒落だからね(笑)。メンバーのうち、デブ2人のJerry AとPig Champion。大ファンになるにはちょっとね(笑)。今見ると、Jerry、痩せてるけどね(^_^)v Pig Championなんて所謂百貫デブやからね(笑)。

そのあと、2ndアルバム「War All The Time」を聴いた。スキルはあがっているけど、その分なんかメタリックになって構成もかっちりしててね。2ndになるとテクに目覚めてクソになる。「POISON IDEAよお前もか?」と思った(笑)。でも、まぁまぁ好きなレベルだった。

ワシが本当のPOISON IDEAファンになったのは90年発表「Feel The Darkness」からだ。もはやメタルと言っても過言ではない、そのメ

ロディーと構成。美しい旋律で始まり、ハードコア・ナンバーの激しさとメタルの完成度を備えた一曲目"Plastic Bomb"は鳥肌ものだった。

でも、当時の日本のハードコア・ファンの間では評価は真っ二つに分かれていた。"メタルじゃん"という派と、"そんなん関係ないくらいかっちょええじゃん"という派。ワシはもちろん後者。ていうか"メタルだと何で嫌いなの?"って、感覚はわかるけどね(笑)。でも結果、格好良ければそれでいいじゃん!!

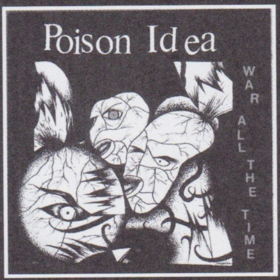
ブルージーで、ゆったりとしたナンバー、表題曲の"Feel The Darkness"なんかハードコアというかパンクさえ超越してる!CDにボーナス・トラックとして収録されているシングル・ナンバー"Discontent"には、本当にぶっ飛んだ!当時世界を席巻していたクラストの雄のEXTREME NOISE TERRORに影響を受けたというこのナンバー!本家より速く荒くありながら、その裏打ちされたスキルで半端ないクオリティーをも兼ね備えた暴虐サウンド!ENTのDeanとPhilのツイン・ヴォーカルを一人で軽くこなすJerry Aのセンスと声量にはほんまにたまげた!超個人的見解だけど、当時、世界一凄いクラスト・ナンバーは間違いなくこのナンバーだった!他をあまり知らんかったのもあると思うよ。でも今ほど流通がしっかりしていない26年前の話やからね。

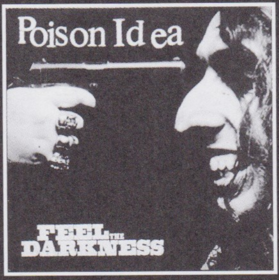
その後、ワシ的にはBASTARDがそれを越えるのだが、その話はまた別の機会に。

そのアルバムと前後して、Ian Mackayeをこけにしたミニ・アルバム「Ian Mackaye」、カヴァー・アルバム「Pajama Party」を聴いた。Ian Mackayeといえば、USハードコアの代名詞MINOR THREATのヴォーカル。ハードコア好きな人でこのバンドを知らない人はいないだろうくらい有名なバンド。彼の歌詞から生まれたストレートエッジ思想はハードコアだけでなく、今のベジタリズムにも影響を与えたといわれる偉大なパンクスだ。

そいつにむけて、ケツの穴を広げたPOISON IDEA!それは日本ハードコア・パンクの始祖、GAUZEが86年に発表した「Equalizing Distort」の収録曲"Crash The Pose"とおんなじだった。

ハードコアに動物愛護精神とベジタリアン思想を日本に伝えたのはイギリスのアナーコ・パンク・バンドCONFLICTだった。それよりも前にMINOR THREATは実践していたが日本盤が出ていなかったため、多







くのファンは知らなかった。輸入レコード屋に足しげく通うパンクスだけが知り得るバンドだった。

CONFLICTの思想は大きな影響を与えた。何の疑問も持たずに食べていた肉がどこから来たのか?女性が着飾るための化粧品の害を調べるために、どれだけの犬や猫が犠牲になったのか?ワシ自身もすごく衝撃を受けた。でもお肉料理の美味しさと女性の化粧は否定できなかった。だって両方とも好きなんだもの(笑)。

日本でも多くのパンクスがその思想に影響された。でもワシが見る限り、それはポーザーが多いように見えた。もちろん本気な人もいたけどね。

"チンポの先を 豆腐に ブチ込み
醤油をかけりゃ おまえは嘗める ベジタリアン
Crash the pose
これ食うな あれ食うな てめえに指図される覚えはない
食えるだけで十分だ"

上記のGAUZEの歌詞は痛快だった!!誰のことを歌ったかもメンバーから当時聞いたが、ここではとても話せない(苦笑)。

POISON IDEAのパンクとはシンプルだ!食うこと飲むこと。好きなことを誰にも指図されずにやりたいことをやる!ワシはメジャー・シーンにある意味守られながら女王陛下の悪口を歌うSEX PISTOLSなんかよりパンクを感じた。

感覚はDAMNEDだ!!実際にPOISON IDEAはDAMNEDの名曲"New Rose"をカヴァーしている。先出のカヴァー・アルバムに収録されている。GUNS N' ROSESが同曲をカヴァーしたときはメンバー内でひと悶着あったらしいが、POISON IDEAに対しては聞いたことがない。

このカヴァー・アルバムで知らなかった多くの音楽に出会えた。なかでも衝撃だったのはBOOKER T & THE MG'Sの名曲"Green Onions"だった。この曲と出会えて数か月後、県民文化センターに忌野清志郎&2・3'Sを見に行った。清志郎のルーツがBOOKER T & THE MG'Sだと知ったすぐ後だった。MG'Sのメンバーが来日し、清志郎が歌う。中学生の頃に聴いていたロックのレジェンドとハードコア・パンクPOISON IDEAが融合した瞬間だった。

感動した!ロックに垣根はないと思った!それからはPOISON IDEAの新譜を常に心待ちにしている自分がいた。

92年発表の「Blank, Blackout, Vacant」ではハードコアにグルーブを取り入れた。某メタル雑誌ではレッチリの真似なようなことを書かれた。担当をブチ殺してやろうかと思った(笑)。POISON IDEAがインスパイアされたとすれば、それはレッチリの前からそういうことを普通にやっていたBIG BOYSだよ。勉強しろよ(笑)。

ラスト・アルバムとされる「We Must Burn」ではなんとG.I.S.M.のカヴァーを披露。これがむちゃくちゃ完成度が高いのだ!横山SAKEVIさんとRANDYさんに直接指導を受けたのかと錯覚させるその暴虐サウンドには正直たまげた。

そして解散を惜しんだ。

その後、2004年に来日し、広島公演のオーガナイズをした。夢のような時間だった。Pig Championはいなかったが、"Plastic Bomb"では鳥肌がたった!

そのPig Championは今はこの世にはいない。

しかし彼らは新譜を作り上げ、世界を股にかけて活動している!本当にリスペクトだ!!

そして再び彼らと会えることを切望して止まない自分が好きだ!!それだけでワシは、ハードコア・パンクスなんだ!!



今村紀康

(TOM AND BOOT BOYS/ASUKA AND THE BUM SERVANTS/POGO 77 RECORDS)

POISON IDEAの原稿が何故かドランク街道にいる僕へ(汗)。僕が22歳の頃の甘酸っぱいアメリカ生活を思い出します(まぁ人生で一番ダメな時代ですが)。レコードを鬼買いまくってまして(百枚最低/月)、記憶だとニューヨークのダウンタウンのどっかのレコ屋で、ジャケ買いしたのが、そう大名作1st ALBUM「KINGS OF PUNK」(1986年)。鋲リングを腕にがっちり装着、カミソリで腹を切って"POISON IDEA"、んで、タイトルに…大好きな言葉"PUNK"ってついたらさ、おとうさん、買っちゃうよ!(当時は当然おとうさんでない)

帰宅して針を落としたらもう失禁、1曲目の大名曲"LIFESTYLES"イントロの破壊力!楽器隊が同時に行って、ドラムだけになってまた戻って…そこから突撃!僕あんまり凝った曲好きじゃないんだけどね。何だかハマりまくって、アメリカに住んでる時は毎日聴いてたから、POISON IDEAを聴くとアメリカ生活を思い出して涙が出ます(笑)。さて、これ以降の作品は思い入れはないけど、今あらためて聴いたら日本のハードコアに大分近くない?(みんな知ってるか・笑)

ドラマティックな展開のある系ね。どっちがどっちに影響されたのか、たまたまなのかは知らないけど。戻して1st ALBUMであまりのカッコよさに悶絶した僕は、過去へも遡るわけです。彼らの初めてのリリースになる「Pick Your King E.P.」(1983年)ですな。EL ZINE読んでるような変態な人々は既知だと思うけど、最高にぶっ壊れた初期80年USA HARDCORE PUNK。なんだけど、どっかが他のアメリカ・バンドと違うんだよな(この頃のアメリカって同じリフ4回繰り返して30秒で終わるとかじゃん。東海岸って書けばわかるか)。へっぽこなんだけど、恐怖感+違和感がある。まぁ彼らは西海岸の方だし、西と東で音全然違うから当然っちゃ当然か。考えすぎ(笑)?もちろん1st 7"に今後の音への伏線は既にある。そんな興味を持った僕はどんな人間(パンクス)がやってるんだ?と。写真を見た。倒れた(笑)。太り過ぎだろ!?その頃はパンク世代は若かったから基本痩せてるじゃない?全然イメージがない(笑)、ヴォーカルJerryの逸話(悪い方ね・笑)は数えきれないけど、何だか…凄いな…って思った。逸話は酷くてここに書けないけど(笑)。

まとめに入るけど、POISON IDEAに影響受けたバンドはもの凄いいるんだろうな〜。まぁそんな感じで、POISON IDEAの僕なりの思い出を書いてみたけど、あなたはどう(苦笑)?

Mr. Koketsu

POISON IDEAとの出会いは、「Kings of Punk」の裏ジャケのPig Championの写真と「Pig Champion」って名前にやられたのが最初です。あれは、アメリカン・パンク特有のフリーキーな格好良さを代表するジャケだと思います。誰か知らなかったけど、ジャケ買いしました。

音は勿論だけど、インタヴューを読んだり、歌詞を理解していくうちに益々彼らの事を好きになっていった。彼らの持つパンクのニヒリズムってのが10代後半から20代前半の僕の琴線に響いたのでしょう。"Romantic Self Destruction"なんてカッコいいタイトルだよね。

Pig Championが太っている理由について、スポーツをして体を鍛える事を讃え、考える事をしなくなっているアメリカ文化に対する反抗だ、なんて発言に感動したり、2ndの"Typical"って曲の詩の内容が、流行に乗って言う事や格好が変わる奴らに対する事って知ってさらに好きになった。それだけじゃなくて、ユーモラスな所もよかった。「Filth Kick」7"の性転換をしたい男の歌とか、「Ian Mackaye」12"のジャケとか(本当は、タイトルを"Ray Cappo"[YOUTH OF TODAYのヴォーカル]にする事も考えたけど、あえて元に行った、とインタヴューで言ってた)。

彼らが第一期活動中に行った唯一のアメリカ・ツアーの公演を2回見た(3回目に見に行ったロードアイランドは、キャンセル)。当時めちゃめちゃ好きで、一緒に住んでたWRECKING CREWが2カ所で一緒にやるって聞いた時は、嬉しかった。すげー興奮した。

一回目は、ニュージャージーのシティーガーデンズ(DISCHARGEがライヴ盤を録音した所)。大きい会場なんだけど人が全然いなかった。当時のアメリカ東海岸のハードコア・シーンは、脱スピード、グルーヴ重視系や体育会系美男子ストレートエッジが主流、しかも数年後に起こるパンク・リヴァイヴァルの前だったから無理もない。

開演前に遠くから彼らを見ていると、機材車の後ろのドアが観音開きになってて、そこにPig Championが座っていた。傍らには、酸素ボンベ。

一緒にいた奴「太り過ぎてるからああやって酸素ボンベが必要なんだぜ」

僕「カッコいい〜!!」

凄い好きなバンドがやる前って興奮してドキドキするけど、ライヴは、あんまりだった。長旅で疲れていたようだ。何日か後にはボストンでやったんだけど、Jerry AがSLAP SHOTのTシャツを着ていたのが可笑しかった。SLAP SHOTのメンバーがわざわざデカいサイズのシャツを作ってプレゼントしたそうだ。

地元の出演バンドやその取り巻きは凄く期待していたけど、この日もあんまり人が入っていなかった。ライヴの後、みんなでJerry Aに「俺達の家でパーティーしようよ!!」って誘ったけど、疲れてるって理由でSuburban Voice FanzineのAl Quintの住む郊外へ行ってしまった。みんながっかりした。悪名高き、世界一ウルサい酔っぱらい、POISON IDEAがボストン1のパーティー・クルーの誘いを断り、酒を飲まないAl Quintの家を選んだ事を…。

彼らの音楽は、今でもよく聴くし(特に1st 7"と1st LP)、聴くと未だに興奮する。個人的な願いだけど、一番良かった時代に得るべきだった名声を今回の活動で得て、Jerry Aが金銭的に困らない生活が出来る様になりますように。頑張れPOISON IDEA!!

鈴木智士

(焔と煙霧：http://tower.void-server.net/)

いつだったか、松竹の三大巨匠（と呼ばれるのを本人は嫌がったらしいが）のひとり、渋谷実の映画を立て続けに何本も見て、ただただ圧倒されたことがあった。『現代人』(1952)で池部良が演じた戦後派の若者のニヒルな運命論や、小津安二郎を完全に食ってしまった『大根と人参』(1962)はもちろんだが、なんといっても、信仰の裏切り、仲間の裏切りを描いて、最後には登場人物みなが磔にされて焼かれるという超バッドエンドを迎えるキリシタン時代劇、『青銅の基督』(1955)は、もう開いた口がふさがらない。たまにある、「何だったんだあれは」体験だ。徹底的にアイロニカルで、予定調和なんか知ったことかとありえない展開を見せる渋谷実の映画は、とんでもなくハードコアだった。あれ、これは何かに似てるぞ、ああ、渋谷実は日本映画のPOISON　IDEAなんだ。

「大袈裟に言ってしまえば、人は誰にも、その人のその後の「道」を行く（いや、踏み外す、が正解か）ことになってしまったバンドというものが、1つや2つあるはずだ。それまでの自分の音楽観や価値観を、文字通りひっくり返し、その後のパンク生活の指針になったようなバンドのことだ。私の場合、それはまだグラインドコアやデスメタル、メタリックなハードコアばかり好んで聴いていた10代の終わりに、当時住んでいた名古屋の今池ハックフィンで初めて見た、NIGHTMAREのライヴがまず1つ。パンクは、ハードコアは、速さ激しさはもちろん必要だが、「それ以上の何か」がなければ、何の説得力もない、単なる「速くてうるさい音楽」に成り下がってしまう、ということを、若い頃の私はNIGHTMAREのライヴに教わったのだった。

後は何だろうか、と考えていくと、そもそもハードコア・パンクって自分にとって何なのだろう、というとらえどころのない大きな難題にぶつかる。そんなこといちいち考えても仕方がないのかもしれないが、やはり気になる。先述の「それ以上の何か」、つまりソレを単なる音楽以上のものにする熱量のようなものが、私の場合、まず2本の柱として、ハードコア・パンクが元来持ってきた「全部自分たちでやろう」という創造性であり、それと同時に、国内のみならず、他の国々の似たような境遇の人々とも連帯する国際性だった。もう一つ、以前にもこのEL　ZINE誌上で書いたこともあるが、最近はたとえその連帯の中においても、「ハードコア・パンクとは真に個であること」を思うことが多いが、今回改めて考えると、やはりそこには、社会に対して、自分に対して、時には仲間に対しての「批評精神」こそが、ハードコア・パンクを独特のものにしていると言えよう。私的ハードコア・パンク3本柱の一つ、批評精神。それは一体どこで学んだのか。

ちょうどそのNIGHTMAREを見たころ、当時名古屋でNINE　CURVEというバンドをやっていたタバさんに誘われて、バンドを始めた。バンド名を決めるにあたって上がった候補が、"And　We　Burn"と"We Must Burn"の2つ。私たちはワケもなく燃えていたのだ。前者はHIS HERO IS GONEの曲から、後者はそう、POISON IDEAのアルバムからの拝借である。そんな大層な名前を冠した割に、バンドの音はクロスオーヴァーがかった速いハードコアで（最初はCRUMBSUCKERSの"Just Sit There"をひたすらコピーしていた）、果たしてバンド名と音がシンクロしていたかは正直微妙なところだが、そんな名前をつけてしまった以上、POISON　IDEAのことを意識しないわけにはいかない。そこで手あたり次第にPOISON IDEAのCDやレコードを買ったり借りたりして聴き込んだ。

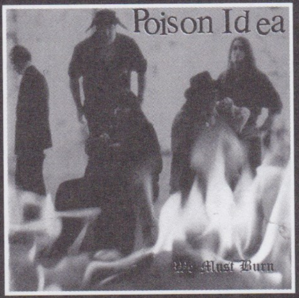
中でも印象的な歌詞を一つ。当時よく一緒にライヴをやっていたDISTRICTという名古屋のバンド（ベースだったAndyは今はMUR MURというバンドをやっている）が、よくそのキャッチーなイントロをカヴァーしていた、"Made To Be Broken"だ。

I only have one commandment
（掟はひとつだけ）
Destroy to create, build a new
（創造のための破壊だ、新しいものを創れ）

決まり事なんてクソだ、既存のルールなんてのは壊すためにあるものだ、というとてもアナーキーな歌だが、これぞハードコア・パンクがあるべき姿だ！と、若かった私は妙に納得した。何気なくつけたバンド名を通してアナーキーな洗礼を受けたあと、私は無我というバンドに誘われて加わり、さらにその「道」の深淵へとはまっていった…。

イアン・マッケイをコケにして怒らせ（あのレコードのリリースに際し、In Your Face Recordsの元にイアン・マッケイ本人からDischordのスタンプ付きで苦情の手紙が送られてきたという愛すべき小話！）、自分たちはドラッグや酒に溺れることで、「パンクはこうあるべき」とエラそうに説くマジメなハードコア・パンク・バンドを、攻撃的な曲とともに文字通り身をもって批判してきたPOISON　IDEA。先に書いた私的ハードコア・パンク3本柱の一つ、「批評精神」というのは、CRASSやCRUCIFIXのようなアナーコなバンドはもちろんのことだが、実はそれらとは一見対極にあるように見える彼らの、こういったアイロニカルな姿勢から大きな影響を受けて培ったものなのかもしれない。いや、ああいった破滅的なバンドや人というのはとにかくそれだけで魅力的だし、それは一種の憧れなのかもしれない。現実なんて知れてるから、自分がなれないもの、叶わないものに、より強く惹かれるのだ。

今や皮肉のひとつも通じない世の中が急速に押し寄せてきている。息苦しくて仕方がない。こんなときにはPOISON　IDEAを爆音でかけて、ワハハとすべてを笑い飛ばすしかない。おさきまっくらな世の中の唯一の処方箋だ。



岡本正貴 (kriegshög)

私のPOISON　IDEAとの出会いは高校1年生位の時だ。出会いと言っても、サンディエゴのローカルのレコード屋でなんとなく「Feel The Darkness」のCDをなけなしのバイト代で買っただけだ。予め断っておくが、私とPOISON　IDEAにはこれといった強い繋がりは無い。本コラムでは私の一方的な片思いを取り留めもなく綴らせてもらう。

初めに、少し"私"についておこがましくも触れさせてもらうと、私は当時アメリカのLAよりも南、メキシコの国境よりも北に位置するサンディエゴという場所に、親の仕事の関係で住んでいた。日本に帰って10数

Photo by Jason Charles



年経つが、そんな生い立ちを話すと決まって「カッコいいね」と返ってくるが、そんな良いもんじゃあない。ビバリーヒルズ青春白書の世界にアジア人のヒョロガリ中学生がポンっと自分の意思と関係無く放り込まれた、と言えばイメージし易いだろうか。日本の中学ではスクールカースト上位に君臨していた私も、周りが白人とメキシカンだらけの社会では、カーストの底辺に転落し、やり場の無い思いを抱えながら思春期を過ごした。

そんな私の鬱屈した心の拠り所となったのはハードコア・パンクという音楽であり、社会のヒエラルキーから爪弾きにされた私のような若者が集うライヴ・ハウスやレコード屋だった。

当時のアメリカはProfane Existenceの最盛期だっただろうか、私は当時の高校生パンクと同じようにUSクラストを主に聴いたりしていたのだが、中身が空っぽだった私はそれらのバンドの反戦メッセージがしっくりと腹落ちするわけでも無く、歌詞とは私にとってなんとなく眺めるものだった。

そんな中、初めて聴いたPOISON IDEAは楽曲のデタラメなカッコ良さはさる事ながら、一曲一曲の歌詞が私の度胆を抜いた。粗野なヘイト・フィーリングをJerry A.が彼のセンスを持ってして昇華させたリリックに驚愕した。「こいつら全てを憎んでる」と。

「俺の目を見て握手し、笑みを浮かべながら俺の死に方をいくつも想像してるんだろ?」(Plastic Bombより)

な、なんてネガティヴなんだ…握手しながらそんな事考えてんのか…俺、Jerryと会っても怖くて握手できねーよ…。

と戦慄を覚えたり、

「愛について歌った事なんかない、車を運転した事もない、そもそもこんなに遠くまで俺を運んでくれるマシン等見たこともない」
(Just To Get Awayより)

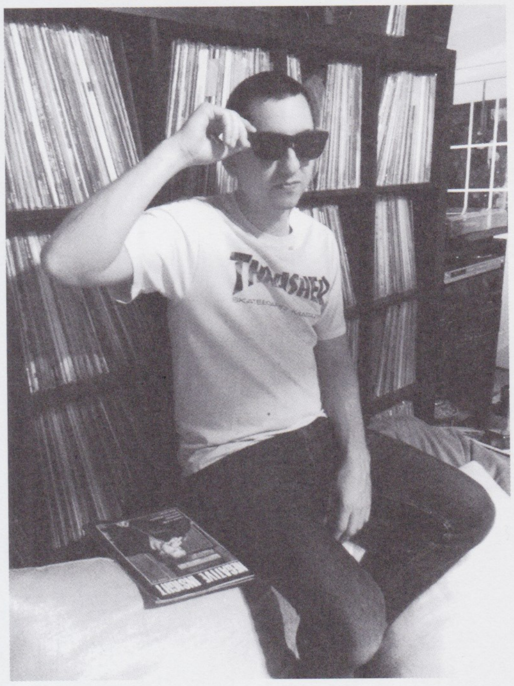
嘘つけ!!!車運転したことは無くても見た事はあるだろ!!愛を歌った事は確かに無さそうだけどな!!!

と、一人心の中で盛大にツッコみながら、当時の私はPOISON IDEAの極端でストレートで乱暴だけどユーモアのある歌詞に、惹かれてしまう。見るもの全てに痰混じりの唾を吐きかけるようなその不良全開アティテュードにバカ丸出し高校生の私は憧れてしまうのである。

人生を謳歌し、幸せ一杯な時間しか過ごした事の無い奴らがとにかく気に入らなくて、周りと違う自分達を嘆くどころか開き直る。世の中のクソみたいな価値観を斜めに眺めてメッタメタに皮肉る、これぞ俺の求めていたパンクだ!と震えながら私は何度も「Feel The Darkness」を聴いた。

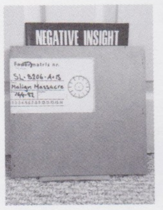
それから10数年経ち、私は、今はサンディエゴよりも窮屈で息の詰まる事の多い東京で生活している。生きるためには自身を抑え、誰かの理不尽に耐えなくてはいけない時も多々ある。そんな時、私はその理不尽な相手の死に方を幾通りも想像しながら忍ぶ、そう今もPOISON IDEAのスピリットは私の中で生き続けているのである。将来、自分の息子が学校でイジめられている事実を妻から聞かされるような事があれば、私は息子の寝てる間に、そっと「Feel The Darkness」の全曲をスマホにダウンロードしてあげるだろう。

最後になるが、確か、EL ZINE山路氏に本コラムを依頼された時、私に声をかけていただいた理由は「POISON IDEA来日時にDOLLで来日インタヴューとディスク・レヴューを書いたから」だった。きっと、来日時の話や、彼らの拠点のPDXパンク・シーンに触れる事を期待されていたのだろうが、こんなに"私"についてばかり書いたコラムになってしまった。出会いを書いただけで字数オーヴァーしてしまう程、POISON IDEAへの情熱(パトス)が私から滲み、溢れ、ほとばしっていると、山路氏と読者の皆様に解釈してもらえれば幸いだ。



第３号はGBGハードコア号で、表紙は1981〜1986年のスウェーデン/イェーテボリ・ハードコア・シーンになるだろうね

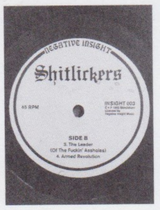
Erik from NEGATIVE INSIGHT











某日。「ハロー、エルジン」という一通のメールが届きました。開いてみるとアメリカのパンク・ジン:Negative Insightを発行しているErikという人物からで、「エルジンに広告を載せたいんだけど値段を教えて」とのこと。Negative Insightと言えば、80's UKHCの特集をしたり、ジンにCHAOS UKの7"EPを付属させたりと、ここ日本でもかなり話題になったファンジンですが、…ん、Erik?コレってSocial NapalmのErik?OFFSPRINGが好きなアノErik?2007年にドールでインタヴューしたじゃん!

というわけで、「久し振り!exドールのケンジだよ。エルジンを作っているのは僕だよ」と返信。Erikはその辺の事情も完全に把握していたみたいですが(流石マニアック!)、まぁ、なんやかんや話しが弾んで、「広告なんて無料でいいよ。インタヴューもやろうよ。あと、君のとったRiot City Recordsオーナーのインタヴューを転載してもいいかな?(←ゲスい)」と、なったわけです。

まずはErikのインタヴュー、そして彼によるRiot City Recordsオーナー:Simon Edwardsへのインタヴューと続けてお楽しみください。

尚、Simon Edwardsへのインタヴューはベラボウに面白いのですが、途轍もなく長いので、前編・後編に分けてお送り致します。

■僕が以前、君にインタヴューしたのは9年前のことでSocial Napalmについてだったけど、Social Napalmの近況について聞かせてもらえる?FUCK GEEZのLPが最新のリリースだよね?

「9年間でたくさんのことが変わった。だけどSocial Napalmはまだ活動中だよ。うん、FUCK GEEZのLP(MCR Companyの偉大なるYumikesがやっていたバンドさ!)が最も新しいリリースだね。僕がショーに行ったり、レーベル間でトレードしたりといった友人をリリースするためのレーベルがSocial Napalmだからさ。2017年には2つ、新しいリリースが控えていて、それはPEACEBREAKERS(SS DECONTROLやNEGATIVE FXみたいなボストン・ハードコア)とSAVAGEHEADS(ボストンのスラッシーなポゴ・パンク)の12インチになるだろうね。そう、だからSocial Napalmはまだまだ現役ってわけさ」

■Negative Insightを始めたのはどうして?2010年頃だっけ?

「Negative Insightの始まりは、VARUKERSのインタヴューを行なった2006年までさかのぼる。ティーンエイジャーの頃にゴミみたいなパンク・ジンを作っていたんだけど、またジンを作りたくなってね。だけど今度はもっと集中して、綿密に、真剣に作ろうと思ったんだ。ジンの方向性が見えてくるまでは数年かかったけど、始まったのは2006年で、第1号は2010年になるまで発行されなかったよ。実は、Negative Insightは僕の友人であるAaronと共同で作っているんだ。ほとんどの人たちは、連絡役やジンの対外的な役割を僕が担っているから、僕が一人で作っていると思っているけどね。ジンの作業は分担されていて、アイデアやプラン、その他の詳細について、時間を費やして議論を重ねているよ。ジンの目的は単純で、未だに謎のベールに包まれていて、好奇心に駆られる、大好きなハードコア・バンドを取り上げたいってだけさ」

■Negative Insightの第1号と第2号は80's UKハードコアを特集していたよね。君は主にアメリカのバンドをリリースしていたから意外に思えたんだけど。どうして80's UKハードコアを取り上げたの?もちろんCHAOS UKとかDISORDER、VARUKERS、SACRILEGEとかも大好きなんだろうけど。

「Social Napalmのリリースのメインはアメリカのバンドだね(特にボストンの)。Negative Insightだけど、Aaronと僕は2人ともブリティッシュ・ハードコアの大ファンだし、僕がパンクにのめり込んだのって、VARUKERSやCHAOS UK、DISORDERといったRiot Cityのバンドにヤラれたからだしさ。そして彼らはずっと常にお気に入りの存在でもある。長年彼らのファンだからこそ、ジンを作る上で彼らが真っ先にあがってきたんだよ。それに彼らのイメージと美的センスの多くは今尚、受け継がれている。アメリカのバンドはファッションも美的センスもイマイチだったのに対して、ブリティッシュ・バンドの格好は最高だったよね。そういったバンドの古いレコードは見た目も素晴らしいから、レコード自体が持っていたスタイルやイメージをジンのレイアウトにも取り入れようとしているんだ。CRASSやDISCHARGEの切り貼りしたアートワークを、ジンにもうまくハマるようにね」

■そしてNegative Insightの次号:第3号は80'sスウェディッシュ・ハードコア特別号って感じだよね!内容について詳しく聞かせてよ。どうやってSHITLICKERSやANTI-CIMEXとかのインタヴューをとったの?付属する

「GBG 1982」7インチも楽しみだね!
「第3号はGBGハードコア号で、表紙は1981〜1986年のスウェーデン/イェーテボリ・ハードコア・シーンになるだろうね。バンドへのインタヴューはSHITLICKERS、ANTI-CIMEX、DISARM、それにABSURD。他の特集はGBGハードコアを長年に渡って撮り続けているSebastian Todorのイカした写真を掲載、あとはイギリスで敢行されたANTI-CIMEXとAGONIによる"Chainsaw Tour '86"の詳細だね、2017年に発売の予定さ。どのようにして形にしていくかと言うと、それは過去の号とプロセスは似ているね。僕たちが何をしたいのかというザックリとしたアイデアがまずあって、それからバンドに連絡をとって僕たちの意図と、どんなジンなのかを説明しているんだ。ありがたいことにみんな興味を持ってくれて、それで話しを進めて行った。全てはバンドの功績だよ。どの号でも、彼らがどれだけ関心を示してくれるかにかかっているからね。彼らの協力なしには作れないし、僕たちはこれまで幸運に恵まれていたよ。みんな僕たちがやろうとしていることに対してオープンに受け入れてくれたからね。バンドの担っている役割は大変さ。僕たちが愛してやまない音楽を彼らは作り出している。だから、僕たちはその音楽をジンの誌面上に再編成している感じかな」

■ところで、最近のパンク・ジン・カルチャーについてはどう思っている?アメリカには素晴らしいパンク・ジンが多くあるのかな?

「アメリカのジン・カルチャーについては本当に何とも言えないな。僕が読んでいるのはほとんどが80年代のジンや雑誌なんだ。ThrasherやFinal Curtain、Problem Child、Metal Forces、Skate Muties、Raising Hell、Be Bad Be Gladといったね。ボストンのDeathwoundジンはデス・メタルとホラー映画を取り上げていて面白いし、サポートする価値はあるけどね」

■MRRがPDFファイルでの販売を始めたのには驚いたけど、オンライン・マガジンとか電子書籍についてはどう思っている?

「いいと思うよ。多くの人たちは、今では紙のジンを手にしたり読む時間がなくなっている。パソコンやタブレット、携帯電話なんかで読むほうがそういう人たちには容易だしね。若者はデジタルで雑誌を読むことに慣れてしまっているからさ。だから紙でもデジタルでも彼らにとっては些事なんだよ。デジタルによって紙の節約になるのもいいことだと思う。個人的には、僕は今でも紙のジンが好きだよ。Negative Insightのデジタル・ヴァージョンだとか、PDFで販売する予定もないしね」

■長いことマサチューセッツ州に住んでいるけど、パンク・シーンは変わってきている?

「マサチューセッツとボストンは、僕が初めてパンクに足を踏み入れた1990年代から様変わりしているね。当時はUNSEEN、DROPKICK MURPHY'S、SHOWCASE SHOWDOWNといったストリート・パンクが人気だった。だけど、1999〜2001年頃から始まり現在も続いているDIYシーンにはそれほど違いはないかな。この15年、幸運にもボストンからは本当に格好良いバンドが出てきている。BOSTON STRANGLER、BLOODKROW BUTCHER、SAVAGEHEADS、SLEEPER CELL、SCAPEGOAT、MISHAP、PEACE BREAKERS、それにもっともっとね。献身的で創造的、そして熱心な人たちが長年パンクと関わり続けているからシーンはとても強固だし、うまくいっているのさ」

■以前に日本のハードコアについて君は、"80年代の日本のハードコアはすごくミステリアスだ"とか、"日本のレーベルの多くがリリースを外国へ流通させていない"って言っていたけど、9年経ってその印象は変わってきた?

「これは完全に部外者の見方だよ。それに僕はここ以外のことについては喋りたくないしさ。でもこの9年で、数多くの古い日本のバンドが外国のレーベルからの再発に応じるようになったよね。事実か単なる僕の思い込みかは分からないけど、いいことだと思う。再発に値する音楽を作り出した、素晴らしい日本のバンドがたくさんいるし、これが今後も続いていくといいよね。僕は日本のパンク・シーンをすごくリスペクトしているからさ」

■ところで、今でも君はOFFSPRINGは好きなのかな?君が初めて聴いたパンク・バンドはOFFSPRINGで96年のことだったよね。

「ハハハ、そうだね、OFFSPRINGは今でも最高さ。特に最初の2枚のアルバムはね。僕とAaronは昔のカリフォルニア・パンクのサウンドが大好きだし、OFFSPRINGの最初のアルバムはその手のサウンドでもあったしね。あとはADOLESCENTS、DI、AGENT ORANGEといったバンドや、メロディック・パンクの作品も格好良いよ。Rikk AgnewのソロLPはいつだって僕のお気に入りの作品さ」

■今後の予定は?

「まずはGBGハードコア号だね。並行して、GBGハードコア号の発売と同時に第1号も再版するつもりなんだ。その再版にはVARUKERSの7インチをつけるんだけど、レアな3曲が収録されていてね。「Behind the Realms of Madness」LP時のSACRILEGEのメンバー、その4人中3人によって1984年にレコーディングされた音源なんだよ。僕たちはいつでも新しいプロジェクトやコラボレーションに興味があるしオープンだから、これを読んでいる誰かが、何かアイデアがあれば連絡してほしいな。君が55歳だろうが15歳だろうが気にしないよ。面白そうなプロジェクトならやりたいからさ」

■再びインタヴューさせてくれてありがとう。日本の読者にメッセージをお願い。

「長年にわたるケンジのサポートには心から感謝しているよ。それに日本のショップやレーベル、ディストロ、その他にも僕たちをサポートしてくれている人たちに多大なる感謝を。日本には伝統的で偉大なるシーンが常に存在していて、それを僕たちはとてもリスペクトしているんだ。日本のパンクスが示すプロフェッショナリズム、努力の成果、そしてその勤勉さにね。奮い立たせられるよ。僕たちに興味を持ってくれてありがとう」


共同制作者の Aaron くん





Riot City Recordsは1980年から1984年の間に存在し、UK82期の最高のレコードとバンドをリリースした。そしてNo Future Recordsと共にRiot Cityはインディーズ・チャートを独占し、決して消えることのない影響をパンクに与えたのだ。このインタヴューの大半は2008年に行われ、優しく思いやりのある男、Simon Edwardsが全ての質問に対して率直に答えてくれている。インタヴューに応じてくれたSimonには多大なる感謝を捧げたい。尚、写真の大部分はBristol Archives Recordsのサイトから拝借した。

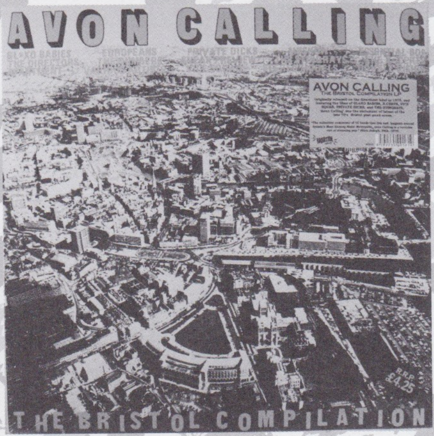
INTERVIEWED:Negative Insight

■どのようにして、いつから、レコード・レーベルで働くようになったのかな?あなたはHeartbeat Recordsのオーナーだったの?

「そうだね、僕はHeartbeat Recordsのオーナーだったんだ。僕のバックグラウンドには、僕がバンドをやっていたってことが実はあってね。それからバンドのマネージングをしたり、彼らの世話やレコーディングをするようになったんだ。インディペンデント・レーベルみたいなことを始めたのは1976~77年だね。うまくいくだろうという考えもあったし、それでHeartbeat Recordsを始めた。バカバカしい質問をしまくっていたね。"これはどうやるの?これはどうするの?"ってね。そして聞いたままにやった。そうやって始まったのさ」

■VICE SQUADとはどのようにして関わるようになったの?Heartbeatの「Avon Calling」コンピレーションにも参加していたよね。

「その通り。そうだな、Heartbeat Recordsをやっていたときは、基本的にブリストル周辺の、地元のバンドのためにやっていたんだ。当時はバンドがたくさんいた。おかげでレーベルの需要はあったんだけど、需要に応えられるだけの充分な数のレコードを出すことができなかったんだ。だから「Avon Calling」を出したのさ。一枚のレコードに数多くのバンドを収録できるのは明らかだし。そしてバンドはラジオでかけてもらって、人々はそれを耳にすることができるからね。VICE SQUADは僕にデモ・テープを渡してきたバンドのうちの一つだった。彼らはよく地元でプレイしていたし、僕はすごく感銘を受けていた。それで、うん、彼らにも参加してもらったんだ」



■どのようにしてRiot Cityは設立されたのかな?そして、どうしてHeartbeat RecordsからVICE SQUADのEPをリリースしなかったの?

「Heartbeatは基本的に、幅広い音楽のためのレーベルだったからね。君がHeartbeatの全リリースを聴いたとしたら、その多くがそれぞれ全く異なってることが分かるだろう。フォークもあればハード・ロックもあるし、パンクもある。だからかなり広範囲の音楽を網羅する傾向にあったんだ。だけどVICE SQUADに関しては、「Avon Calling」をリリースした後、彼らは4曲入りのデモを僕に渡して来たんだ。EPとして出したいってね。当時のHeartbeat Recordsはライセンスの取引をロンドンのCherry Red Recordsとしていたからレーベル間の繋がりがあった。彼らにたくさんディストリビューションをしてもらったりね。それで僕はCherry RedのIain McNayにデモ・テープを聴かせるなんてこともよくあったんだ。だからVICE SQUADのテープを手にしたとき僕はこう言ったのさ。"見ろよ、こんな新しいバンドが出てきたんだぜ。彼らは「Avon Calling」にも参加していて、今はEPに取り掛かっているんだ。最高だろ"ってね。それからテープをかけたんだけど、あいつときたら不愉快だ、なんて言いやがった、ハハハ。まるで好みじゃなかったみたいでね。おまけに"Cherry Red Recordsとしては一切関わりたくない。ディストリビューションであろうともね"なんて言ったんだ。だから僕は"分かった、分かった"と応じたけど内心は、"クソッタレ、僕が一人でやらなきゃならないってのかよ"と思っていたな。ファースト・プレスは1500枚と決めてしまっていたけど、前言撤回もしたくないからね。一方、僕たちがそんなことをする以前に、VICE SQUADは自分たちでレーベルを設立



しようと決意していた。パンクの第二波がやって来て、数多くの新しいバンドが始動していたから、彼らはそのマネージングをしようとしていたんだ。そしてそのレコード・レーベルから、多くの新たなパンク・バンドをリリースしようとしていたのさ。彼らは、そのレーベルをRiot City Recordsと命名しようとしていた。なぜなら当時、僕たちの街ブリストルの貧困地区では人種暴動が続発していたからね。当然、ブリストルに暮らすたくさんのキッズが怯えていたし、何が起こるのかを心配していたよ。僕たちは本当にブリストルが"暴動都市"になるんじゃないかと考えていたんだ。だからレーベルをRiot City Recordsと名づけるのがピッタリだと思ったらしい。ただ、1st EPをリリースしたVICE SQUADは、インディペンデント・チャートの一位になるくらいにすごく売れて、ツアーを開始したりと目に見えて忙しくなっていた。それでレーベルができるかどうか不安になっていたので、レーベルのマネージメントに関しては基本的に僕に任せるようになったのさ」



■「Last Rockers」のファースト・プレスはたったの1500枚だったけど、それが22000枚も売れて、しかもチャートに40週間もい続けることになるなんて想像できた?

「うーん、ノーだね。Heartbeat Recordsのリリースでは、シングルが2000枚とか3000枚も売れれば僕にとっては御の字だったからさ。あんなセールスを叩き出すなんてすごいことだよ。VICE SQUADの「Last Rockers」を発売したときなんて、1500枚が3、4日で売れちゃったんだ。信じられなかったな。"なぜだ、ここで一体何が起こっているんだ?"って思ったね。それで僕はもう1500枚を追加プレスした。これでもう売り上げ見込みを達成したと、そう思ったんだ。ところがまたもや3、4日で売り切れた。僕は、"クソ、こいつは考えを改めないといけないな"と思って、今度は10000枚の追加プレスをしたんだ。まさにクレイジーだよ、僕はこんな風になるなんてまるで期待していなかったからね。だけど当時は、パンクの第二波が本当に盛り上がっていたんだ。CHRON GENやEXPLOITEDといったバンドもね。全てが狂乱の中にあって、盛り上がっていたのさ」

■VICE SQUADは成功したけど、彼らがEMIのZonophoneレーベルと契約したときには、あなたはどんな気分だったの?彼らがEMIと契約することによって、Riot Cityは一気に注目されるようになったのかな?それとも損害を被った?

「うーん、実は彼らがEMIと契約することを僕は賛成しなかったんだ。彼らにとっては何一つ良いことがないと思っていたからね。"VICE SQUADに対する需要があるとするならば、Riot Cityとして自主的にその需要に応じるのに"って考えていたんだ。それに、僕は今でもそうすることができたと信じている。EMIよりも僕のほうがVICE SQUADのレコードを売ったということを実は知っているし。まぁ、それは別の話しか、ハハハ。バンドはマネージメント・チームを得た。いや、チームではないな。だけど、彼らのために働く2、3人の男たちが派遣されて、EMIと契約するようにけしかけていたね。もう僕にできることは多くはなかった。僕は彼らの音楽をリリースするだけ。だから僕はこう考えることにした。"僕がリリースを続けられる限りは、バンドがEMIのためにレコードを出したとしてもそれは全然かまわない。だって、少なくともRiot Cityがリリースさえすれば、EMIの売上高から利益を得ることができる。そうすれば、僕は他のバンドの新しいシングルを出すことができる"。そう考えるようにしたんだ。だけど、いや、彼らがしたことは嬉しくなかったね。多分、彼らは異なるタイプのオーディエンスを得たとは思うよ。当時、パ

Riot City Records
Simon Edwards interview

暴動都市物語 前編



ンク・ロックを売っていた多くのインディペンデントなレコード店は、EMIのレコードを仕入れたがらなかったから。たとえSEX PISTOLSがEMIに所属していたとはいえね。でもSEX PISTOLSは…ちょっと珍しいケースだしさ。彼らはメジャーと契約したけど、パンクの第二波はもっとインディペンデント気質があった。VICE SQUADはEMIと契約せずに僕と共に留まっていればもっと売れたと思うよ。本当だよ。前述したような理由でね」

■彼らがEMIと契約したことによって、レーベルに対する、"ハードコア"パンクスからの憤りと混乱が巻き起こったと言うことはできるかな?

「うん、まさにね。VICE SQUADのDaveとShaneがRiot Cityと名づけたんだよ。なのに、彼らはEMIのリリースのために、Riot Cityを部分的に利用しようとしていた。でもそのときは満足していたよ、気にもしていなかった。僕はRiot Cityの名前を欲していたからね。だから、僕は自分のリリースにRiot Cityを使っていたし、彼らも、彼ら自身のために使っていた。あのとき、僕たちはハードコア界から激しい非難も受けた。特にCRASSのメンバーは不満だったようで、僕がEMIとのパイプ役を務めていると考えていたみたいだよ。CRASSは共通した傾向として、ハッキリとEMIを嫌っていた。僕はEMIとの繋がりなんて少しもなかったんだけどね。僕とEMIとの唯一の関係と言ったら、僕がリリースするVICE SQUADの音源に対して彼らがお金を支払っていたという、ただそれだけさ」

■あなたは、パンクはインディペンデントであるべきだと強く感じていたのかな?つまりメインストリームの音楽産業の外側にいるべきだと、思っていた?ハードコア・パンクのDIY思想に共感していた?

「DIYとインディペンデント的なことには共感を抱いていたよ。だけど、あらゆるジャンルの音楽は、一つの場所に留まるべきではないとも思っていた。もし企業がパンクをリリースしたくて、真っ当にキチンと対応するのであれば、僕は喜んで協力するよ。要するに全ては音楽ありきなんだ。もし君が格好良い音源をリリースしたならば、僕はそのレコードの購入者として君を支持するよ。どんなレーベルかなんてかまわないのさ」

■あなたが当時、フルタイムの仕事を持っていたことを僕は知っている。だけど、レーベルで食べていこうとは考えなかったの?

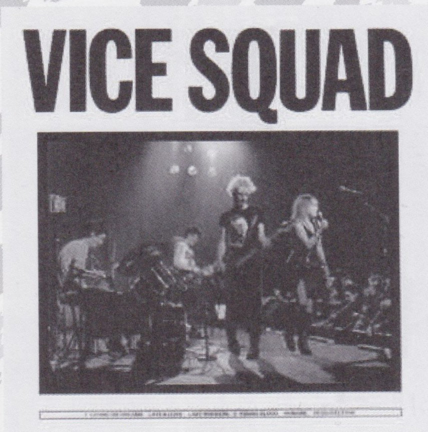
「何度も考えたよ…。だけど、僕はリスクを冒すのが苦手でね、ハハハ。僕は恐らく、世界でも最悪のビジネスマンの一人だろうよ。僕はありとあらゆる激務をこなして、そこいら中を駆けずり回って狂乱の真っただ中にいた。だけど、苦労して手に入れた自分の稼ぎを投入していたんだ。だから答えはノーさ。一番大切なのは家族だしね」

■当時、あなたは何歳だった?新しい世代のパンクスとは立ち位置が違っていたから、付き合っていく上での困難はあったのかな?

「始めた当初は30歳だったね。だからバンドをやっていた多くの連中よりは大分年上だったよ。僕が若かった頃は、SMALL FACESやTHE ROLLING STONES、THE WHOに夢中だった。まぁ、その手のバンドにね。それと、僕がパンク・ロックと呼んでいた音楽にもずっと夢中だった。僕は常に怒りや不安感を好んでいた。だからそういった気質や感覚を伴ったキッズとなら馴染むことができたよ。キッズと一緒にいて疎外感を感じたことはなかったかな。うまく付き合えていたよ。それに僕はずっと、バンドの5番目ないしは6番目のメンバーであろうとしていたんだ。彼らがしなければならなかったことの手助けをしたかったんだよ」

■VICE SQUADの最初の2枚のEPの後は、THE INSANEとABRASIVE WHEELSのシングルを…。

「うーん、いや、実際は違うんだ。僕たちはVICE SQUADの最初の2枚のEPをリリースして、「Resurrection」EPの3度目となるツアーをやったんだ。そして、最初の2枚のEPを収録した12インチを出したんだよ。ツアー用のリリースみたいな感じでね。それがRiot Cityの3作目だよ」



■VICE SQUADがTHE INSANEとABRASIVE WHEELSを選んだの?いつから君がレーベルに関する全ての決定権を握るようになったのかな?

「僕たちがツアーに出ていたとき、2、3回ほどTHE INSANEと共演したんだ。それでTHE INSANEとVICE SQUADは友人になってね。だからTHE INSANEは明らかにVICE SQUADによるリリースさ。ABRASIVE WHEELSのことはVICE SQUADが知っていたし、僕も彼らのことは知っていた。だけど、僕は本当にこのバンドを手掛けたかったんだ。なにせ、僕は彼らが自主でリリースした「Army Song」を聴いていたし、あれはものすごく素晴らしかったからさ。そしてレーベルに所属するのは、バンドにとっても良いことだと思ったんだ。僕の手によるRiot Cityからの初リリースはABRASIVE WHEELSなのさ」



■THE INSANEとABRASIVE WHEELSが、それぞれNo FutureとClayに行ってしまったことにはガッカリした?

「いや、そんなことはないよ。今でもそうだけど、音源をリリースするのと同じくらいは買っているからね。僕はその頃、他のバンドのレ



コードも大量に買っていた。だから色んなレーベルと友好関係にあったし、彼らがしていることもすごく僕の好みだったよ。もしバンドが他に行きたくなっても邪魔をするつもりなんてないしね。僕はそんなことをするタイプじゃないからさ。大量のシングルとアルバムを3年の間に作れ、なんて契約をバンドと交わしたこともないし。僕とバンドとは、すごくリラックスした関係だったんだよ。THE INSANEよりもABRASIVE WHEELSと言うか、つまり僕はABRASIVE WHEELSが大好きだったんだ。彼らとは本当にうまくやれていたし、音楽も素晴らしかった。もちろん、彼らが留まってくれたらナイスだったけど、移籍したことは全然気にしていないよ、当たり前だろ。移籍して行った全てのバンド、その去っていく姿を見るのは悲しかったけど、その後も僕は彼らを支持していたよ」

■そうだね、現実を受け止めよう。だけど、彼らがClayからリリースした作品よりもRiot Cityからの作品のほうが良かったよね…。

「うーん、君はそう言うけど、まぁ、僕も同意するよ、ハハハ」

■いつ、どのようにして「Riotous Assembly」コンピレーションのアイデアを思いついたのかな?

「ちょっと繰り返しになるけど、前に僕が説明した「Avon Calling」と似ていてね。国中から何百本というデモ・テープが送られてきていた。君もそう感じるだろうけど、僕も、彼らのうちの何組かだけでもサポートしたかったんだよ。それで、デモ・テープを送ってきたバンドの曲を一枚のレコードにまとめてリリースしたんだ。「Riotous Assembly」は聴くに値するデモ・テープを融合させたものと言えるね。いくつかのバンドはいい感じだったけど、そうとも言えないバンドもいたね、ハハハ。申し分のないアルバムだったと言えるし、良かったよ。面白かったね」



■どのようにしてコンピへの参加を求める宣伝を行ったのかな?取り上げたくなるようなバンドからのデモ・テープは、何本くらい届いたの?

「Soundsマガジンに小さく掲載しただけだよ。たしか、僕はとあるジャーナリストとこんな話しをしていたね。"なぁ、僕は閃いたよ、コンピレーション・アルバムを作るんだ。バンドにデモを送ってもらってさ"。だけど、それを実行に移す前からデモは送られてきていた。だから採用することのできるバンドが少数だけど既にあったのさ」

■このコンピであなたは"CHAOTIK DISCHORD"と初めて出会ったわけだよね。でも、COURT MARTIAL、UNDEAD、EXPELLED、CHAOS UKといったバンドに初めて連絡をしたのも、このコンピを通じてだったのかな?

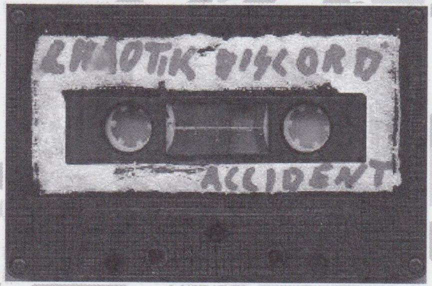
「そういったバンドは全て地元のバンドだったからね。彼らが住んでいた町に僕も住んでいた。だからギグやパブなんかでバッタリ会ったりするんだよ。そして、彼らはカセット・テープを渡してきて、こう言うんだ。"ちょっと聴いてみてくれよ。この音源をどう思う?"ってね。僕は彼らのライヴも見る。そして僕が感銘を受けたならば、バンドに言うのさ。"さぁさぁ、みんな、シングルを出そうじゃないか"とね」



COURT MARTIAL

■コンピレーションに参加していたバンドの中には、今後のレコードもRiot Cityから出したいと申し出るようなバンドはいたのかな?

「そんなバンドはいなかったよ。参加していたバンドの多くが、それほど活動していなかったからとても無名だったし。彼らの提供してくれた、その一曲こそが素晴らしいと僕は感じていたし、彼らにはキッカケが必要だったんだ。あのコンピが、Riot CityからEPを出すための踏み石だったなんてことは全くない。彼らの行動を促すための手段だったのさ。"みんなに聴いてもらうための機会は用意した。今こそ、この機会を自分たちのために利用して、何か行動を起こすんだ"というね」



■CHAOTIK DISCHORDのデモに関する話しを詳しく語ってもらえるかな?CHAOTIK DISCHORDのメンバーがVICE SQUADだと分かったときは、どんな気持ちだった?

「ハハハ、"ムカつくぜ!"って感じかな?そう言えるだろうね。僕がどのようにしてデモ・テープを受け取っていたかと言うと、パブで手渡してくる奴もいれば、茶封筒に入れて送ってくる奴もいた。だから、そいつらが誰なのか分からないこともあるのさ。誰にでも成り得るしね。それで、僕はある日の夕方、パブにいたんだ。す

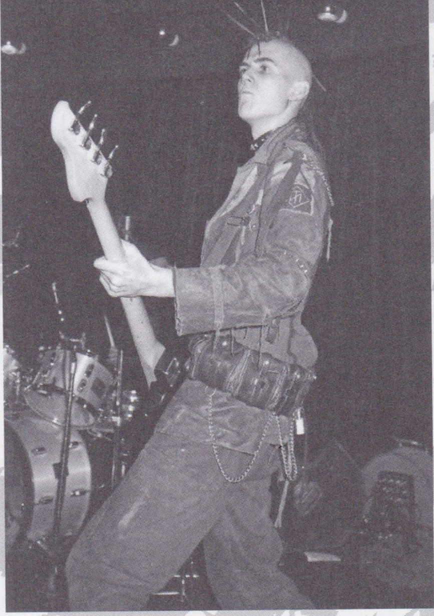


るとVICE SQUADのメンバーが全員そこにいた。そしてメンバーは僕にこう話しかけてきたのさ。"スウィンドンのCHAOTIC DISCHORDってバンドが俺たちにテープを送ってきたぜ"とね。そのバンドは、僕にテープを渡してほしいと頼んできたらしい。どうやらレコード・レーベルの人間と直接話したくはないみたいでね。僕はバカバカしいと思ったけど、受け取ったんだ。そしてこう考えた。"そうか、人と話すのが好きな奴もいれば、嫌いな奴もいる。僕みたいな業界の大物と会うのに、ちょっと躊躇しちゃう奴もいるんだろうな"なんてね、ハハハ。それから、"クソッタレ、とりあえず聴いてみるか"と、そのテープをかけたんだ。そしたらすごくいいじゃないか。だけど、このバンドが誰なのか僕にはサッパリ分からない。何一つ知らないんだ。そうしていたら、君はAMEBIXは知っているよね?」

■うん、もちろん。

「そうか、そうしたら、AMEBIXのメンバーの一人が僕にこう言った。"Simon、あんたは騙されているぜ。このバンドは間違いなくVICE SQUADの野郎どもさ"。僕は、"そんなバカなことがあるかよ。このサウンドがVICE SQUADだって?"と思ったんだ。でも、きっと彼は知っていたんだろうね、ハハハ。クソ、こいつはまさにロックンロール・スウィンドルだよ、そうだろ?ハハハ」

AMEBIX の Rob "The Baron" Miller (1983)



■VICE SQUADのサイド・プロジェクトは、CHAOTIC DISCHORDとSEX AIDS、DEAD KATSSの他にありましたか?

「それだけだよ。だけど彼らはResurrection Recordsという自主レーベルを起ち上げたんだ。一枚シングルを出したよね」

■そのシングルは何だったの?

「その酷いバンド名を思い出そうとしているところなんだけど、教えてくれよ。僕はもう年寄りなんだから!頭が回らないんだ」

■もしかしてLUNATIC FRINGEじゃなかった?

「そうだ、LUNATIC FRINGEだ。「Riotous Assembly」にも収録されていたね」

■そうだね、たしか彼らはその後、CORからEPを出したんだ。

「うん、Children Of The Revolution(COR)からだったね」

■SEX AIDSとDEAD KATSSにはもっと作品はないのかな?SEX AIDSには3曲入りのEPがあるだけだし、DEAD KATSSはコンピに1曲収録されているだけ…。もっとあったりしないのかな?

「僕が知る限りでは、それ以上の曲はないよ。だけど、僕は以前に騙されているからね。彼らがアルバムを手に、僕の自宅のドアを叩いたとしても驚きはしないよ。"やぁ、俺たちは1981年にアルバムを録音していたんだ。リリースするか?"なんてね。いや、そんなことはないな、そんなことが起こったら驚きだ。彼らがそんなに曲を持っているわけがない、ハハハ」

■CHAOTIC DISCHORDの「Now! That's What I Call A Fuckin' Racket (Vol.1)」LPをリリースするために、Not Very Nice Recordsという新たなレーベルを設けたのはどうして?

「まさにそれが理由さ。これもまた、VICE SQUADのドラマーであるShaneの発案でね。違ったレーベル名で実際に出したら笑えると思ったみたいでさ。全てRiot Cityとしてやったんだけど、レーベルの名前だけをNot Very Nice Recordsに変えたんだ。だって、これって"全然良くない"レコードだったからね、ハハハ。事実、こんなタイトルにしたおかげで、後になってEMI Americaとトラブルになったしさ」

■その、今言った"トラブル"について説明してもらえる?アメリカのPunkcoreがそのアルバムを再発したことと(※2001年にリリースされた)、EMIの"Now"シリーズ(※「Now That's What I Call Music!」はその時々のヒット曲を集めた、EMIによるコンピレーション・アルバムのシリーズ名)が関係しているんだよね。

「うん、「Now! That's What I Call A Fuckin' Racket (Vol.1)」がアメリカで再発されたときに問題になったんだ。EMIはそれを見つけて、法的な正当性を盾に禁止命令を出して僕を脅してきたのさ。だから僕はこう主張した。"中東では公然と、EMIの作品のブートレグが"承認"された上で販売されているだろ。それに対しては何も騒ぎ立てないのに、どうして2、3千枚を売っただけの僕に対して、真っ先に飛びかかって来るんだよ"ってね。もちろん、EMIは僕にそんなことを言われたくなかっただろうね。そして、僕は潔く降参したよ。この話しは以上さ!」

(以下、次号に続く)



LOS CRUDOS
ilegal, y que?

EL ZINEのvol.21ではSOLUCION MORTALへのインタヴューを行なった。今回のインタヴューでは、真っ先にLOS CRUDOSが思いついたよ。彼らにも強烈に批判する歌詞がいくつかあるからね。そしてLOS CRUDOSはアメリカにおいてスペイン語で歌った初のバンドの一つでもあるしさ。ギタリストであるJose Casasへのこのインタヴューをどうか楽しんでもらいたい。そして今年の12月に来日するLOS CRUDOSを目撃してもらいたいな。サルード・アミーゴス。

INTERVIEWED:Luis PHOTO:JjCa

■やぁ、Jose。このバンドはどのようにして結成されたのかな?

「俺と他の2人、LOS CRUDOSのオリジナル・メンバーであるOscarとJoelでFUCK THE BUREAUCRACYというスラッシュ・ハードコア・バンドをやっていたんだ。そして、俺たちはMartinと会うべきだなって話しをしていた。彼は俺たちより5歳くらい年上だし、シカゴのパンクとDIYシーンに俺たちの誰よりも長く関わっていたからね。Martinはスペイン語で歌うってのを提案してきてくれて、そして俺たちは3つの楽器全てを既に用意できていた。だから、こうしてMartinがヴォーカルになったのさ」

■バンドを始めた当初から狙っていたサウンドはあった?

「うん、Rawだね。だからこそ、俺たちはLOS CRUDOSという名前なんだよ。当初、曲はもっとゆっくりでパンクだった。だけど時が経つにつれ、スピードが上がっていった。俺たちが、80年代初期のイタリアン・ハードコア・バンド、RAW POWERやIMPACT、WRETCHED、CHAIN REACTION、CCM、PEGGIO PUNX、NEGAZIONEを模倣しようとしていたかどうかは定かじゃないよ。けど、当時はその手のバンドをよく聴いてはいたんだ。今でも聴いているけどね」

■歌詞についてだけど、伝えたいメッセージはどういったことなのかな?

「俺たちが伝えたかった主要なトピックは2つ。1つはラテン・アメリカからやって来た移民の子供たちが経験したこと。そして、植民地主義と帝国主義によってラテン・アメリカにもたらされた、アメリカによる悪影響の歴史。過酷な状況が故に、俺たちの家族はアメリカへと渡らなければならない。こういった話しを、パンクを通して伝えようとしているんだ。もう1つは、アメリカ国内にいる若いラティーノが経験したこと。アメリカ社会のメインストリームの外側へと追いやられ、不要の不法侵入者として扱われている奴ら。バリオスという、インフラとサービスが悪化し、白人のアメリカ人が見捨てたシカゴ郊外の都市に暮らす奴らのことを伝えようとしているんだ」

■90年代のシカゴのラティーノ・パンク・シーンはどんなものだったのかな?LOS CRUDOSを始めるにあたって、ハードな状況はあった?

「俺たち4人はシカゴのラティーノ・パンク・シーンにいた。俺たちを見に来るメキシコ人のメタルヘッズも何人かはいたが、それを除けば、シカゴにおける"ラティーノ・パンク・シーン"はまだ初期段階で、1993年以降、日々成長していったんだ。ピルゼンやリトル・ヴィレッジという2ヵ所が主だったメキシコ人の居住地区で、俺たちの出身地でもあったんだけど、そこにパンク・シーンはなかった。だから俺たちが始めた頃は、この2つの地域でショーを演奏したり企画したんだ。近所の人たちに来てもらいたかったんだよ、ラティーノではないパンクスが、俺たちを見るためにやって来るのと同じくらいね」

■初めてのデモ音源を録ったのはいつのこと?なんていうタイトルだったの?

「1992年から一緒に練習をするようになって、その2ヵ月後に録音したんだ。6曲入りのデモで、「Libertad」というタイトルだった。カセットの表紙に描かれていることを指しているんだと思うよ」

■"We're that Spic band"という曲について聞きたいんだけど(※Spicは、ラティーノを侮辱する言葉)。これは何を伝えようとしているの?パンク・シーンで人種差別を受けた経験があるのかな?

「"We're that Spic band"は、アメリカに暮らすラティーノである俺たちからの"Fuck You"といった返答さ。俺がシーンにいて、個人的に人種差別を受けたという経験は思い出せないな。だけど、たしか1993年頃、セントルイス郊外でのショーで一度だけ、レイシストのパッチやTシャツを着た10人くらいのスキンヘッズがギグにやって来てね、ピットで主に白人のパンク・キッズを殴り続けていたんだ。だから俺はピットで弱い者いじめをする奴らと喧



嘩を始めた。自分たちの演奏の前にね。そしたら、奴らの怒りの矛先は俺になった。俺たちの演奏中、奴らは馬鹿げたレイシスト・ジョークで野次ってきたけど、その後は幸運にも何事も起きなかったよ」

■LOS CRUDOSの初めてのショーについて語ってもらえる?

「初めてと、2回目のショーはそれぞれ全然違ったな。初めてのショーはシカゴの郊外にある写真スタジオで、見に来ていたのも演奏したのも、ほとんどが郊外に暮らす白人のパンク・キッズだった。2回目はMartinの地元のピルゼンで、友達の家の地下室でやったんだ。来ていたのはパンクではないラティーノが大半で、パンクスは他所から来た奴らが少しだけって感じだったよ」

■ツアーをするようになったのはいつから?どんな都市を訪れたのかな?

「2ヵ月間に渡る初めてのアメリカ国内ツアーをしたのは、93年の夏だったね。HUASIPUNGOと一緒だった。西海岸も東海岸も行ったし、その間に位置するたくさんの場所も訪れたよ」

■初めてのメキシコ・ツアーについても聞かせてよ。それはどのようにして実現したのかな?アメリカから出たのはそのときが初めて?

「94年の夏に1ヵ月、メキシコをツアーしたんだ。モンテレイから南へ進みオアハカまでね。途中でメキシコ・シティやいくつかの都市も廻ったよ。そしてLOS CRUDOSとして、初めてアメリカ国内から出たときでもあるね。インターネットが普及する前のことだったから、MRRに少し露出して、あとは主に手紙や電話で連絡を取り合っていたんだ」

■誰がLOS CRUDOSのアートワークを担当していたの?また、どうしてアメリカ先住民の画像をジャケットに使うことを選択したのかな?

「俺たちが好きだったラテン・アメリカの写真集から、その画像を選んだんだ。ラテン・アメリカには先住民が多く住んでいる、特にメキシコとペルーにはね。子供だった頃、アメリカとラテン・アメリカにいる先住民は存在価値が低いと、そう俺たちは教育されてきた。だからこそ、俺たちは自分たちの生来のルーツを誇り称えることに決めたのさ」

■90年代当時、共演するのが好きだったバンドは?お気に入りのバンドはいたのかな?

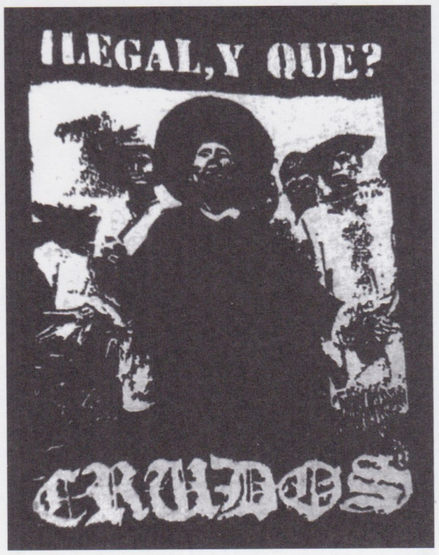
「共演するのが本当に楽しかったのはMAN IS THE BASTARD、THE LOCUST、BORN AGAINST、RORSCHACHだね」

■今のラティーノ・パンク・シーンについてはどう思う?90年代とは違っている?

「すごく大規模になっているし、若い人たちと多くのバンドが関わっているね。だけど、ラティーノ・パンク・シーンで起こっている全てのことを把握しているわけじゃないから、慎重に語らないとね。ただ、90年代には多く見られたアクティヴィズムが欠けているように思えるな。恐らくは、育英資金や団体、コミュニティ・センターのためのベネフィット・ショーよりも、ソーシャル・メディアを使ったインターネット上のアクティヴィズムやファンドレイジング(※非営利団体による資金集め)のほうが活発になっているのかもしれないね」

■LOS CRUDOSにとってベストだった期間はいつ?また、それはどうして?

「今さ、当時の"今"、そして明日の"今"でもある。みんなに向けて俺たち自身を表現し、感情やアイデアを取り交わす、その機会は、LOS CRUDOSにとっていつだって最高の時間なのさ」



■日本のみんなに"ilegal, y que"が何を意味しているのか説明してもらえる?

「"ilegal"はアメリカに不法入国した移民のことを指している。"y que"は"so what?"(それがどうした?)という意味さ。この土地に暮らす先住民の人たちをヨーロッパ人が殺しまくり、そして国家として始動させてからというもの、アメリカには不法入国移民がたくさんいる。そうだな、アメリカ人にとっての"ilegal"とは、在留資格に関する法的書類を持っていない、メキシコ人やラティーノだけを指しているんだ。



Rawな表現、Rawなエナジー、Rawな意志

"ilegal, y que"は、ラティーノに対して"illegals"というネガティヴなレッテルを貼ることへの、LOS CRUDOSとしての拒絶なんだ。そんなレッテルは非人道的だからさ」

■アメリカの移民制度についてはどう考えている?

「アメリカの移民制度の"問題"とは、この社会が抱えている現実問題のスケープゴートとして常に利用されていることさ。教育や保健医療、貧困といった問題に対する資金の欠如、数ある中でも国内問題は無視され、悪化の一途を辿っている。そして利益のために民営化されていくのさ」

■君の音楽と政治観というのは、それぞれ別物?

「いや、そんなことはないよ」

■90年代のうちにツアーしたかった国はある?

「たくさんあるね。コロンビア、ベネズエラ、パナマ、プエルトリコ、キューバ、ボリビア、オーストラリア、香港、韓国、マレーシア、タイ、スカンジナビア。スカンジナビアは先日ツアーしたばかりだけどさ」

■1996年に日本で演奏したことについても聞かせて。どのようにして実現したの?

「俺たちの良き友人であるHideharu KondoがLOS CRUDOSを招聘して、ツアーを企画してくれたんだ。2週間のツアーで本当に楽しかったよ。日本のパンクスはとてもフレンドリーで親切にしてくれたね。日本で演奏してくれと誘われるときはいつだって、LOS CRUDOSはすごくハッピーになる。日本のパンクとハードコアも俺たちは大好きだしさ」

■お気に入りの日本のバンドは?

「GAUZE、G.I.S.M.、THE CLAY、DEATH SIDE、THE COMES、もっともっといるけどね!!!!」

■どうして1998年に解散することにしたの?

「停滞してグダグダになりたくなかったんだよ」

■2006年に再結成のショーをやったワケは?

「シカゴでのラティーノ・パンク・フェスは素晴らしい機会だったんだよ。俺たちを見たことがない、多くの若いパンクスの前で演奏するね」

■2015年には再び日本をツアーしたけど、最初のツアーとは違いがあった?

「俺たちは太って、白髪が増えたかな、ハハハ。ショーの回数は少なかったけど、サウンドは多少良くなったと思うぜ」

■タイム・トラベルができるとしたら、LOS CRUDOSの何かを変えたいと思う?

「いや、思わないね」

■LOS CRUDOSの今後の予定は?

「LOS CRUDOSがもたらしたラティーノ・パンクが今年で25周年を迎えた。ピルゼンとリトル・ヴィレッジにおけるね。だからそれを祝っているんだ。アートの展覧会やパフォーマンス・アート、作品の紹介やビデオの上映を2016年9月30日から10月8日まで、シカゴのCo-Prosperity Sphereというギャラリーで開催するんだよ」

■どうしてLOS CRUDOSと命名したの?どういう意味なのかな?

「"The Raw"という意味さ。そうあるべきだと感じているしね。Rawな表現、Rawなエナジー、Rawな意志だよ」

■日本のパンクスに伝えたいことはある?

「今年の12月に日本に戻って、あの素晴らしきGAUZEと2回、Antiknockでのショーで共演できるのを楽しみにしているんだ!!!すごくすごくすごく興奮しているし、日本に戻って演奏ができて、しかもGAUZEとだからね、最高だよ。Gracias!」



JjCa
www.facebook.com/jjcaimg

ブラジルのパンクスが見た RIO OLYMPICS 2016

世界中のスポーツ・イヴェントの中でも、オリンピックは最も重要なイヴェントだ。でも正直に言えば、ブラジルには支援を求め声を上げている、衛生や教育といったより優先すべき事柄が数多くあるんだよ。
ひどく楽観的なこの国は、危機的状況に陥ってからも、より良い国になるだろうという希望を抱き、そして悶え苦しんできた。
間違いなくブラジルという国はこんな話しを認めないだろうし、メディアを通じて騙そうとしてくるだろう。テレビの前に座って見聞きすることを全て信じてしまう、そんな人生を送る人たちを、生み出していく。
国内各地でアンダーグラウンド・シーンに関わっているブラジル人の何人かに、この世界中で大ニュースになっているスポーツの祭典に対する、彼らの見解を寄稿してもらった。

TEXT:Rafael Yaekashi

リオデジャネイロ市民としては、この都市でのオリンピックの大会に期待されていること、その全てを理解していたよ。メディアは大会が大成功だったと伝えたが、ブラジルは政治的にも経済的にも深刻な問題を抱えている。
リオの住民、その多くの人たちが必要としている病院や学校といった、もっと価値のあることにオリンピックの資金を投じることもできたというのに。参加したアスリートたちには尊敬と称賛を捧げたいけど、ブラジルはオリンピックどころではないし、他に優先すべきことがあったんじゃないかな。

Alexandre Andrada(Lixö de Janeiro/リオデジャネイロ)

ブラジルでは、アスリートは何から何まで自分たちでやらなければならない。サポートなんてないんだ。彼らが勝ったとしてもそれは個人的なメリットであり、国のためなんかじゃない。完全にボイコットされるべき、そういうイヴェントさ。
社会的不平等というよくできた"構造"があって、無駄な公的資金が、みんなにとって何の役にも立たない仕事へと費やされていくんだ。

Bruno SF(Silencio Brutal Zine/サンタカタリーナ州フロリアノーポリス)

芸術作品として、スポーツはそのオーラを失ってしまった。オリンピック期間中、アスリートたちが自身の限界を乗り越えようと奮闘している姿を僕たちは目にする。しかしながら、その背後では、ナショナリズムという危険なファシスト的意識が、"国家"という化物に餌を与えてしまっている。その様を、僕たちは必ずや目にするだろう。肥えて疲弊したその化物は今、オリンピックという掲げられたロゴのため、やるべき仕事をため込んでしまった。メダルは奴らに、利益も同様に奴らのために。
裸足で、ストリートやわだちまみれの校庭を走り回る子供たちが僕たちの希望なのかもしれない。取り残された少女たちが、スポーツをその胸に焼きつけることは決してないだろう。

Matheus Paz(Sociology Teacher/リオグランデ・ド・スル)

ブラジルでこの手のイヴェントが開催されるとき、それは決まってこの国の真実ではなく、偽りの姿を示すことが目的なんだ。俺たちにはちゃんとした学校も病院も用意されない。だけど、大会とパーティで金儲けが繰り広げられる。人々の笑顔も作られるのさ!

Fred(Não Conformismo/リオデジャネイロ)

そう、必ずしもパンクではないけれど、運動は巻き起こっている。我々にとって有益であろうとも、大会そのものに対してではないが、オリンピックのポリシーは拒絶する。スポーツには価値がある。しかし、スポーツは人々の利益を約束するものでは断じてないんだ。

Marcelo Silva(Incessant Damnation, Devil's Blood Produções/アマゾナス州マナウス)

クーデターに対する政府の検閲が行われる最中に、オリンピックは開催されたわ。ジルマ大統領が可決した、(皮肉なことに)反テロ法案とは反する形でね。
私としては、大会は重要だと思っている。だけど、私たちの国が過敏なときにそれはやって来てしまったわ。これは何かしらの影響を与えるでしょうね。私たちのメディアは今大会でも、他の大会同様に男性上位主義を露呈した。だけど、こういった姿勢はブラジルでは以前から問題視されていたの。
私は反オリンピック・ムーヴメントなんて一つも知らないし、知る必要もないわ。そんな団体なんていつも自分たちで自滅しているだけじゃない。

Nata de Lima(Manger Cadavre?/サンパウロ州サン・ジョゼ・ドス・カンポス)

2014年のワールドカップに反対するムーヴメントがあったが、警察によって激しく弾圧された。今、国会でクーデターが起こっている状況下で俺たちは生活している。オリンピックに反対することによって、ひそかに政府をサポートすることになってしまうのではないかと、パンクスは誤ってそう考えているんじゃないかな。オリンピックに対してパンクスは、静まり返ったぎこちない運動しか起こしていないからね。暫

定政権によって押しつけられる検閲は、強化されるばかりさ。

Felipe Leprose(Fear of the Future/サンパウロ)

2013年以降、ブラジルではたくさんの重要な事件が起こっている。権力と偽りの民主主義に対する闘いさ。この反乱のデモンストレーションに続いて、主にリオデジャネイロではオリンピックに反対するイヴェントが行われ、多くの逮捕者が出た。デモンストレーションのほとんどはアナーコ・パンクスやアナーキストによって企画されたのさ。

Josimas & Andreza
(Tuna,No Gods No Masters/サンパウロ)

俺に意見なんて何にもないよ。お笑い草だが、一方でナショナリストは、黒人や貧乏人をぶっ殺せ、貧乏人を家から追い出せなんて道化芝居をやっている。残念ながら、ここの"パンクス"の多くはアスリートの誰かやチームが勝つことを願っているし、個々人によるボイコットしか起きていないんだよ。

Eric Rossini(Resistência Underground Distro e Prod/
ペルナンブーコ州カルアル)

僕はオリンピック・スポーツに反対じゃないし、敬愛している。だけど最近のオリンピックは完全に商品化されているよ。スポーツが好きなファンのためではなく、消費者のために行われている。オリンピック反対の活動をする、社会的な運動があって、参加者にはパンクスもいるんだ。

Alcides Jr(Ultima Classe/サンパウロ州サン・ビセンテ)

本物のムーヴメントがあるのかは分からない。俺はオリンピックに反対し、ここで開催されたワールドカップにも反対だった。俺が書くことは、一般的に話されていることじゃないんだろうな。

Karine Profana(Mau Sangue,Kultist/サンパウロ)

僕は、ブラジルは今回のオリンピックのホストをすべきじゃないと思っている。急を要する社会問題が山積みだからね。スポーツは素晴らしいよ、もちろんね。だけど、衛生や治安、教育が第一さ。そういったものは、僕たちの手の届かないところにあるんだよ。

Egon Dias(Expurgo/ミナスジェライス州ベロオリゾンテ)

Art by Alexandre Andrada(Lixö de Janeiro)

A Tocha mata

(Olympics torch kills)

Olimpíadas para quem?

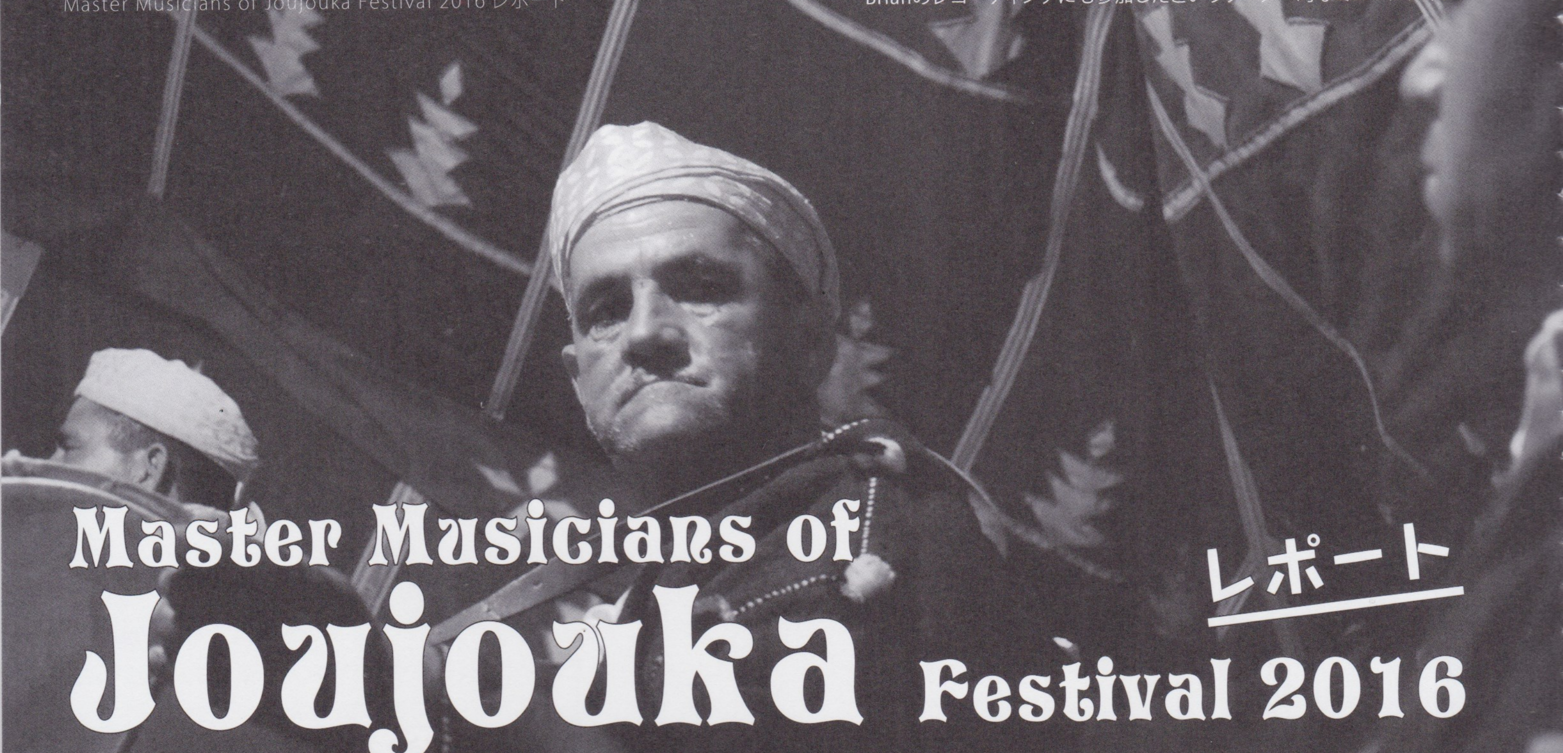
(Olympics for who?)



今日は2016年8月31日。オリンピックに関するテキストの最後に、ブラジルの民主主義が死んだ悲しき日について語ってこの話題を締め括ろう。

今日、正義のため公平に、そしてブラジルのために戦い、人々によって選ばれた一人の大統領が連行された(※ジルマ・ルセフ大統領が弾劾裁判によって失職した)。今や僕たちの尊厳は奪われたのさ。ここのクーデター政権は、極右のファシストで反同性愛主義、しかも保守的でレイシストだからね。

僕は今、ブラジルにおける民主主義の死に恐怖しているんだよ。


Brianのレコーディングにも参加したというリーダー的なミュージシャン

Master Musicians of Joujouka Festival 2016 レポート

エルジン読者の皆さんが「ジャジューカ」と言われて思い出すのはやっぱり元日本脳炎〜Bacilus Brainsの「Jajouka」だったりするんでしょうか。Rolling Stonesの好きな方なら、モロッコの民族音楽「Joujouka」のことをご存知の方もいるかも。
そもそもジャジューカとはモロッコ北部の村の名前であり、またその村に伝わる音楽の名前でもあります。ジャジューカ村に住む「Master Musicians of Joujouka」と呼ばれる楽団により、千年以上も前から受け継がれてきた音楽です。
ぼくは大甲子園やGalaxy Express 666というバンドでギターを弾きつつ「NOIZ NOIZ NOIZ」というブログとジンをやったり「ノイズ堂」というディストロをやったりしてる者なのですが、この7月、この村に3日間滞在して音楽を経験する機会に恵まれたのでこの場をお借りして簡単にレポートさせていただきます。

TEXT:大久保潤

ジャジューカとは

まずはもうちょっとこの音楽についての説明を続けます。

この音楽が演奏される背景にあるのが、村に豊かな作物と音楽をもたらした半人半獣の「ブゥジュルード」の伝説です。ジャジューカの音楽に魅せられて毎年通っている赤塚りえ子さんによる説明を引用します。

"昔々——、ヤギを放牧していた村人のアターが、みんな恐れて近づかなかったこの洞窟でうたた寝をしていると、どこからともなく美しい音色が聞こえてくる。ふと目が覚めると半人半獣（人間とヤギ）のブゥジュルードが自分の目の前に立っていた。そして、ブゥジュルードが村の女性のひとりを花嫁にする代わりに、他の村人に教えてはならないと約束させ、アターに笛を渡し音楽を教える。しかし、アターは約束を破り音楽を村人に伝授してしまう。村から音楽が聞こえ、怒り狂ったブゥジュルードは村に行く。慌てた村人たちは、頭がクレイジーな村の女性アイーシャを花嫁として差出し、激しい音楽で彼らを踊らせた。踊り疲れたブゥジュルードは満足して洞窟に帰り、それから毎年一度村に来て踊るようになった。それ以来、やせていた村の土地は肥え、村には健康な子供がたくさん生まれた。

しかし、ある日突然ブゥジュルードが洞窟から姿を消した。そして、アイーシャも村からいなくなった。心配したアターはヤギの群れを連れてブゥジュルード探しの長い旅に出る。自分のヤギを順番に食べながら旅するが見つからない。ついに最後の4匹になった時、アターはそのヤギを殺しその皮をまとい変装して村に戻る。村人は彼をブゥジュルードが帰ってきたと思い込み、少年たちにアイーシャの恰好をさせ一緒に踊らせる。それ以来、アターはこの洞窟で生涯ブゥジュルードとして生きる。彼に死が近づいてきた時、村のある若い男に自分の変装の秘密を打ち明ける。そして、彼はその少年にジャジューカが繁栄するようにブゥジュルードとして踊ることを約束させた。

この音楽は1週間続くイスラームの祝祭エイド・エル・カビールで子孫繁栄と豊穣のため伝統的に毎年演奏されてきた。"
（ele-king「永遠の「今」——ジャジューカを求めて」より）

演奏されているのは、ライタと呼ばれるチャルメラのような笛と太鼓によるプリミティヴな反復音楽。Brian Jonesがこの音楽に取り憑かれ、録音して編集を施したのがアルバム『Brian Jones Presents The Pipes of Pan at Joujouka』でした。



The Pipes of Pan at Joujouka

そんな由緒ある音楽ですが、後継者不足と高齢化が深刻な問題になっています。そんな村と音楽をサポートするため、10年ほど前からこの村で音楽を体験するフェスが開催されているのです。外国人がこの音楽を体験する数少ない機会です。素人がやっていることなので運営自体は極めてユルいんですが、それもまたこの村には合っている気がしま

す。

毎年ラマダン（断食月）前（だいたい6月下旬）に行われているのですが、今回はラマダンの時期が早かったため、ラマダン後の7月15日〜17日になりました。数日前に主催者から届いたメールによるとジャジューカは熱波に襲われており、日中は連日40度を越す猛暑。各自暑さ対策を万全にして来いと……。どんなことになっちゃうのか想像もつかないけれど、とにかく冷却グッズの数々を携えてモロッコに旅立ちました。

羽田発ドーハ経由のカタール航空でカサブランカへ。そこから国内線のプロペラ機でタンジェに移動。トランジットも含めるとここまで30時間くらい……。



タンジェの城壁　対岸にはスペインが見える

ジャジューカ初日　7/15（金）

タンジェから国鉄で1時間くらいのエル・クサール・エル・ケビールというのがジャジューカ村への最寄り駅。そこまで行くと村から迎えの車が来てくれることになっています。

ぼくたちは電車で行く予定だったのですが、日本人リピーターが予約していた車に乗せてもらえることになりました。というのもメンバーの1人が熱中症でダウンしてしまい、ジャジューカ入りを遅らせることになったため。何度も来ている人にもこの暑さは応えるようです。

駅についてほどなく迎えがやってきます。数分走るとすぐに街を出て岩だらけの砂漠地帯になりました。一本道を延々と走っていくうちに、突然標識も何もないところで分かれ道に入ります。これ、知らないと絶対わかんない。

どんどん山の中に分け入っていき、ジャジューカ村へ到着。村の集会所みたいなところへ集合しました。「ムッシュ！ムッシュ！」と群がってくる子供たちの相手をしたりしつつ、参加者が揃ったところで宿泊先が割り振られます。こんな小さな村にホテルなんかあるはずもなく、観客はそれぞれがミュージシャンたちの自宅に3日間お世話になるのです。事前に割り振ってあるのかと思ったら「うーん、君たちはこの家の2階に泊まれ」とかその場で割り振ってました。基本的に行き当たりばったりみたい。



村の集会場

ぼくたちがあてがわれたのは村で唯一のカフェを備えた家。同じ家に日本人男性2名とイギリス人女性1名が宿泊します。ちなみにこの日本人たちはタンジェで合流したグループとは別。ジャジューカのフェスは日本人率が異常に高く、今年は限定50人のうち15人くらいが日本人でした。赤塚さんが熱心に広めてきた成果でしょう。

ちなみにこの家の家主は演奏の際にブゥジュルードに扮して踊るダンサーで、カフェの壁にはグラストンベリー・フェスティヴァルを中心に世界各地で撮った写真が飾られています。



ミック・ジャガーとのツーショットも！（ミック若い！）

しばらくつろいでいると何やら音が聞こえるので集会所に行ってみたところ、演奏が始まっていました。フェスといってもタイムテーブル等はなく、今年は特に暑さのためタイミングを図りながら進めているみたいで、自分から集会所に来てみないと全部見逃してしまうようです。ちなみにぼくたちはこの日の昼食を逃しました……。

演奏は3日間、毎日昼と夜の2回ずつ。昼の演奏は昼食（といっても17時ごろ。その時間でもまだ全然明るい）後に、比較的リラックス・ムードで行われます。夜の演奏は民族衣装の正装で行われますが昼は私服。バイオリンによるメロディを中心に合唱する民謡のような曲が中心で、2、3曲聴いたところで終了。遅れて行ったので最後の方しか聴けなかったみたい。

夕食まで部屋に戻って寝ました。暗くなった頃に集会場に行ってみると、近くで結婚式をやってるから行ってみるといいとのこと。それは是非！と行ってみると、一見すると普通の民家みたいなところにどんどん人が入っていきます。一緒に入っちゃっていいのかな？と思ったけど、入れ入れと言われるので言われるがままに入りました。中は意外と広く、ちょっとした集会場だったようです。

中央の吹き抜けになったところで小編成（太鼓3名、笛3名）での演奏が行われ、中央では既にみんなが踊りまくっています。特に若い女性が綺麗な服装で踊りまくり。ムスリムのしきたりで女性は（料理をするお母さんたち以外は）旅行者の前に出てこないためリピーターたちにとっても新鮮だったようです。天井の低い室内での演奏は音響的にも広場とは違ったド迫力。手を引かれて踊れ踊れと言われるのでぼくらもガンガン踊ります。

広場に戻るとやがて夕食。鶏肉のタジンにフライドポテトが乗っています。でかいパン



初日昼の演奏　ゆるゆると

がついてくるのでこれに乗せながら手づかみでハフハフといただきました。あ、この村では基本的に全部食事は手づかみです。旨いったら旨い。

夕食が終わるといよいよ夜の演奏開始。楽団は笛6名＋太鼓6名の12人編成。太鼓は8分の6拍子を中心とした反復ポリリズム、笛は1人が何かフレーズを吹くと他のメンバーがそれを追いかけて反復しつつ展開していく、というのが基本。24時ごろスタートでおよそ2時間ノンストップ！楽団は半円形を描いて座り、中央のスペースには観客が代わる代わる歩み出て踊りまくります。



正装したミュージシャンたち

終盤には半人半獣のブゥジュルードが登場。両手に木の枝を持ち、走るナマハゲみたいなノリで踊る地元の子供たちを追い回しつつ、客も煽りまくってヒートアップしていきます。小柄な老人ながらこのダンスがキレッキレ！



ブゥジュルード登場！

2時間の間ミュージシャンもオーディエンスもまったくテンションが途切れず熱狂のうちに終了しました。初日からぶっ飛ばしすぎですが、この後、2日目・3日目とさらに盛り上がっていきます。

2日目　7/16(土)

9時頃起きて朝食。ホストファミリーのお母さんによるパンやパンケーキ、オリーブなど。蜂蜜が濃厚！

広場では朝から牛の屠殺・解体が行なわれています。これも恒例。見学できたのですが、ぼくは遠目に眺めるに止めました。イスラムでは屠殺の前に耳元でお祈りを唱えるなど宗教的な手順がありますが、今回屠殺にやってきたのはそのために呼ばれたプロらしく、実に鮮やかな手つきだったとか。

日中は昨日に引き続き強烈に暑く、何もできないのでそのまま部屋でゴロゴロしました。とりあえず本でも読もうとしても集中できないので結局寝る。昼食はやはり夕方5時くらいで、捌きたての牛とジャガイモのタジンをありがたく残さずいただきました。



牛肉とジャガイモのタジン

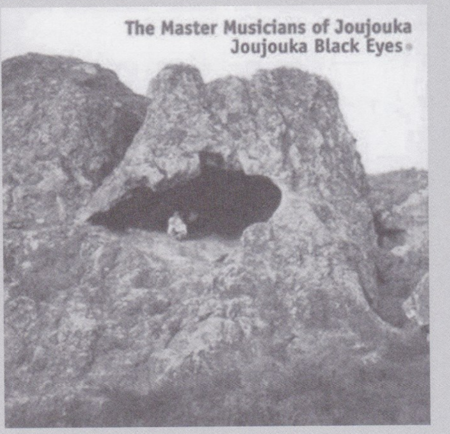
ランチのあと、村の若者がひとりで演奏し始めます。この青年は去年まではパシリだったのが、今年から演奏に加えてもらえることになったのだとか。ケンブリというベースみたいな楽器で、太い紐みたいな弦をボヨンボヨンと鳴らすもの。そのうち老人たちも集まってきて、「お、なんかやっとるのか。いっちょ一緒にやるか」みたいな感じでゆるゆると昼の演奏が始まりました。



ケンブリを演奏する青年

昨日の昼と同様、バイオリンをリード楽器に据えた歌もの。Brian Jonesのことを歌った「Brahim Jones Joujouka Very Stoned」も披露されました。Brianはかなり愛されていて、この曲も定番ナンバーとなっています。

涼しくなった頃に「洞窟に行こう」という話になりました。ブゥジュルードが踊ったと言い伝えられている岩窟のことです。村から片道40分くらい。村に一本だけある舗装された道路（これも数年前まではなかったらしい）をはずれ、雑草をかきわけて進んでいきます。



アルバム『Joujouka Black Eyes』の
ジャケットにも登場する「ブゥジュルードの洞窟」

羊の放牧地や、水を引いて何かを作っている畑（この水を浴びて生き返った）などを経てようやく到着。しかし洞窟は岩山の上の方にあって、最後に岩登りが待っていたのでした。サンダルで来ちゃったので諦めかけましたが、村の青年が手を引いてくれてなんとか登ります。降りる時も大変で、「次はそこに足をかけて」と一歩一歩指示されてなんとか降りられたのでした。疲れた……。

村に戻って調理場を見学しているうちに夕食に。肉は昼と同様牛肉のタジン。今回はフライドポテトが乗ります。もちろん旨い。

真夜中を過ぎると夜の演奏が始まります。子どもたちも踊りたがって前に出てこようとするも、老人たちに毎回叱られて追い払われているのが可哀想なような可笑しいような。

パリを拠点にバロック〜ルネサンス、およびそれ以前の古楽で踊っているという日本人女性ダンサーがいたのですが、基礎のちゃんとした人はやっぱ違うのか、ステップがすごく綺麗なの。村人たちにもすっかり気に入られた様子でした。



叱られても踊りにくる村の子供たち

そして今夜も夜は更けゆき、2時間に渡る狂乱の宴は今夜もブゥジュルードの登場とともに最高潮を迎えるのでありました。

風の吹く丘に涼みに行ったがあまり風は吹いてなかった



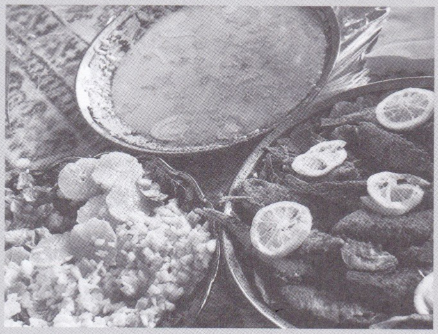
3日目　7/17(日)

先述の通りジャジューカでは井戸水を使用しています。飲み水は旅行者にはペットボトルの水が提供されているのですが、シャワーをどうするかというのが問題。トイレは床に穴が空いててバケツに溜めてある水を流すというモロッコ式なのですが、その水を浴びてもいいということになってはいます。とはいえ衛生的にどうも抵抗があり、初日は汗拭きシートで体を拭くにとどめていました。

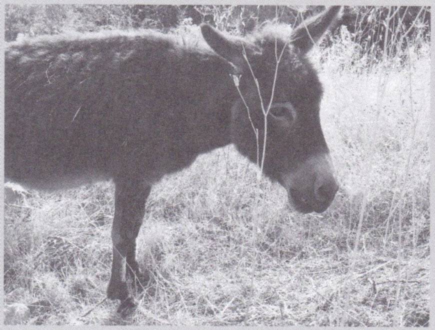
なのですが、同宿のイギリス人女性にその話をしたら、「全然大丈夫よ！飲みさえしなければオッケー」と軽く言われたのでトライする気になりました。いざやってみると超気持ちいい！冷たい水最高！

今日のランチは魚のフライ。かなり長時間揚げてるようなんですが（中東はカリカリに揚げるのが基本みたい）、パサパサになることもなく旨い！そのまま昼の演奏が始まりましたが、体調が今ひとつなので2曲くらいで退散しておきました。

夕食はとろみがあってパスタの断片みたいなのが浮いたスープとミートボール。これまた超旨い！ジャジューカの食事は結局3日間全部旨かった。



魚のフライとモロッカンサラダ。
このオレンジがまた激ウマ！



荷物はもっぱらロバが運ぶ

24時半ごろからいよいよ最後の演奏が始まります。途中から村の女の子が踊り始める……と思ったら、これが全部男の子。女の子に扮した男の子たちがブゥジュルードに捧げられて一緒に踊るというのがこの音楽のルーツとなる儀式なのです。

やがて古楽ダンサーの日本人女性が地元の衣装を着せられて登場しました。いやー、超似合う！明らかに気に入られてると思ったら！

いよいよ終盤になると、焚き火が行われます。思いのほか火がでかい！この火の前でブゥジュルードがひときわ激しく踊るのがクライマックスなのでした。

火が消えるとミュージシャンたちも場内を練り歩き始め、熱狂は頂点に達します。およそ3時間半にわたる大熱演を経てフェスが終了。音楽が生活と一体となった村の姿にはすごく感じ入るところのある3日間でした。



民族衣装を着（せられ）た日本人ダンサー

個人的にはジャカルタにMarjinalを訪ねた時以来の大きな体験になりました。

今回の旅の全貌については、後日ぼくのジン「NOIZ NOIZ NOIZ」に掲載の予定です。そちらもよろしかったらチェックしてください！

http://noiznoiznoizzine.tumblr.com/



炎の前で激しく踊るブゥジュルード

※



Sadist

初めてSADISTを見たとき、ヴォーカルのパフォーマンスと彼らの音楽が完全にマッチしていたから感激したんだ。最近のアメリカのバンドの中でも、みんながチェックすべきバンドの一つであると言えると思う。いつか彼らを見る機会があったら、あのマスクの裏側にひそむ正体を見破ってもらいたいね。

INTERVIEWED:Luis　PHOTO:JjCa(※)

■SADISTのメンバーについて聞かせてもらえる?

「SADISTは俺、Ghostがヴォーカル&ノイズ、Stormcloudがベース、Jasonがギター、TPPがドラム」

■SADISTと命名したワケは?

「俺たちを取り巻くサディズムを反映したものだ」

■自分たちのサウンドをどう説明する?

「ダーク・パンク」

■君たちのパフォーマンス・スタイルだけど、どうしてマスクやチェーンを身に着けているの?

「人は誰しも、マスクを被っている。チェーンは俺の楽器の一つだ。そして、俺たちの歌詞とメッセージのテーマである、抑圧と支配の象徴でもあるんだ」

■初めてのデモを出したのはいつのことで、何というタイトルだった?

「2014年に「Blood Song」デモをリリースした。それは自分たちでダビングしたもので50本だけだった。それがアメリカやカナダ、ウクライナの様々なディストロやレーベルによって再生産され、はるか遠くの国まで流通された。もしお前が、お前の地元のためにこのテープを作りたければやればいい!だけど利益のためになんかやるんじゃねぇぞ。俺たちの音楽は聴いて共有するために作られているんだ。コレクション用じゃねぇんだよ」

■他にもリリースはある?

「「The Shadow Of The Swastika」EPと、USBメモリをイヤリングにして、そこにL.O.T.I.O.N.と俺たちの動画を収録したスプリット作品、あとつい最近、デトロイトのThe Satanic Templeが企画した"The Unveiling"という儀式での演奏を収めたVHSも出たばかりだ」

■メンバーがSADIST以前にやっていたバンドは?

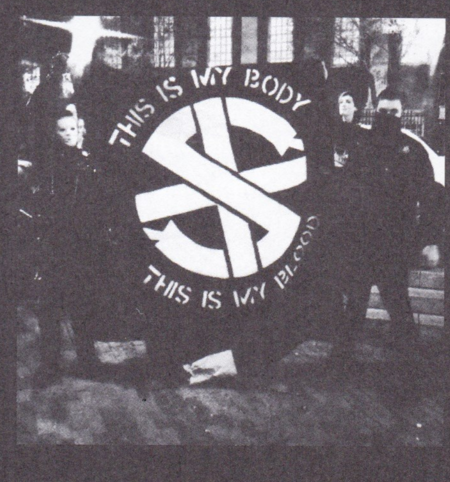
「Stormcloudと俺は短命に終わったG.A.S.H.というプロジェクトをやっていた。StormcloudはVIDEO FILTHというバンドでも現在活動している。JasonはFUCKHEADSとASPECTS OF WARをやっていた。今はHUMAN BODIESとCOAGULAでも活動している。TPPはバイカー/クラスト・パンク・バンドのFAST DEATHのメンバーだったことでよく知られていて、最近はPURGATORYというバンドでヴォーカルをしている」

■君たちの歌詞の背景にあるメッセージとは?

「俺たちの歌詞は社会による監視、地元や世界で近頃起きている出来事、人生における体験と考えといったものから触発されている。もしSADISTのメッセージを一つだけ簡潔に述べるなら、それは自主権という一言に尽きるだろうな」

■"This Is My Body This Is My Blood"







アメリカ合衆国は大量虐殺と残虐行為に基づいて建国された

とはどういう意味?

「"This Is My Body This Is My Blood"はカトリック教のスローガンに対する打倒だ。俺たちの肉体と俺たち自身の返還を求めている。"地球上に存在している俺たちの生命は俺たち自身のものだ。天国にいる奴らのためじゃねぇ"ってこと。俺たちがThe Satanic Templeに演奏を依頼されたときに、このスローガンが採用されたんだ。大司教が先導した大規模な反対運動があったおかげで、公けでの黒ミサの儀式はボストンでは禁止されている。そしてこの手のイヴェントを企画しようとすると、ありとあらゆる会場に対して市は圧力をかけてくるんだよ。俺たちはメディアと警察の嫌がらせのせいで、規模を縮小してイヴェントを行なった。ライヴも内密にやったんだ」

■「Shadow Of The Swastika」7"のタイトル(※鉤十字の影)は何について言及しているのかな?

「誰かの過去を冒涜したり、第二次世界大戦中にナチによって引き起こされた虐殺行為を受けた誰かやその家族を小馬鹿にする意図は一切ない。しかし、現在世界中で引き起こされている虐殺に対してどれだけの注意が払われている?俺たちの政府が、俺たちと同じ奴らが起こしている虐殺だぞ?嫌悪と激怒とともに、アメリカ人がしでかしてきたその自身の歴史と事件を振り返って口にしてみろよ。アメリカ合衆国は大量虐殺と残虐行為に基づいて建国された。その影響は社会構造を通して波紋となり広がって、俺たちのコアの部分をも侵食している。この国の建設は、先住民の人々に対する組織的な大量殺害に始まり、現代ではますます軍国主義化された警察が日々、ストリートでリンチを繰り広げては大量投獄を行なっている。鉤十字は弾圧と憎悪の究極のシンボルだと広く認識されている。そして、明らかにその影は俺たち全員に向けて投げかけられているんだ」

■誰がレコードのアートワークを手掛けているのかな?

「EPのアートワークを製作しレイアウトをしたのは友人のMax Furst(ex-MORNE)だ。表紙の画像は2015年に起こった内戦で荒廃したクリミア半島の風景写真。撮影したのはRoma Purgenで、そいつは俺たちのEPのテープ・ヴァージョンをリリースしたウクライナ人だ。俺たちのデモもリリースしているぜ。インサートと盤のラベルは俺がデザインした。大抵のアートワークは俺がデザインするか、他の奴と一緒に作ったり、バンドの他のメンバーの提案を聞き入れたりだな。俺たちが知っている/信用している奴らと密になって作るのが好きなんだ」

■イヤリング型のUSBメモリでL.O.T.I.O.N.とのスプリットを出すなんてアイデアはどこから湧いてきたの?

「L.O.T.I.O.N.のAlexが俺に提案してきたんだ。それをつけることによって、サイバー・パンクとして生きることになるだろ。俺たちが生活しているハイパー・テクノロジカル・リアリティの記録だよ」

■ボストンのパンク・シーンについても聞きたいんだけど。チェックすべきオススメのバンドはどんなのがいる?

「ボストンのパンク・シーンは他のどことも似ていない。市が公式にオール・エイジ・ショーを禁止していたり、ハウス・パーティに関する条例が可決されているんだ。そして、オマワリはゲシュタポ式の手段で情報をかき集め、罰金を盾に店のオーナーを脅してギグを直前に中止させたりして、パンクスを追い払おうとしていやがる。奴らはFacebookやその他の社会的監視メディア・サイトで写真を保存しては、名前の掲載されたリストを手にギグに顔を出してくる。ときには、キッズの写真を使って、シーンにいる18歳の振りをして、オンライン上で内偵していやがるぜ。ギグの情報を集めるためにな。オマワリだけじゃなく、クソガキ大学生やら、ストリートにおける様々な暴力、そしてもちろん自己破壊的なパンクスもいる。そういう手合いとボストン・パンクスは常に戦ってきているんだ。最近のバンドで思いつくのはCONTINGENT、DAME、LIFE ASY





LUM、D-SAGAWA、SEWER GODDESS、SAVAGEHEADS、SUNSHINE WARD、VIDEO FILTH、HUMAN BODIES、GREEN BERETだな」

■SADISTはアメリカ・ツアーをしたことがある?

「西海岸を2回ツアーしたことがある。東海岸は1回だけ、中西部はポートランドのVIVID SEKTと廻った。あとはマサチューセッツ州とニューヨーク州北部の間をCINDER BLOCKと一緒にやったな。プエルトリコで2回、モントリオールでも2回やった。もうすぐ東京のTHE SLOWMOTIONSと一緒に北東部で何回かギグをやる予定もある」

■時々ニューヨークでもプレイしているけど、NYCのどんなところが好き、または嫌い?

「ニューヨークで演奏している時間はいつだって楽しいぜ」

■演奏する上で好きな都市とその理由は?

「プレイしたことのある都市はどこも楽しかった」

■お気に入りの日本のパンク・バンドは?

「今の日本のバンドならS.H.I.、POIKKEUS、C、PARASITE。常に俺のお気に入りのバンドはG.I.S.M.とZOUO、どんなバンドよりも好きだね」

■SADISTの今後の予定は?

「新しい曲を作っているから、レコーディングの準備はできている。新たにリリースをして、国外ツアーも敢行したい」

■君がブルックリンで経営しているパンク・ストアについても聞かせて。いつ、どうして開店させたのかな?

「Devil's Nightの日(ハロウィンの前夜)、ガールフレンドのGabbyと一緒にIgnore Rock'n' Roll Heroesショップをオープンした。ブルックリンの867 Broadwayの路地の裏に位置していて、周りには似たようなエレクトリック・ミュージックの店だとか、アート・ショップや服屋がある。俺は長いことディストロや、レーベルTotal Fuckerを運営してきたし、友達のプロジェクトや、自分の興味が惹かれるものをサポートするのがずっと好きだったからな。パンクは実体のある文化であり続けなければならないと俺は信じている。店を始めることによって、今ではパンクスがやって来て他のパンクスと会ったり、音楽を聴いたり、新しいバンドや新たなアイデアをアピールできたり、またはそれを購入したりできるスペースができた。そこで友達のプロジェクトをサポートしたり、逆に俺がプロジェクトを教えてもらったりとかね。俺たちが店で扱っているのは、美学とファッション、そして音楽と文学作品だ。また、パンクから生まれ出た強固な反骨心を表現していて、場所を必要としているものを店では推奨している。俺たちはパンクのライフスタイル・ショップなんだ」

■君のレコード・レーベルはなんていう名前なの?これまでのリリースは?

「Total Fucker Recordsだ。リリースは:

001 BLOODKROW BUTCHER レースカット
002 BESTHÖVEN「The Vikings Are Back」EP
003 BLOODKROW BUTCHER「st」EP
004 G.A.S.H./CLEANSING WAVE スプリット・ソノシート
005 KOWARD「st」EP
006 WHO KILLED SPIKEY JACKET?「st」LP
007 WHO KILLED SPIKEY JACKET?/SAD BOYS「Wish You Were Beer」スプリット・ソノシート・ポストカード
008 PRIMITIVE PACT「Injustice」EP
009 THE EPIDEMIC「Losing Control」EP
010 VA「Destroy Poserton」LP
011 TOM AND BOOT BOYS「Who Wants Panties?」EP

あとは、自主でリリースしたオリジナル・スタンプを押したものが売り切れたから、SADISTのEPを#SAD001として再発した。今後はDark Raidsレーベルとの共同リリースで、MUTANT ITCH/VIDEO FILTHのスプリットEPを、M39との共同リリースでD-SAGAWAのソノシートを予定している」

■テープやレコードが欲しい人がいたら、どこで手に入るのかな?

「俺たちの作品が欲しいのなら、一番良いのはいつもギグに来ることだ。それほどの量は作れないし、俺たちのギグにやって来てサポートしてくれている奴らの手に届けるのが好きなんだ。ギグの帰りに、そのまま自宅に持って帰れるようにな」

■日本のみんなに伝えたいことは?

「アンダーグラウンドをサポートしろ。パンクをサポートしろ」

■何か最後に一言。

「You Have Complete Control」



トルコのアナキストたちによるイスタンブールのソーシャル・スペース/カフェ infiAl

当初は2012年に旅行していたときに、ギリシャのヴォロスでよく遊んでいたトルコ/フィンランドの二重国籍のヴィーガン・ストレートエッジの友人に、ここ最近トルコで起こった出来事について聞いてみようと思っていたのだけど、連絡してみたところ、どうやらまた彼は旅行に出ているようで、代わりにここに聞いてみたらいいよ、と紹介されたのが、今回インタヴューを行った"infiAl"というイスタンブールのソーシャル・スペース/カフェだ。ここはスクワットではなくて、ボランティアで運営しているインフォ・ショップのようなところ。結構「ガチガチ」と言うか、「本気」のアナキスト(トルコはギリシャと同じように、ラディカルなパンクスやアクティビストたちの「本気度」が高い気がするが、裏を返せば、それくらい切羽詰まった状況にあるということか)たちにより運営されているこのスペースだが、今回のインタヴューでは、そのスペースについてというよりは、ここ数年、色々起こりすぎているのにニッポンのメディアに頼っていると断片的にしか得られないトルコの現状について、infiAl運営スタッフのひとり、Karaumut氏に、現地のアナキストの視点から話してもらった。このスペースについてもっと知りたいという方は、最後に連絡先が載っているので連絡して訪ねてみては。(※各質問への答えは、infiAlとしてではなくKaraumut氏個人としての答えです)

文:鈴木智士(焔と煙霧:http://tower.void-server.net/)

■infiAlはどんなグループですか?まず簡単な説明をお願いします。

「個人として、人々の集団として、私たちは主に反乱者であり、動物解放、地球解放の運動に関わり、アンチ・ファシストで、反文明的なグリーン・アナキストや、その他の関係するグループによって成り立っています。私たちのアナキストのネットワークには革命を志すもの、アナーコ・コミュニスト、エコロジスト、アナーコ・フェミニスト、LGBTQ+の活動家、動物解放活動家、パンクス、アナーコ・サンディカリストや、その他のリバタリアンがいます。私たちは、私たちが行っている活動や目的、アイデンティティのラベルづけをしません。ここではアナーコ・パンクスは15年以上一緒に活動をしてきました。地元での国際連帯のライヴやデモの企画など、彼らと一緒に協働しています。

infiAlはイスタンブールのタクシム地域にある、アナキストのソーシャル・スペースで、私たちの活動のうちの1つにすぎません。この地域には、難民やクルド人、貧しい人たちが住んでいて、タクシム周辺では、地元当局によってジェントリフィケーションが計画されています。このスペースを作った目的としては、まず、私たちアナキストがイスタンブールで集まってイヴェントや行動などを計画する場所が必要だからでした。場所は、ベヨグル地域ではなく、タルラバシュ地域である必要がありました。ベヨグル地域では、人々の関係は主に消費や商業主義によって成り立っています。一方タルラバシュ地域では、一般の人々と触れ合うことが多いのです。

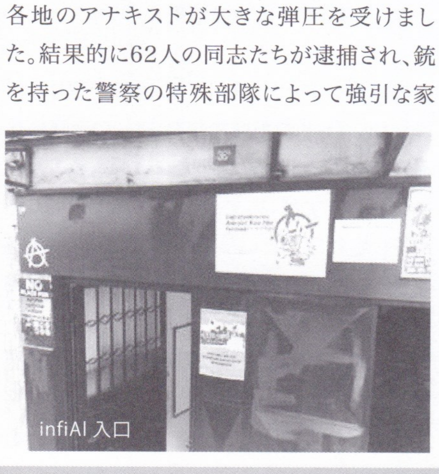
ただ、先述のように、この場所の一番の目的は、アナキストの行動を活発にし、イスタンブールにおけるアナキストの関係を創造することです。それは、私たちの生活のあらゆる面においてシステムに反対し、その活動を広げることを志しています。また最近では、協同組合のような組織も始めました。連帯を目的とした、ヴィーガン料理やグルテン・フリーの食材を提供する場所も備えています。

この場所は1年以上前に始めて、それ以来、討論会やアイデア、技術の共有の場、ワークショップ、映画、ドキュメンタリの上映、ライヴ、読書会、連帯イヴェントなど、たくさんのイヴェントを行ってきました。またこのinfiAlには、"Kerem Kamil Koç"という名前のアナキスト図書館もあります。この名前は、去年亡くなった同志の思いを継いで、彼の名を付けたものです。またフリー・ショップもあり、そこではいらない服などを持ち寄って、それらを必要とする人が取りに来て無料でもらえるということをやっています。また今はアナキスト文献をトルコ語に翻訳する作業も行っていて、翻訳、出版のコレクティヴとしても利用しています。1999年以来、私や仲間たちで、何百もの記事や映像、パンフレットをトルコ語に翻訳しています。これまでに出版したジンは150以上あり、様々な名前で雑誌を出したりもしています。アーカイブは https://issuu.com/sosyalsavas や https://issuu.com/internationala で見られます。また映像は https://vimeo.com/moacmtv/videos や https://www.youtube.com/user/sosyalsavastv/videos で見られます」

■2012年に私がイスタンブールに行ったときに、現地の友人がタクシムにあるアナキスト・カフェに連れてってくれました(名前は覚えていないのですが)。彼からトルコのアナキストやパンクスの活動の話を聞きましたが、あなたたちinfiAlは普段どのような活動を行っていますか?

「君はタクシムの26Aカフェに行ったんだと思いますよ。26AカフェはDAFと密接な関係にある場所です。

2012年はトルコのアナキスト・シーンにとって非常に大変な年でした。イスタンブールで起こったメーデーの暴動以降、政府からの弾圧、特に私たちのサークルへの弾圧が激しくなりました。2012年5月1日、イスタンブールのメーデーのデモで、多種多様なアナキストや反権威主義のグループが連帯し、ブラック・ブロックを形成し、暴動が何か所かで起きました。ブラック・ブロックは何十もの資本主義的なお店や役所などを襲撃し、窓やドア、銀行のATMなどを破壊しました。これらの行動により、その会社、機関には何十万トルコリラもの損害が出ました。暴動から14日後、イスタンブールからトルコ北東部のトラブゾン、西部のイズミルからアンカラまで、トルコ国内各地のアナキストが大きな弾圧を受けました。結果的に62人の同志たちが逮捕され、銃を持った警察の特殊部隊によって強引な家



infiAl 入口



↑infiAl 内部 / infiAl でドキュメンタリの上映中↓



宅捜索が行われました。この弾圧は、トルコのアナキスト・ムーヴメントの歴史の中でも最初の大きな弾圧でした。警察は暴動の責任を私たちに押しつけ、逮捕された内の15人が拘留され、3か月の間、刑務所に収容されました。今はみな出所していますが、まだその件に関する裁判は続いています」

■個人的に、DAF(Devrimci Anarşist Faaliyet、"Revolutionary Anarchist Action"、「革命的アナキスト運動」)の情報も追っていますが、彼らと一緒に活動することはありますか?

「DAFはイスタンブールを拠点とする、また別のアナキストのグループです。私たちは彼らとはあまり一緒に行動はしません。親密な関係にはありませんが、もしお互いに何か大きなことが起きれば、連帯し行動を起こすことと思います。私たちはこれまでにお互いのイデオロギーに関する非難があって、距離を置いているような状況です。ただ他のアナキストのグループにも敬意を払いますし、何か事が起きた場合には、DAFのような他のアナキスト・グループとの連帯が必要になるでしょうし、排除するようなことはしません」

現在のトルコの情勢について

■日本のメディアはトルコの情勢を詳しく報道しない(トルコだけでなく、ヨーロッパの移民問題や「テロリズム」のような国際問題についてもですが)ので、現地の情報を知りたくても知れないという人もいます。特に連続して何かが起きると、報道はあてになる情報を提供できません。

今年トルコで起きた出来事だけでも、大手メディアが報道したもので、1月のイスタンブールでのテロ、3月のアンカラでのテロ、6月のアタテュルク国際空港でのテロ、そして7月のクーデター未遂がありましたが、その他に小さな出来事も多数あると思います。これらの出来事について、あなたの視点から説明をしてくれますか?政府やPKK(クルディスタン労働者党)、ISIS(イスラム国)との関係(政府はISISと戦闘を行うと同時に、クルド人勢力を弱体化させようと二面作戦を行っているとか)などは、こちらのメディアでも報道されていますが。

「もちろん簡単な話ではないですが、できるだけ簡潔にお伝えします。

昨年2015年6月7日の総選挙で、AKP(公正発展党、保守で中道右派、エルドアン首相の与党)は議席を減らし、2002年の政権獲得以来初めて過半数を割った一方、HDP(国民民主主義党、トルコ西部の左翼グループと関係のある、クルド人系政党)は13%の得票を集めて躍進しました。与党であるAKPが、その力を弱めたのです。AKPは単独の与党でなくなりましたが、同時にほとんどすべてのファシスト組織がクルド人解放運動を攻撃し始めました。7月20日に、シリア国境に近いトルコのスルチという町で、ロジャヴァのコバニ(注1)の再建に尽力していた社会主義のグループ(SGDF、社会主義青年協会連盟)に対してISISの爆弾テロ攻撃が行われました。そのテロにより、33人の仲間が殺されました。内5名(Vatan Budak、Alper Sapan、Evrim Deniz Erol、Medali Barutçu、Serhat Devrim)は私たちのアナキスト同志でした。その他にケガ人も数名出ました。彼らはコバニの人たちの生活を再建するために、連帯し活動を行っていました。その事件のあと、スルチから東のセイランピナーという町で、警察が2人殺されました。これによりPKKと政府の和平交渉は中止され、日に日に状況はエスカレートしていきました。

この「スルチの虐殺」以前は、ISISによるHDPの会議などへの自爆テロが起こっていましたが、このスルチの虐殺により、内戦は新しいフェーズに入ったと言えます。国家権力はクルド解放運動やそのほかの革命的組織を狙って攻撃し始めました。10月10日にはアンカラで虐殺が起き、左翼グループやNGOなどによる平和的デモの参加者103人が命を落としました。そのうちの1人はアナキストの同志、Ali Kitapçıでした。

これらISISによる攻撃を、政府は事前に察知していたと言われています。ただよく知られているように、AKP政府や当局はISISと協力関係にあり、あらゆる支援をしているため、政府はISISによる攻撃を止めようとしません。どこでも言われているように、トルコ政府はシリアなどで活動する戦闘的ジハード主義者たちに武器や資金を与え、保護をしているのです。最近では、トルコ軍はシリアに侵攻してISISと共闘していますが、彼らの本当の目的は、ロジャヴァ革命(注2)とクルド人の自治を妨害することにあります。ISISと似たようなイスラム過激派たちと一緒にロジャヴァに侵攻しているのです。

私たちはイスタンブールのアナキストとして、(世界中のどの政府にも反対するでしょうが)トルコ政府に反対しています。私たちは、トルコ、シリア、イラン、イラクと、クルディスタンのどの土地においても、クルド人の独立を支持します。私たちは世界中のすべての人々の自己決定権を支持するのです。

ロジャヴァ革命はとても示唆的です。ロジャヴァ革命は、反権威主義でアナキスト的な考えや実践に触発されたものだからです。ただアナキストや反権威主義的な運動、というわけではありません。この運動は、反権威主義的な実践を鼓舞したり、そういった実践への議論を起こすことができると思います。目下、非常に苛烈な戦争が起こっており、クルド人やその他シリアの自治的抵抗者の自衛権は支援されるべきだと思います」

■7月に起きたクーデター未遂以来、エルドアン大統領は何をしようとしているのでしょうか。NHKの官報メディア化など、今実際に日本で起きていることにも近いのですが、政府にとって不利な情報を流さないために、エルドアンはテレビや新聞などのメディアを掌握しようとしているというニュースも見かけました。

「これはあらゆる政府が持つ普遍的な精神だと思います。エルドアンがメディアをコントロールし始めたのは、何も7月のクーデターからではありません。最初からそうでした。2013年のゲジ公園蜂起(注3)のあと、AKP政府は革命的勢力や反対勢力、左翼グループを攻撃し始めました。クーデター後は、それまで何十年も共犯関係だったフェトフッラー・ギュレンを徹底的に攻撃し始めます。ギュレン運動(注4)に関係するメディアやメンバーの財産、銀行口座などを強制的に押収しました。これにより歯止めが効かなくなった政府は、クルド人解放運動や革命勢力をターゲットにしているのです。これまでに、HDPによって統治されていた30近いクルド人の自治体が政府によって占領され、その数はさらに増えています。政府は次に、HDPの国会議員をテロリズムの容疑で逮捕し、HDPの党自体を禁止するのではないかと言われています。これこそが本当のクーデターの状況下であり、この内戦はどんどんエスカレートしているよう

に思えます。アナキストとして、私たちは準備ができているとは言えません」

■昨今の欧州への移民流入について、トルコにおける現状はどのようなものでしょうか？ヨーロッパの国々にとって、トルコは移民の調整弁のようにも見えます。

「まったくその通りです。AKP政府はこの状況を、「アジアとヨーロッパとの架け橋」というように、自分たちのために利用しています。政府は何百万ドルもの資金をEUから得て、この「移民の洪水」をコントロールしています。これにより、政府はシリアで戦うためのジハード主義者たちを育てているのです。政府や保護組織の後ろ盾が得られるトルコは、戦闘的ジハーディストたちにとって天国のようなものです。何年もの間、政府に反対するアクティビストやジャーナリストたちは逮捕され、逆にそういったジハード主義者たちは釈放されています。政府以外でも、移民に対するレイシズムは強大になっています。政府に反対する人たちの中にすら、レイシストが存在します」

■特にギリシャへの経済制裁を目の当たりにして以降、現在EUに加盟していないその地域の国々にとって、EUとはどんな存在なのでしょうか。

「資本主義国家では、誰もタダで物をくれたりはせず、常にそれ以上の物が取られるだけです。

EUの国家として、ギリシャの人々はそれらの非常に厳しい制裁の中を生きています。ただこれがEUに加盟していない国の場合は、内戦が起きたり、植民地主義的政策がとられるのではないでしょうか」

トルコにおける反原子力運動について

■ご存じかもしれませんが、福島原発事故から5年が経ちますが、日本政府といくつかの企業は、トルコへの原発輸出を行うことで



原発建設反対デモの模様

Nukleere Hayir : "原発はいらない"



合意したそうです。これについてはどう思いますか？また、トルコではどのような反対運動が起こっていますか？

「トルコの反原子力闘争は、1986年のチェルノブイリ原発事故の後に始まったと言えます。事故の6、7年後から、原発計画に反対するデモが起こりました。チェルノブイリ事故の影響が、トルコ国内の黒海側で見られ始め、何百もの癌の事例を引き起こしたからです。ただ抵抗運動は大きくはならず、メディアの原子力政策のプロパガンダにより弱体化させられました。

というわけで、トルコでは約30年に及ぶ反原子力の運動があると言えます。アナキストや反権威主義アクティビストたちは、この運動における重要な役割を担っています。

この闘争は環境保護運動から始まり、他の運動も巻き込んでいきました。元々モダニストで工業志向だった左翼たちも、徐々に考えを変えていったのです。左翼グループはかつては原子力に反対していませんでしたが、最近では左翼もアナキストも原子力、水力発電や火力発電にすら反対の立場を取っています。アナキストは原子力反対のたくさんの行動を計画し、たくさんの発言をしてきました。福島原発の事故後も、何十回もデモやミーティングなどを行っています。毎年、反原子力のグループで福島やチェルノブイリの犠牲者の追悼行動も行っています」

■具体的にどのような行動を行っていますか？

「まず、先述のようにチェルノブイリと福島の被災者の追悼デモを毎年行っています。これらの行動はNGOや左翼グループにより主催されており、アナキストや反権威主義グループがそれに参加しています。

2、3年前、アナキストに主導されたデモ参加者が、原発計画地域のフェンスを打ち破り、敷地内へ侵入したことがありました。10年前には、アナキストの若者により組織された「Anti-Nuclear Front（反原子力戦線）」というグループがデモや抗議行動を企画していました。

時には、北部のスィノプ原子力発電所（注5）建設予定地、南部メルスィン県のアックユ原子力発電所（注6）建設予定地や、イスタンブール、イズミルなどの関連する場所へのスプレー・ペイントをする行動もあります」

■最後に、トルコへ行った場合の、infiAlへのアクセスを教えてください。

「infiAlの住所は：Bulbul Mh.Turan Cd. No:36A Beyoglu, ISTANBULで、タクシム広場の北西です。

来る前に、infialpostasi@gmail.comまでメールをもらえれば詳しい案内をします」

注：

1.コバニ：シリア内戦において、ISISによる侵略からクルド勢力が逆転、奪還した「コバニ包囲戦」が起きた、シリア北部アレッポ県に属する町。シリア政府による名称はアイン・アル＝アラブで、コバニはクルド名。

2.ロジャヴァ革命：シリア北部のクルド人地域・ロジャヴァで、シリア内戦のさなか、クルド人勢力が自治区を手にした一連の戦闘。特徴として、反資本主義、反国民国家制度を元にしているのと、女性たちが担う役割が多く、戦闘、政治において活躍している。

3.2013年ゲジ公園蜂起：2013年5月末、イスタンブールのタクシム広場近くにあるゲジ公園の再開発計画開始に端を発する、イデオロギーを問わずたくさんの人が抗議活動を繰り広げた一連の出来事。2人が死亡、負傷者多数。

4.ギュレン運動：イスラム教指導者、作家のフェトフッラー・ギュレンの教えに共鳴した人たちの社会運動。トルコ政府はギュレン氏を7月のクーデターの「黒幕」とし、ギュレン氏が住んでいるとされるアメリカの政府に対して身柄引き渡しの要求を行った。

5.スィノプ原子力発電所：トルコ北部スィノプで計画されている原子力発電所。2013年5月、トルコのエルドアン首相と日本の安倍首相の間でBOT（Build-Operate-Transfer）方式（EL ZINE vol.20の「Cris(Etniko Bandido Infoshop)インタヴュー」に注釈あり）での契約が調印された。三菱重工業と伊藤忠商事が建設を行う予定。

6.アックユ原子力発電所：トルコ初の原発となる予定の施設。ロシアとトルコの原子力建設企業により建設される予定。



"死の原発"とサークルAが町のシャッターに書かれている

GIG REVIEWS Ⅰ

Nowhere To Run Fest in NYC The Paper Box 8月20日



TEXT:Jose
PHOTO:Phil Maier

バンド:
Belgrado (スペイン/バルセロナ)
Crash Course in Science (フィラデルフィア)
Pawns (NYC)
Statiqbloom (NYC)
Second Still (LA)
FBI Warning (NYC)
Blood Bitch (カナダ/エドモントン)
Haldol (フィラデルフィア)
Abandos (フィラデルフィア/NYC)
Silent EM (NYC)
Ritual Humor (NYC)

DJ:
Pieter Schoolwerth (Wierd Records)
Andi (SYNTHICIDE, The Postpunk Project:Some Wear Leather, Some Wear Lace)
Frankie Teardrop (The Harrow, Systems of Romance, Weird Party)
Shawn O'Sullivan (LED ER EST, Further Reductions)
Gabby (Sacred Bones Records)
DJ Sex 69 (Anasazi)
DJ Jose (ARKHAM:Brooklyn Gothic Party, Dark Dance Radio)
Nick Mariano (Crispy Nuggets, Medical Records LLC)



Silent EM



Ritual Humor

8月は暑い月だったけど、その20日にはNYCの歴史上でも初となるポスト・パンク・フェスティヴァル、Nowhere To Run Festが開催された。こういったイヴェントの企画を思いついたワケは、俺たちはこの手の音楽スタイルをプレイしている素晴らしいバンドを世界各地で見てきたし、そんなバンドを一堂に会したいと思ったからなんだ。過去と現在のバンドとDJが集まり一日中、一緒に演奏するのさ。

俺たちがフェスの会場に選んだのはThe Paper Box。広い会場で2つのステージを有しているんだけど、メイン・ステージは屋内に、そして小さくて可愛らしいステージが裏庭にあるんだ。

フェスティヴァルは夕方に、メイン・ステージでのSilent EMの演奏を皮切りに始まった。彼のコールド・ウェーブは評判になっているし、そのキャッチーなトーンとメロディに会場のみんなはノッていたよ。まだ早い時間だってのに、みんな踊り始めたからね。彼はヨーロッパやメキシコでもこれまでプレイしてきたし、再びヨーロッパへ、主にスペインみたいだけど、ショート・ツアーをするみたいだ。

直後には、Ritual Humorが裏庭のステージで演奏を始めた。彼らは比較的新しいバンドなんだけど、既にLPをリリースしている。スタイルとしてはオールドスクールなポスト・パンクと現代のインディー的アプローチの融合だね。

その後に登場したのはHaldolで、フィラデルフィアのバンドさ。ダーク・ポスト・パンク影響下の最高にクールなスタイルで、彼らの印象的なリフと格好良いヴォーカルのコンビネーションは80年代を彷彿とさせるもの。彼らのアルバムは俺のプレイリストの殿堂入りをしているよ。

お次はカナダのエドモントンからやって来たBlood Bitch。このバンドは俺の個人的なお気に入りなんだ。鋭く強固なベース・ライン、空気のように軽いギター・サウンド、ドラム・マシン、そしてドンヨリとした女性ヴォーカルによるゴシック・ロックとも言えるスタイルだ。

そしてすぐにAbandosが始まった。酔っ払っていたようだけど、しっかりと何曲かプレイしていたね。ノイズと、インダストリアルのダークなタッチのミックスで、噂通りにラウドだったよ。

彼らの後にはFBI Warningが登場。見て

いて面白かったね。色んなペダルやケーブル、ドラム・マシン、シンセとかからなるイカしたセットでさ、スタイルとしてはEBM(エレクトロニック・ボディ・ミュージック)とノイズのミックスで、明らかに80年代からの影響が感じられたし、夕刻の裏庭を完膚なきまでに大混乱へと叩き落したね。

次のバンドは間違いなく、多くの人たちにとって、この日のサプライズだっただろうね。Second Stillの登場さ。彼らはNYCのバンドだけど、最近カリフォルニアに引っ越したんだ。素晴らしい女性ヴォーカルとグレートなギターのリフ、そしてキャッチーなベース・ラインにそれらを支えるドラム・マシン。彼らはコールド&ダーク・ポスト・パンクだけど、君たちは身震いしちゃうだろうね。最高にオススメだよ。

夜になった。午後9時頃、Pawnsがステージに現れる。NYCの最近お気に入りのゴス・バンドなんだ。彼らの投影するそのサウンドはゴスの雰囲気をまとっていて、BauhausやAusgang的であると確実に言えるだろう。アメリカ国内ツアーを終えたばかりだったし、状態が良かったね。このバンドは来年にはもっと火がつくだろうから、君たちの街を彼らが訪れたら是非チェックしてくれよな。

Statiqbloomが続いて登場した。ブルックリン出身の2人組のインダストリアルで、Skinny Puppyみたいなバンドから影響を受けているね。パワフルだけど難解、そしてゾッとするサウンドだよ。彼らのダークなビートはショーの間、みんなを30分も踊らせていたからすごく印象深かったな。

フェスティヴァルも終わりが近づいてきた。最後の2バンドがヘッドライナーだったんだ。

Crash Course in Scienceに関して、俺はフェスの前までは彼らのことをよく知らなかったし、その音楽にも期待していなかったと白状するよ。だけど完全に間違っていた。演奏が始まった途端に、もう一気にパーティ・タイムに突入したね。彼らのエレクトリック・ミュージック、彼らが創造し紡ぎ出す何かは、ファンでありキャッチー、女性と男性のシンガーはレザーかラテックスかを着こんでそこいらを練り歩き、踊りまくる。彼らの躍動するスタイルをきっかけに、みんな踊り飛び回っていたよ。会場は熱気に包まれてごった返し、素晴らしい時間を過ごせたね。エレクトリック・ミュージックのレジェンドは本当にグレートなパフォーマンスを見せてくれた。

もう夜中を過ぎた。そして遂にスペインのBelgradoが登場さ。俺はドラマーのJonathanとは十年来の仲だし、彼らのツアーをサポートできてスゲー嬉しいんだ。この日のちょうど一週間前、俺は彼らの演奏を見るためにLAへ飛んで行ったくらいだし、遂に彼らがNYCにやって来てくれて、とても興奮していた。

ニュー・アルバム「Obraz」のプロモーションのためのツアーだったけど、このアルバムはポスト・パンクのルーツへ向けた素晴らしきトリビュートさ。有機的でメロディアス、オブスキュアで軽やか、そして驚くべきはPatrycjaのヴォーカル。

もう午前1時近く。だけどみんな帰らなかった。待ち続け、そして、彼らは始めたのさ。幕開けは、ニュー・アルバムの一曲目でもある“Dalej”から。真に人の心をとらえる彼らの楽曲。みんなメロディとヴォーカルの魔法にかかっているようだった。10曲くらい演奏して彼らが終わろうとすると、オーディエンスは彼らに戻ってくるよう繰り返し声を上げていた。すると、彼らはアルバム「XXI」から1曲演奏してくれたんだ。

そうして、Belgradoによって、その夜は閉じられた。フェスの終わりに相応しいものだったよ。みんな幸せと感謝の気持ちでいっぱいになったのさ。


Haldol


Blood Bitch



Abandos



FBI Warning


Second Still


Pawns


Statiqbloom


Crash Course in Science


Belgrado

GIG REVIEWS Ⅱ

TEXT:SAJI(FÖRTVIVLAN)
PHOTO:キキキ、他数名

PUNK DEPARTURE in 栃木県栃木市かかしの里　9月18日

パンクで発進!パンクを発信!!!PUNK DEPARTURE!!!

さて、皆さんはPUNK DEPARTUREをご存知だろうか?この超ローカルなハードコア・パンク・ギグをご存知な人は中々いないだろう。
そんな知る人ぞ知るこのギグも実は今回で2回目。しかも前回から6年振りにやるなんてのは尚更知る由もありませんね(笑)。
一旦火が付いた導火線はブッタギルか爆発するまで燃え続ける!栃木県足利市!超ローカルながらパンクの火がメラメラと燃えているぜ!!!
"Dynamite Up Your Ass!"
「出来る事を出来る時に出来るだけやる」
今この瞬間の【PUNK】を封じ込めた野外ギグ、それがPUNK DEPARTUREだ!

9/18(日)AM5:30過ぎ!俺達の1日はまず天候との睨めっこから始まった!今日という日を半年以上前から楽しみにしていたにも関わらずまさかの台風大接近!
前日まで激しく降っていた雨は、しとしとと音を変えたもののバッチリ雨…しかしこんな事で野外ギグを棒に振る事は出来ない!小雨が降る中奇跡が起こる事を信じてたちょうどその時、近所の団地の運動会開催の合図だったのだろうか?火薬の破裂音が湿った空に数発鳴り響き、負けじとイヴェントの決行を決断!

こーなったら話は早い!出演バンド、関係者にイヴェント決行を一斉アナウンス!すると、"持ってました!"の大合唱〜!!
いよいよ俺達のパンク・デストレインは出口の見えない暗黒の奈落へと進み始めたのだった!
会場の設営も終了し後はスタート時間を待つばかり、思った以上に雨降ってねー!!!(と思いたい・笑)
サウンド・チェックも無事終わり待ちに待ったPUNK DEPARTURE!360分1本勝負!スタートだ!

AM11:00。台風の影響をモロに喰らい雨もパラパラ、人もパラパラ!
そんな中、先陣を切って登場したのは栃木県唯一?のPOGO PUNK!COOKING CASPER。何処となくシャキッとしない雰囲気がまだまだ会場を包み込む中、ギャイーン!!!と一発ギターを鳴らす!すると一瞬でそんなモヤも晴れ上がり、ついに始まる期待!興奮!!飲酒!!!
行くぜ〜!1!2!3!4!のカウントから、バタバタ・ポンコツ・ポゴ・チューン炸裂〜!!!雨もドン引きで逃げ出し始めやがった(最上級の褒め言葉・笑!!!)。間髪入れず!つんのめりながらPOGO大炸裂!
今回はメンバーの都合で3人編成…ゆえにドタバタっぷりに拍車がかかり(かかり過ぎだろ!)全くまとまらないというドランク・パンク度ストライクな「まとまり」を見せた非常にグッドなライヴだった!!!!!

続いて2番手!REAL TIME LOST、足利若手ナンバー1ハードコア!!!
彼らは実にカッコいぃ!サウンド・スタイルは叙情と形容される事が多い、だが、そんな事はど〜でもよくとにかくカッコいいのだ!!!
彼らの鋭く尖った爆音に雨もハイテンション!天空も今まで以上に雨粒を降り注ぐが、彼らも一歩も引かず反撃をカマス!!!雨に打たれながら野山を揺らすヴォーカルのトッピ〜!会場全体を最高な雰囲気へ包み込み、雨を天空に押し返す!!!ドシャ降りを制す者は野外パンク・ギグを制すのだ!

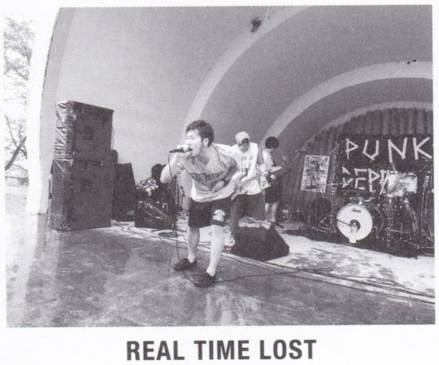
続きまして〜3番手!有象無象フロム埼玉!THIS IS JAPANESE HARDCORE!THIS ISアウトロー!この言葉以外にそうは褒め言葉は見つからないだろう!ビシビシ伝わってくるオーラはジャパコアをやる為だけに生まれて来たに違いない!!!ドスのキイタ声で会場全体をビシッと締め上げるヴォーカルのユースケ!若手ながらここまで貫禄を感じさせるバンドは中々いないだろう!!!激アツなサウンドに胸ぐらを掴まれ拳を振り上げる!"ふざけんじゃねー、やってられっか!"雨もビビって逃げ出すぜ!!!そー言えば近々某有名レーベルからリリースがあるとか無いとか!?とりあえず何かしらの形でリリースがあるそうなので乞うご期待!!!

出ました4番手!HORSE&DEER、彼らは自らにしか属さない、東京プラズマ・スピード・パンクだ!!!彼らとの出会いは"足利織姫暴動"って企画で、最初からゼロ距離な最高なクルー!!!変幻自在なそのスタイルは東京のブラックホールの中でも完全に"座礁"している!ヒデジプラズマはギグが始まってから1日ずっと裸足だ!全力で己の存在を無意識に表現している!爆音が鳴り響けばその表現は一気に爆発し周囲をあっと言う間に飲み込んだ!!!パンイチ・スタイルにカッパー枚羽織ってステージを飛び出しハミ出し三点倒立!!!そのプラズマ具合は日本を飛び出し2015年にUSツアーを敢行!
VENKMANやあのASSHOLE PARADEなどと対等に張り合い、確実に爪痕を残した実績は間違いなくかかしの里を直撃した!!!もちろんキョンシー!コウゲ!猫!彼らの素晴らし過ぎる演奏があってこそ成立している事を忘れては成らない!!!

ここで前半戦終了〜!まだまだ止んだり降ったり、もー雨自体を楽しんでいる人達も



COOKING CASPER



REAL TIME LOST



有象無象

お客さん



DJ

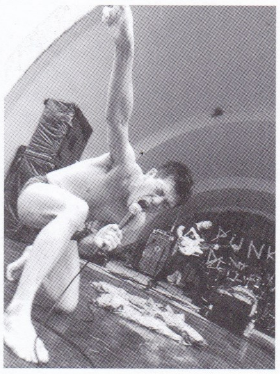


SHOP









HORSE&DEER

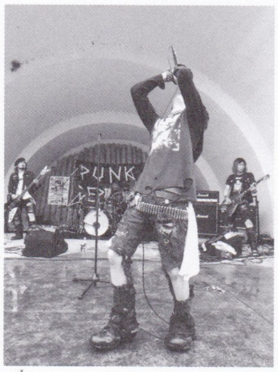
チラホラ、傘なし靴なし当たり前のいい感じに仕上がってきましたね(笑)。まさにパンク、それ以外言葉が見つからないパッピー雰囲気に!!!

後半戦一発目!5番手!ZIKADE、足利産NOISE CRUST!数々のメンバー・チェンジを経ていざ最前線へ!!!乗っている現在、彼らを止める事は出来ないでしょう!!!本当見れる時に見ておいた方がいいと思います!ALL CRUSTIES SPENDING LOUD NIGHT 97!コレですよコレ!(LIFEが出演している中でこういっちゃぁアレですが)現編成になってからヤケに蹴り飛ばされるんですよね～大好きだったあの時のクラスト!過去を振り返るのでは無く一周してまたやって来たという感覚でしょうか?轟音を撒き散らしツボを突くんだコレがまた!!!轟音?ノイズ?D-BEATだって～!?都内でのライヴも増えてるみたいなので是非!

待ってました!6番手!NOT A NAME SOLDIERS。岡崎の誇りを胸に、ここに降臨!!!

FÖRTVIVLANで岡崎に行った時にダイさんと話した。足利の話をし、PUNK DEPARTUREの話を。大海原のような器で俺達の気持ちを受け止めてくれた。しかも即答で。

ライヴ前ダイさんは言っていた、俺は最強の晴れ男だと!!!こんな事ってあるのか!?マジ



ZIKADE

で晴れてしまった…。日頃の行いがいいからな(笑)と話すダイさんの言葉は一点の曇りも無かった。

説得力のあるMCに演奏中はステージを動き回り芝生に滑り込み、問答無用でライヴは最強!!!!!岡崎から栃木へ、ハードコアのバトンは繋がれたのだ。

7番手!LIFE/THE MASTER OF DARKNESS-結成25周年、説明不要の東京CRUST LEGEND!!!

LIFEがこんな地方の山の中で暗黒ノイズをブチまけて轟音のヘドロは辺り一帯を覆いつくし木々を枯らし始めた!!!!死神達(酔っ払い・笑)が地面を這いつくばり泥の地面を覆い尽くす!!!冒頭で書いたが、暗黒の奈落になんてとうに足は着いていたのだ!ナゼなら暗黒マスターははなっからこの地を踏んでいたのだから!心配する事など何1つ無かったのだ!!!

凄まじい!とにかく凄まじい!再び雲行きが怪しくなるほどの黒さだ!鼓膜をブッチギル轟音は瞬く間に終焉を迎える!しかし!ワン・モアーの嵐で待ちに待った、そう!"Freedom And Liberation"!コレしかない!一気に血管ブチギレ・モードに!"自由と解放"、この日、かかしの里にはこれしか無かったのだ!!!!!頭にガーゼ、首にコルセットを巻いたノリさんは復帰一発目のライヴでまだまだ体調は万全では無かったものの、全力で応えていただきました!

ラスト!FÖRTVIVLAN。僕達は足利を中心に活動しているFÖRTVIVLANと云います、今回の首謀者であり、みんなを巻き込む事に成功し一番楽しんでしまったフトドキ者です(笑)。自分のバンドなので何を書いたら良いか思い浮かびませんが、とにもかくにも最高の1日でした!ありがとうございました!!!本当にみんなが最後盛り上げてくれて嬉しかったです(笑)。

この日は雨も最終的に晴れて本当に良かったと思います(涙)。

都内のライヴハウスやレコード屋にフライヤーを置かせてもらった事によって都内から来場されてたり、遠方から来場してくれた方々も心から楽しんでくれていた事が本当に嬉しく思います!

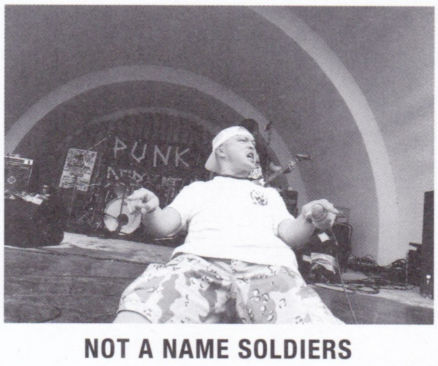
それと会場に彩りを添えてくれたRECORD KNOX橋本さん(水戸)、LEATHER EXPERIENCEまさるさん(新潟)、YOKKE'S KITCHEN平井さん(福島)、マサラ観音飯島君(東京)、そして今回の野外ギグは会場にいた全ての方、僅かながらでも関わって頂いた方、誰が欠けても成立していなかったと思います!今回やってみる事によって様々な課題が浮き彫りになりましたが、この経験を活かし次回に繋げていければと思います!

ありがとうございました!

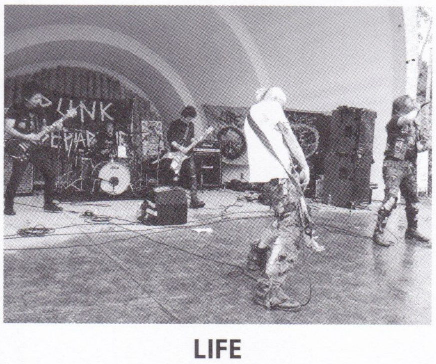
今回は残念ながらCURIOSOはキャンセルになってしまったけど、必ず来たいとの事なのでまたの機会に乞うご期待!

この野外ギグはこれからも続けるのでまたどこかで見かけたらよろしくお願いします!

そして、この記事を最後まで読んでくれた皆さんありがとうございました!



NOT A NAME SOLDIERS



LIFE



FÖRTVIVLAN



前号にも掲載したフレンチ女性ヴォーカル・ハードコア・パンク・バンド:PSYCHO SQUATTのインタヴューby Grzester、その第2回目でございます(あまりにも長いので3回に分けてお送りします)。
いきなり余談ですが、私には6コ上の兄がいまして、まぁ、エルジンは全く読んでおりません(涙)。
それでもレコード屋さんのHPに掲載される幣誌のインフォだけはチェックしているようでして先日、「PSYCHO SQUATTって格好良いの?」と連絡がありました。私は、「ハイ、格好良いです」と答えましたら、その数日後、「格好良かったわ」と改めて連絡がありました。そんなわけで、お兄ちゃんもご推薦のバンドです(笑)。
今号ではフレンチ・パンクの生き字引、52歳のギタリスト:Rudyがフランスのシーンの現状から、過去のオブスキュアなパンク・バンドについてまで、多岐に渡り語ってくれています。

INTERVIEWED:Grzester [grzester12@poczta.onet.pl]

"FRANCE BOMBS AGAIN!" from POLAND The Second Volume

PSYCHO SQUATT

■LPの仕様は、80年代の重要バンドたちの作品を彷彿とさせるね、分厚いブックレットであったり。君たちは前世紀のどんなバンドから感化されたのかな?それとも、誰のことも手本にせずに、自分たち流でやったの?

「まさにそうだね。俺たちからは古いアナーコ・パンク・バンド、CRASS、POISON GIRLS、RUDIMENTARY PENI、CONFLICT、SUBHUMANS、CRUCIFIX、DIRTを連想できるはずさ。…少なくとも政治的な方向性においてはね。だから精神的にはかなり近いんだけど、音楽性は全く違っている。俺たち全員がそれぞれ色んなバンドをたくさん聴いているから、俺たちのサウンドは色んな種類のパンクとフレンチ・オルタナティヴ・バンド、それにロックンロールのミックスなんだよ。X RAY SPEXに似ているって言う人もいるけど、それってサックスがいるからじゃないのかな…。多少はBIALA GORACZKAに似ているとは思う。俺としては、アナーコ・パンクとBERURIER NOIRを混ぜたような演奏をしているかな!」

■うーん、だけど君たちがそんなに長い間休止していたとは知らなかったよ…。他のバンドでもプレイしていたの?

「メンバーの何人かはこの20年間、完全に演奏することを止めていたね。ベーシストのMulはMULE ET ROSEというバンドをやっていたけどね。俺もいくつかのバンドをやっていた。DOWN BY LAW(アメリカのじゃなくフランスのね)、WISDOM、A FOR X(このバンドはヴォーカルのCelineと一緒にやっていた)、あとはDTCというバンドを20 MINUTES DE CHAOSのメンバーとやっていたよ」

■僕はフランス語が分からないし、多分、ポーランド人のほとんどもそうだと思う。このLPでは、どんなことを歌っているの?インサートを見る限り、社会的・政治的問題なのかなと思ったんだけど。

「LPでは、人々が現在直面しているありとあらゆる危機について歌っているよ。つまりはマスメディアや、宗教によってコントロールされている人々のこと、女性に対する暴力、金の力、政府と社会による支配、労働者同士に競争を強いるための理由として用いられる経済危機という概念、アルコールとドラッグに支配される生活、神経障害について歌っているのさ」

■Malokaについても聞かせてもらえる?このプロジェクトはいつ、誰が設立したんだい?輝かしい成功や恥かしい失敗なんてのもあった?君はどんなことを担当しているの?

「そいつは話しが長くなるぜ。1988年までさかのぼらないと。当時、俺たちは全然ポリティカルじゃなかったディジョンのパンク・シーンに飽き飽きしていた。何年か前からギグを企画している人たちはいたけど、大抵はバーでのギグだったよ。ディストロもいなかったね。そんなところじゃベネフィット・ギグを企画することなんて不可能だった。それで俺たちは自分でやることにしたのさ。PSYCHO SQUATTの初めてのレコードをリリースして、フランスにアナーコ・パンクのアイデアを広めるために、友人2人と一緒にMalokaを設立したんだよ。俺たちの初めてのギグは荒々しくて分かりづらいものだったけど、徐々にオーディエンスがついてくるようになってね、色んな人たちが関わってくるようになっていったんだ。1991～1992年になると、軍が使わなくなった古いキャンプ地や、町から少し離れた場所でギグの企画を始めた。1997年10月からは古い工場をスクワットして、退去させられる2015年4月まで暮らしていたんだ。Malokaはレーベルでもあって、現在までに約120のリリースがある。それにラジオ番組も週一で放送していて、2年前にはBLACK MARKETというオルタナティヴなレコード/ブック・ショップを町にオープンさせたんだ。Karnageというファンジンも発行していたんだけど、今では製作する時間がないから止めてしまったね。輝かしい成功とも失敗とも言えないけど、俺たちは1000回以上にも渡る数多くのギグとイヴェントを企画してきた。そして俺たち

にとって何よりも価値があるのは、素晴らしい人たちと出会えたってことなんだよ」

■ディジョンには学生も多く暮らしているけど、今の若者たちは何かしら活動することに興味を持っているのかな?

「ポーランドのことは分からないけど、フランスの状況はイギリスや時にドイツと似ているんだ。ショーに来る人はどんどん減ってきていて、例えば数年前までは、平日であっても200～300人の動員があった。週末に良いバンドが出れば400～500人は来ていたね。今では土曜日の夜に150～200人も来てくれれば万々歳だね!デモやエキシビジョンを企画すると、更に人は少なくなる…。だけど、最近は学生がMalokaを手伝ってくれるようになってね、若者がショーに戻ってくるようにもなってはいるよ」

■昨日、僕はBIALA GORACZKAと会って、君たちのことを話していたんだ。それで僕は思ったんだけど、フランスではやっぱりBERURIER NOIRが一番重要なパンク・バンドとされているのかな?

「自明なのは、BERURIER NOIRはフランスで最も有名なパンク・バンドだったってことかな。パンクについて無知な人でも、BERURIER NOIRのことは知っているよ。当時、一万人を前にして演奏することのできた唯一のバンドだったしね。新聞も彼らのことを記事にしていたし。だからと言って、彼らがベストなバンドだったなんて言うのは、とんでもないことだけどさ。それでも特別な存在ではあったな。若者たちにとって(今でも)彼らは社会に反抗するアイコンなんだよ。俺の娘は16歳で色んなバンドを聴いているが、BERURIER NOIRの大ファンだね」

■PSYCHO SQUATTにLA FRACTION、HEYOKA、VERDUN、HAINE BRIGADE…。僕はこの手のスタイルが大好きなんだ。女性ヴォーカルってユニークだよね。僕が挙げたバンド以外に、君はもっと名前を挙げられる?

「あぁ、君が挙げ忘れているのはKOCHISE。これは古いバンドだけどね。今のバンドならCARTOUCHE、LA SOCIETE A MAUVAISE HALEINE、VARLIN、LA TWAL、BURNING LADY、MONDRAGON、MISS RATCHED、それにもっともっと興味深いバンドがいるよ」

■昔の伝説的なバンド、METAL URBAINやREICH ORGASM、KOMINTERN SECTといったバンドをシーンで見かけることはある?音楽シーンでも、社会的な活動の場とかでも。

「METAL URBAINのメンバーは数年前に復帰を試みていたけど成功はしなかったね。メンバーの一人はスタジオで働いてて、そこで俺たちは1989年にダブルEPをレコーディングしたんだ。KOMINTERN SECTのドラマーだったThomasは1991年からBURNING HEADSでプレイしているよ。他のバンドについては分からないな。そういった人たちに(REICH ORGASMとKOMINTERN SECTのメンバーだね)俺は興味を抱いたことがないし(Thomasだけは良い友人だけどね)、彼らは政治にも関わってこないからさ。それに彼らのうちの何人かは、ファシストと言えなくもないからね」

■そもそもパンク・ロックにはどうやってのめり込んだのかな?聴いたり、初めて見たのはどこでだった?それから何年の月日が経っている?

「俺は今52歳で、パンクを発見したのは1977年。故郷の小さな町で暮らしていたときにテレビで見たSEX PISTOLSだった!俺の兄弟のクラスメートがすぐにパンクスになって、そいつと俺が出会って…ってわけさ!彼と一緒にパンクのショーに何回も行ったね、オルレアンやパリにね。1982年に俺は勉学のためにディジョンへ引っ越して、そこで何人ものパンクスと出会った。特にChristopheってやつはアナーコ・パンク・バンドに詳しくて、俺たちに聴かせてくれたよ。彼と、彼のガールフレンド、それにDavidとSteph(PSYCHO SQUATTの元ヴォーカリスト)でMalokaを始めたんだ」

■LUDWIG VON 88については、彼らの歌詞が風変りだとか、色々と聞くんだけど何か知っている?フランスのバンドだと、あとはPARIAPUNKも僕には謎の存在だよ。3回しかコンサートをやらなかったという逸話は本当なのかな?

「LUDWIG VON 88は自分たちの人生を大掛かりな道化芝居として送りたい人たちだったんだよ。何回か見たことがあるけど、本当にシュールレアリズムなものだったね。ナイスな人たちだったよ。彼らの歌詞はもちろん自分たちのことを書いているわけじゃなくて、全ては辛辣なユーモアだね。当時のフランスのオルタナティヴ・シーンのために尽力していたし、ベネフィット・ギグもたくさんやって、ベネフィットの音源にも参加していたしね。PARIAPUNKには会ったことも、彼らのショーを見たこともないんだけど、色々と話しは聞いているよ。当時、彼らが何回ギグをやったかは知らないけど、10回以下なのは確かだろうね。彼らのアイデアとやり方はすごく過激で(主にアニマル・ライツに関してね)、それで伝説的な存在になったんだ。ドラムがいくつか他のバンドでも演奏しているって最近耳にしたけど、バンド名は思い出せないな」

■80年代の終わり頃にSCALPによって組織された途轍もないアクションがあったと聞いたことがあるんだけど、この組織について、彼らがどんなことをしていたのか少し教えてもらえるかな?パンク・シーンと繋がりのある組織だったの?

「SCALPグループは、社会や政治に蔓延るファシズムに対する、パンクからの回答みたいなものだったよ。大きな町にはSCALPグループがいて、地元で活動をしていた。それぞれのグループは年に2、3回会って全国規模の活動を企画したり、プロジェクトを起ち上げたりしていたね…。アクションとしてはアンチ・ファシズムのデモであったり、ファシストの会合を中止させたり、ストリートにいるバカな奴らを襲撃したり…。ディジョンでは、俺と友人の何人かでSCALPグループを1991年に結成したよ。そして、パリからやって来たSCALPのメンバーと協力して、コンサートからナチを追い出したりしたね(状況が最悪だったときには、銃を持った用心棒を用意したよ)。そうしてナチを町から追いやったんだ。今ではアンチ・ファシズム・グループは多くないし、活動的ってわけでもない。だからファシズムが勢いを取り戻しているのさ」

(以下、次号に続く)



Basque Punk!!

APURTU



僕たちはバスクで最もアンダーグラウンドで
最も過小評価されたバンドじゃないかな

"BASQUE BOMBS AGAIN!" from POLAND　The Second Volume

こちらも前号からの続きで、バスクのパンク・バンド:APURTUのギター・ヴォーカル、Aitorへのインタヴューです。バスクの独立問題からシーン事情、そしてバンドを取り巻いていた状況まで丁寧に答えてくれています。すでに解散済みのバンドですし、インタヴューの内容から察するに、あまり報われなかったバンドかもしれませんが(人気が全然なかったようで…)、その実直な姿勢にはすごく好感が持てるのです!!(インタヴューを読みながら繰り返し聴いていたら、段々と好きになってきた)

INTERVIEWED:Grzester　[grzester12@poczta.onet.pl]

■バスクの独立の機運はどうなのかな?スペインから独立してバスクとして自治を得たいと思う?

「スペインとフランス政府は心底バスクを憎んでいた、いつの時代もね。彼らは僕たちの文化を根こそぎ破壊したんだ。言語も、民族的特性もね。僕は独立は必要だと考えている。何世紀にも渡って続いている憎しみを終わらせ、僕たちの文化を守るためにもね。もちろん堕落した政治家たちによるここの政治は他と同様にクソだよ、だから僕たちは自分たちの言語、文化、ルーツのため再び戦いを始めなければならない。市民の権利なんかじゃなくて、これは毎日続くハードな戦いなんだよ」

■外国からバンドはよく訪れているのかな?80年代には、ブラジルのCOLERAがバスクでプレイしたよね。30年前に、外国のバンドがバスクで演奏したのを覚えている?

「僕はその頃まだ子供だったから覚えてないよ。パンクを聴き始めたのは僕がすごく若かった1985年のことで、1986年に初めてのコンサートに行ったんだ。だけど、例えば1980年にRAMONESが来たことは知っているよ。彼らは何度も戻ってきたね。1981年にはCLASHが来た。数年の間に、UK SUBSや999、GBH、TOY DOLLS、EXPLOITED、ANTI NOWHERE LEAGUEといったイギリスのクラシックなバンドが多くここを訪れたね。1984年になると、また異なったバンドらによるDIYツアーが組まれるようになった。最初はMDC(アメリカ)だったか、それともIMPACT(イタリア)だったかな。COLERAは1987年だね。イルンのバンド、ANTI REGIMENと共演していたよ。そのときのヨーロッパ・ツアーでのコンサートを収録したライヴ・アルバムを彼らは出したよね。アンドアインやラウディオのGaztetxeには、オランダやドイツ、イタリア、イギリスのバンドがたくさん訪れているよ。珍しい話しとしては、とある若いバンドがアメリカからやって来て、DIYコンサートをGaztetxeで開催したんだ。50人とか100人を前にしてね。そうしてヨーロッパをツアーしていたんだ。そのバンドはGREEN DAYという名前だったのさ」

■84年にリリースされた「P.E.A.C.E.」コンピレーションには、ヨーロッパなどでの反核デモのデータが掲載されているよね。その中でデモに最も多くの人たちが参加しているのがビルバオで、15万人とあった!これはジョークではないよね?団体が組織され、そんなに活動していたの?もちろんパンクスだけではないよね。今ではそんな数には到底及ばない?

「そう、あれは激動の時代だったよ。多くのデモが行われたんだ。80年代初頭、政府はビルバオの近くに原子力発電所を建設しようとしていた。そして完成はしたんだが、絶え間ない大規模なデモや反核フェスによってそれが起動することはなかったんだ。色んな国で反核ロゴのバッチやポスター、ステッカーを今でも

見かけると思う。バスク語で"Nuklearrik ez eskerrik asko"(Nuclear no thanks)と書かれたやつをね。一方で80年代後半や90年代前半には反軍の社会闘争が起こった。兵役義務の廃止のためにデモやコンサートといった多くのアクションが行われたのさ。多くの若者が兵役を拒否し、当初は刑務所に送られていたけど、拒否する人が多すぎて遂に兵役義務を廃止せざるを得なかったのさ。もちろん今でも多くのデモが行われている。バスクの政治犯の人権問題であったり、バスク民族による自決権、国政の腐敗、労働者の権利といったことについてね。だけど何事も起こっていないかのように、公的報道機関は全てを隠匿しようとしているんだ」

■中東のシリアからやって来る難民についてはどう考えている?ポーランドでは、最悪にネガティヴな感情のデモが起こっているけど…。

「ポーランドのファシストな人々からの悲しい対応を僕も見たよ。セルビアやハンガリーとの国境でのね。本当に人類の悲劇だね。ここでは、もっとポジティヴな反応だよ。市役所や一部の人々は自宅やホテルへ難民を受け入れているし、スペイン政府に難民の自由な移動を嘆願しているしね」

■音源には特別な感情を込めている?最近のアルバムはどのくらい売れたのかな?

「うん、全てのアルバムには、その時々の感情を込めているよ。だけど僕にとって特別なアルバムは「Katuen Hirian」と「Orain aske zara」かな。「Katuen Hirian」は別の質問で答えたように、僕の娘の誕生がベースになっている作品で、「Orain aske zara」は僕たちの最後のアルバムにして、悲しみがたくさん詰まった作品でもあるんだ。僕の2人目の息子は心臓に問題があって10日間しか生きられず、2014年の7月に亡くなってしまった。そのことをベースにしているからさ。僕は他にもTORPEDO DやSLEVY、HC PEREZなどといったサイド・プロジェクトもやっているんだけど、ちょっと宣伝するなら、KAOS KOOPERATIVというバンドは本腰を入れているね。4枚ほどスプリット・アルバムを出していて、ハードコア・パンクをやっているよ。ただ、セールスが良かったことなんて一度もないさ。でも、レーベルがリスクを冒してまで僕たちの作品を流通してくれている。彼らなしでは、僕たちの作品は存在しなかっただろうね」

■どのようにしてAndreas Höehneとは出会ったの?彼のレーベルは僕のお気に入りの一つだし、Andreasもクールな男だよね。君たちのショーに彼がやって来たのかな?

「僕も彼のレーベルは大好きさ。数年前に友だちと一緒に、イルンのレコード店"Bloody Mary"でHöhnieのリリースをたくさん買ったんだ。それで、2004年だったと思うけど、あるフェスに行く途中のAndreasとその友人たちがイルンにやって来たことがあって、彼は"Bloody Mary"に立ち寄ったんだよ。どんな人が自分のリリースを買ってくれたかを知りたかったみたいでね。で、店のオーナーが僕を呼んでくれたから、パーティを開いてイルンで数日を彼らと過ごしたのさ。その後に、僕らのアルバムの話しをしてね。それからというもの、彼は毎年イルンを訪れているし、一緒にチェコのパンク・フェスティヴァルに行ったりしている仲さ。時には僕がドイツに行ったりね」

■バンド内でリーダー的な役割を果たしているのは誰なのかな?あと、コンサートの後って普段はどうしている?イヴェント?ダンス?それともまっすぐ帰宅する?

「APURTUでは僕が作詞、作曲をしていて、デザインもやっている。だけどリーダーだとは思っていないよ。みんな一緒に話し合っているからね。普段はコンサートを見たら、他のバンドのメンバーや友だちと話したりしているね。人と話すのが好きなんだ。楽屋から出てこないで金の話ししかしないようなバンドは好きじゃないのさ」

■長年活動してきたわけだけど、時代によってコンサートでのオーディエンスの態度が違っていたりするのかな?ヴァイオレンスだったり、ドラッグや酒を飲みすぎていたりとか?着ている服が黒づくめの革ジャンだったり、逆にカラフルだったりとか。

「難しい質問だね。歳月と共に、僕のものの見方も変わってくるしね。でも、今ではコンサートでポゴ・ダンスが起こるのはレアなんだ。暴力沙汰も、泥酔した人も少ないよ。みんな普通の格好で、モヒカンも滅多にいないし、革ジャン姿もね。そもそもコンサートに来る人自体も少ないからさ」

■出演した中で、一番規模の大きかったコンサートやフェスティヴァルは?逆に、一番オーディエンスの少なかったコンサートは?初めてやったライヴのことは覚えている?

「大きなフェスやコンサートで演奏した記憶はないな。小規模だったり、ミニ・フェスティヴァルでだけさ。極まれに、モニターやPAのついた広いステージでやることもあるけど、普段は生音だしね。僕たちはバスクで最もアンダーグラウンドで、最も過小評価されたバンドじゃないかな。ほとんどのコンサートでは20人くらいしか来なかったし、90年代には一人しか来なかったことも一度だけあった。滅多になかったけど、300〜400人のオーディエンスが来たことがあって、それが最大かな。初めてのショーは覚えているよ。高校生だった頃に学校でやったんだ。昼の12時から、クリスマス前のパーティだったな。たくさんビールを持ち込んだけど、先生に呼び出されてビールを没収されたよ。僕たちは18歳以下だったから、アルコール禁止のパーティでね。けど、それでも僕たちは飲んで100人くらいを前に良いショーをしたんだ。残念ながら録音もしてないし、写真もないんだけどね」

■バスクには毎年、定期的に開催されるパンク・フェスティヴァルはあるのかな?

「今、定期的なフェスティヴァルをやろうとしているんだけど、まだ実現していないね。"Etengabeko Zarata"(Endless Noise)というエクストリームなミュージック・フェスがあって、それにはOi POLLOIやMOB 47、IMPACT、MG15などといったバンドが出演したよ。もちろん、他にも多くの地元のバンドや色んな国のバンドも出演したね。数年前まではDIYなパンク・フェス、"Agropunk"が10年くらい何とか続けていたけど、あれは小規模ながら素晴らしいフェスだったな。あとは"Holidays in Bardulia"というOi!のフェスや、僕が企画していたミニ・フェス、"Bidasoa Attak"では一日に12バンドが出演したよ。昨年の9月には"Gasteiz Calling"という大きなフェスの第一回目が開催されて、TOY DOLLS、BAD RELIGION、JELLO BIAFRA、CASUALTIES、ESTRICALLAといったバンドが出演した。信じられないことに7000人もの人々がやって来たから、多分今後も続くだろうね。90年代の終わりには、イギリスのフェス、"Holidays in the sun"のバスク版が開催された。3日間に渡り、数多くのイギリスのクラシックなバンドが出たけど、入場料が高くてね。音楽性がごちゃ混ぜのフェスなら色々あるんだ。パンクとスカ、メタルが一緒にやるようなね」

■僕が夜にビルバオやイルンに来て、お金もない状態でいくつかスクワットを見つけたとしたら、泊めてもらえるところはあるのかな?パンクスはどこにいる?パブ?それとも中心部の広場?

「ここでは、スクワットがいつ開いているかは分からないんだ。スクワットを占有していても断続的な立ち退きを強いられるからね。バスクで比較的大きな都市と言ったらビルバオ、パンプローナ、ビトリア、サン・セバスチャンくらいしかなくて、あとはちょっとした町や村だけなんだ。でも、大抵は都市でも村でもパンクスがいるのは旧市街地だね。旧市街地は、異なったオルタナティヴな文化が交差する、その中心部なんだよ」

■バスクのバンドってヴォーカルの声が高い



よね。KORTATUやLA POLLA RECORDS、ESKORBUTOとかさ。

「ハハハ、そうだね、KORTATUとLA POLLA RECORDSは高い声だね。でもESKORBUTOはそうでもないんじゃないかな。ファストな音楽じゃないしさ。ただ、80年のクラシックなバンドはストロングなヴォーカルと楽曲だったよ。ファストである必要もなかったし。RIPやCICATRIZ、VOMITO、BASURAとかね」

■KAOS KOOPERATIVのメンバーは他に誰がいるの?どんなバンドから影響を受けた?

「KAOS KOOPERATIVは2人組なんだ。Charlesがベース・ヴォーカルで、80年代にはロウ・ハードコア・パンク・バンド:VIRUSでプレイしていた。僕はギターとコーラス、ドラムはプログラミングなんだ。そう、ドラムがいないんだよね。僕たちは2007年から活動していて、4枚のスプリット・アルバムをリリースしている。ファーストCDがブルガリアのNOVI TSVETYAとKOKOSHA GLAVA、ロシアのTHE PAUKIとの4 WAYスプリット、セカンドLPはバスクのACHTUNG!とのスプリット、サードCDはフランス領バスクのARNY ET LES CHACHIZとのスプリット、フォースLPはフランスのTADOSとのスプリット。僕たちはクラシックなハードコア・パンクをやっていて、80年代のイギリスやヨーロッパのハードコアから影響を受けているよ。KAOS KOOPERATIVのBandcampで聴くことができる」

■バスクの独立について、今のパンクスやアナーキスト団体はどのように捉えているのかな?通常、ナショナリズムは歓迎されるものではないけど…。独立はアナーキズム実現のための第一歩のようなものと考えている?それとも独立はまた別ものとして考えているのかな?

「まず最初に、独立とナショナリズムは同義語じゃないってことを理解しないとね。そして第二に、この2つの言葉に共通項はないってこと。独立賛成派にも反対派にも多くの意見があるんだけど、ナショナリズムは両派に根強く存在しているんだ。そして両派には共産主義者もアナーキストもいる。質問に戻ると、アナーキストにもそれぞれの見解があるから、とあるアナーキストはバスクやカタルーニャの独立に反対しているんだ。ナショナリズムと絡めて下手な議論を展開させたり、内戦が繰り返されると仮定したりね。また、ときにアナーキストは連邦主義を支持したり、スペインによる統一主義を批判すらしなかったりね。それって本当にアナーキストなのかね?遠く離れたパレスチナやチアパス、チベット、クルディスタンの自由について語るのは簡単さ。だけど、自国の問題について解決のため歩み寄るのは本当に難しいんだよ」

■ナチ・スキンズの類いはいるのかな?揉め事とか、何か問題は?ポーランドにはナチ・スキンズが結構いるからさ…。

「奴らの大部分は大都市であるマドリッドやヴァレンシア、バルセロナにいて大きな問題になっているけど、幸いにもバスクにはナチ・スキンズはいないよ。もしいたとしても極僅かさ。普通のパンクスとスキンズは問題なく一緒につるんでいて、まあ、中にはトラブルを起こす手合いもいるけど、そういう奴らはつまらないバカってだけさ。警察に護衛され、一切罪に問われることのない右翼政治家たちこそが、僕たちにとってはナチ野郎だね」

■揉め事と言えば、ある都市のパンクス・グループが、他の都市のパンクスと敵対していたりすることはあるのかな?お互いに敵意を抱いて喧嘩したりとか?

「都市間でのライバル意識ってやつは存在しているけど、ほとんどは冗談で済ませられるレベルだね。そんなことで喧嘩することは普通はないよ。フットボールのフーリガン同士の揉め事よりもちょっと激しいくらいでさ」

■最後に、お金のない観光客がバスクに行くとき、オススメの場所はどこかな?

「人がそんなにいない小さなビーチであったり、山々の遊歩道を散歩したり、素敵な街を訪れたり、バーやストリートでビールを飲んだりかな。お金がなければスクワットで寝泊りできないか尋ねたり、パンクスの自宅に泊めてもらったり、ビーチで寝たり山でテントを張ったりできるし、食事は安くて美味しいレストランがたくさんあるよ。バスクの人たちは引っ込み思案だって言う人もいるけど、もし君たちが僕らの閉じた心を開いてくれるのなら、いつでも大歓迎するさ」

Punx Viewpoint:
EU Referendum



今年6月、イギリスのEUからの離脱が国民投票によって決定し、それはここ日本でも一時大きな話題となりました。しかし、その後に実施された参院選、都知事選、オリンピック、SMAP解散、アレックス・ラミレス新監督率いる横浜DeNAベイスターズが奮闘し3位を死守する快挙(※8月31日現在)といったニュースのおかげで、99%の日本人は最早イギリスのEU離脱の件をスッカリ忘れているのではないでしょうか。高級経済誌を自負する(?)EL ZINEとしましては、パンクのメッカであるイギリスの一大事を見過ごすわけにはいかないので、vol.20で登場してもらったロンドン拠点のバンド:SNOBのOliに、「ぶっちゃけイギリスのパンクスはEU離脱についてどう思っているの?」とメール・アタックをしてみました。

EU離脱の是非を問う国民投票は、心の底からガッカリする結果となったね。SNOBも、そして僕たちの友だち全員も、断固として残留派だったよ。僕の知る範囲で離脱に投票したのは同僚が一人、それに僕の母だけだった。

今回の投票は、社会階級によって意見の相違が生まれるという問題(明らかに過去数年間に渡って、メディアは強引なミスリーディングを行なっていた。その成果だね)と、僕たちが暮らすロンドンの、その中産階級が抱いていた幻想を提示することになった。

僕たちは残留すべきだと確信していた。だけど今ではみんな取り乱して困惑しているよ。これから何が起こるのか、そして自分たちの政府が、離脱に対する準備を何もしていなかったことについてね。

僕が話していることって、既にどこかで聞いたことがある話しだなって、みんなは思っているかもしれない。だけどこの事態は、今この瞬間にも僕に影響を与えているんだ。

他国(EU加盟国に限らず)からイギリスに移住しようとしている人たちは、自分たちが歓迎されていないってことを感じ取っている。僕は小学校で教鞭をとっているんだけど、僕のクラスで授業の助手もしてくれていた生徒が、母国へと帰国してしまったんだ。彼らを取り巻く環境が今後、変化していくことを見越してね。そしてこれは、校内の至るところで多く起こっている事態でもあるんだよ。彼らの目に映るイギリス、その環境は今や、敵対的にあるように感じられるんだろうね。

今回の投票運動中に広く使われたキャッチ・コピーがあるんだけど、それはBilly Bragg(イギリスの政治的なシンガー・ソングライター)の発言が元になっているんだ。

「離脱派の全員がレイシストなわけではない。ただし、全てのレイシストは離脱に票を投じるだろう」

実際のところ、潜在的なレイシズムが、全ての離脱派にはあったんだと僕は考えている。なにせ、離脱に投票したところで何一つとして良いことはないんだからさ。そしてその潜在的レイシズムの根っこには、メディアによって仕立てあげられた移民という、排外的スケープゴートの存在があると思うんだ。

僕は誰のことも非難したりはしない。みんな、絶えずクソみたいな情報を与えられ続けて、そのせいで移民の「大群」が押し寄せてきて仕事を奪うだとか、将来を脅かすなんてことを信じ込ませられているんだから。

とにかく、イギリスのような相対的に見ても特権的立場にある国にとって、今回の投票結果は黙示録的なものだね。誰もこの国の未来を見通すことはできないのさ。



LASHING SPEED DEMONS VOL.23

X『LOS ANGELES』

西海岸パンクの巨星・X。EL ZINE誌上でも多くのバンドが影響源として挙げている存在だ。一方で、解散と復活を含む長い歴史の間にメンバーのサイド・プロジェクトなども含めて音楽性は拡散し、80年代半ば以降は音楽的にはパンクとは呼べないモノになってもいる。そこで今回は、LAパンクの金字塔のひとつとも言える彼らの1stアルバム『LOS ANGELES』(とその周辺)に特化して語ってみたい。このアルバムについては本誌VOL.4で既に紹介しているのだが、あの時は180字。今回は5000字近くでお送りします。よろしくお付き合いください。

TEXT:大越よしはる

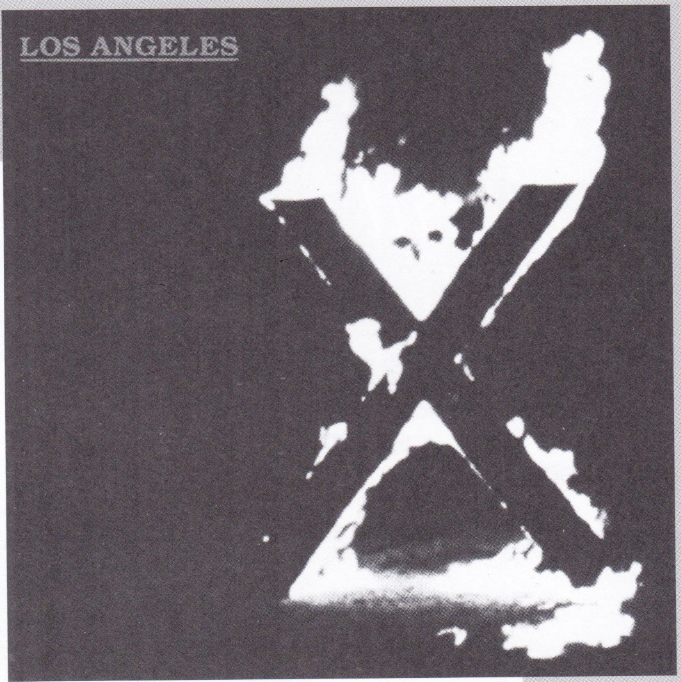
Xは、1977年に"ジョン・ドー"ことジョン・ノメンセン・ドゥシャク(ベース、ヴォーカル)、"エクシーン"ことクリステン・リー・サーヴェンカ(ヴォーカル)、"ビリー・ズーム"ことタイソン・キンデル(ギター)、ドナルド・J・ボーンブレイク(ドラム)の4人によってLAで結成されている。76年にジョンとビリーが知り合ったのがきっかけだった。

"John Doe"というのは、強いて日本語に訳せば"名無しの権兵衛"とでもいうか。また、身元不明の死体を指す言葉でもある(CONVERGEのアルバム・タイトルにもなっている"Jane Doe"というのは、その女性形)。"未知数"を意味するバンド名ともども、"何者でもない自分たち"ともいうべきバンドの立ち位置をよく象徴していると思う。

ジョン・ドーは、当時ニューヨークやロンドンで勃興しつつあったパンク・ロックに刺激を受けつつ、カントリーやロカビリー、そしてフォークといったロック以前のアメリカの音楽からの多大な影響を自身の音楽に込めて行った。それにより、Xのパンク・ロックは独自な味わいを醸し出すことになる。

エクシーン・サーヴェンカは元々ジョンのガールフレンドで、ジョンの誘いでバンドに参加。1980年にはジョンと結婚している(その後85年に離婚)。バンド結成当時は21歳で、細身な体にスージー・スーばりのゴスっぽいメイクで歌うその姿は、初期Xのヴィジュアル的なイメージを一人で決定づけていたとも言える(後には別人のように太ってしまうが…)。

ビリー・ズームは少年時代から様々な楽器に親しみ、ギターだけでなくバンジョーやサックスやピアノまでこなすマルチ・プレイヤーで、60年代からセッション・ギタリストとしてのキャリアがあった。ジョンが書くカントリーやロカビリー色の強いパンク・ロックを具現化していたのは、ビリーのギターによるところが大きい。ルックスもいかにもロカビリー青年風で、ライヴの写真を見ると大体笑顔、というのが印象的なキャラクター(現在までルックスがあまり変わっていないが、実はメンバー中最年長で、バンド結成当時既に29歳だった)。



D.J.ボーンブレイクはXのメンバー中で唯一の西海岸出身者で(LAのバンドとして知られるXだが、D.J.以外の3人はイリノイ州出身)、X以前はこれまた西海岸で活動していたパンク・バンドEYESのドラマーだった。パワフルなプレイの一方でジャズやラテンにも造詣が深く、パンク・ロックとルーツ・ミュージックを融合したXのサウンドを下支えしていた人物と言える。

そんな4人で演奏されるのは、タフでスピーディーなリズムにロカビリー風のギターが乗り、男女ツイン・ヴォーカルのハーモニーが投げつけるように放たれる、独特なパンク・ロック。バンドはたちまち界隈で注目を集めるようになる。

バンドは1978年にデンジャーハウス・レコーズから7inch「Adult Books / We're Desperate」をリリースして、レコード・デビューを果たしている。TELEVISIONの「Prove It」をちょっと思わせるようなリズムの「Adult Books」は、一方でちょっとカントリーっぽくもあり(Xというバンドは、いわゆる"オルターナティヴ・カントリー"の先駆者のひとつに挙げてもいいと思う)。一方の「We're Desperate」はハードコア的な疾走感を持ち。この時点でXの音楽的な特徴は出来上がっていた。

更に79年、デンジャーハウスからオムニバスEP「YES L.A.」がリリースされ、Xはそこに後のデビュー・アルバムのタイトル曲となる「Los Angeles」を提供している(アルバムとは別テイク)。「YES L.A.」というタイトルは、もちろん78年にリリースされていたオムニバス・アルバム『NO NEW YORK』のパロディであり、同時にLAにも当地ならではのパンク/ニュー・ウェイヴのシーンが存在しているのだという宣言でもあったと思う。そんなオムニバスに、Xがそのものズバリな「Los Angeles」という曲で参加していたことは、実に印象深い。

そしてLAを中心に精力的なライヴ活動を続けていたXは、ライヴを観に来ていたレイ・マンザレクと知り合うのだった。レイ・マンザレク…言うまでもなく元THE DOORSのキーボーディストにして、音楽面の要だった男。当時は新たにNITE CITYを結成して2枚のアルバムをリリースしながら、商業的成功には至らず解散していた頃だ。Xのメンバーたちは伝説のバンドの主要メンバーとの出会いに興奮しただろうし、一方で自身の活動がやや行き詰まっていたレイも若いバンドに触発される部分があったに違いない。

ともあれ、西海岸のパンクの筆頭格として認知されてきていたバンドは、1980年に入ると西海岸のパンク系ファンジン「Slash」が主宰していたスラッシュ・レコーズとの契約を得て、80年4月に1stアルバムをリリースする。それが今回のお題である『LOS　ANGELES』だ。闇の中で燃え上がる"X"の文字。それが白黒写真で表現され、左上には赤い文字でタイトルが。ダークにして鮮烈なイメージ。

プロデュースはレイ・マンザレクで、彼は演奏にも参加している。音楽的には、エクシーン・サーヴェンカとジョン・ドーのぶっきらぼうな男女ツイン・ヴォーカルで歌われる性急なR&Rを中心に、やはりロカビリーやカントリーといったルーツ・ミュージック的な要素が前面に出ている。いかにもアメリカ的なパンク・ロックのあり方だと思うと同時に、Xというバンドがここ日本で今ひとつ評価されないのもそのあたりにあるのでは…とも思わされる。

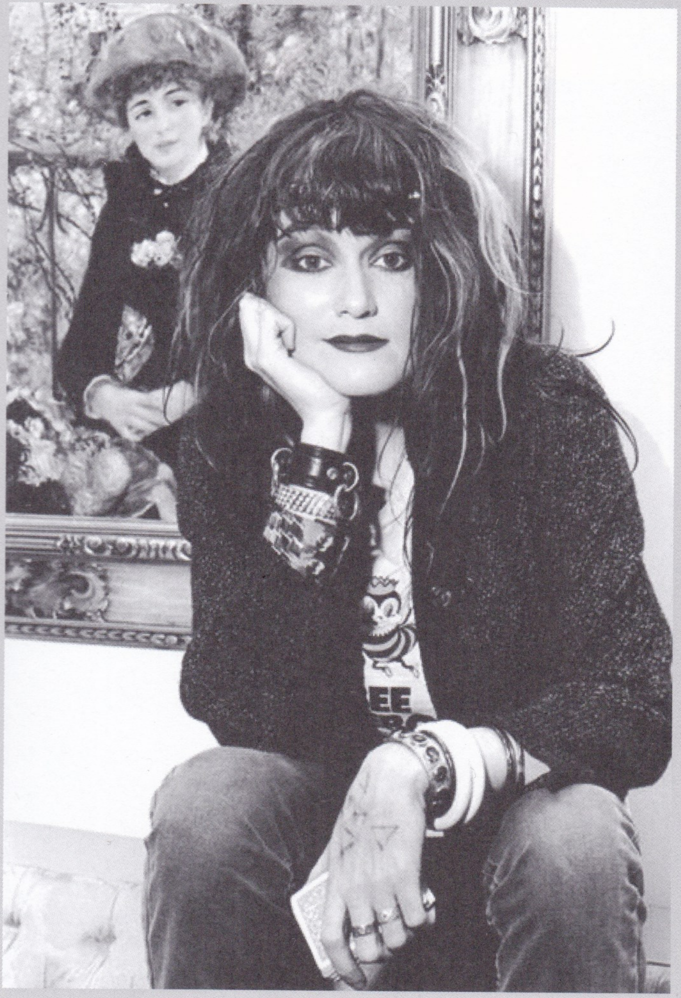


とはいえこの時点でのXは、基本的には疾走感を前面に出したパンク・ロックをプレイしていた。全9曲中の7曲は速い曲だ。アルバムはスピーディーな「Your Phone's Off The Hook, But You're Not」に始まり、これまたスピーディーな「Johnny Hit And Run Pauline」へと続く。チャック・ベリー風のイントロからなだれ込む「Johnny Hit And Run Pauline」…しかし歌詞にはチャック・ベリー的な明朗さのかけらもなく、ドラッグとセックスまみれ。



この曲に限らず、ジョン・ドーとエクシーン・サーヴェンカの歌詞にはアメリカの病理のようなモノを描いた歌詞が多い。チャールズ・ブコウスキーあたりの影響があったらしいが、元々ジョンとエクシーンはヴェニスで行なわれていた詩のワークショップで知り合ったということで、パティ・スミスやジム・キャロルといったニューヨークのロックンローラー達に近いバックボーンがあったとも言える。

そんな歌をドライヴさせる、機関車のように突進するリズム・セクションとやたらノリのいいギター。カントリー/ロカビリー・テイストを前面に出しつつ、スリリングなリフとソロを連発するビリー・ズームのギターは、同時期のDEAD　KENNEDYSのギタリスト、イースト・ベイ・レイにも共通するセンスを感じさせる(DEAD　KENNEDYSの1stアルバムも『LOS ANGELES』同様1980年のリリースだ)。レイの方が、ちょっとサーフ色強めだが。



そしてTHE　DOORSのカヴァー「Soul Kitchen」はほとんど3倍速。ちょっと聴いただけではTHE　DOORSの曲とはわからないほどの飛ばしっぷりで、かなり痛快なアレンジだ。

一方でミドル/スローの2曲「Nausea」「The Unheard Music」は、ある種ドゥーミーな感覚をたたえてもいる。いわゆるドゥーム・ロックとかドゥーム・メタルとかとはまた違ったドゥーミーさ。「Nausea」なんて、タイトルからして"吐き気"という…。

随所で演奏に参加しているレイ・マンザレクのプレイは、基本的にTHE DOORS時代から変わっていない。しかしTHE DOORSと違って速い楽曲が多いので、そこで披露されるレイのオルガンはやたらパンキッシュに聴こえたりもする。特に「The World's A Mess; It's In My Kiss」での長いソロは圧巻。

結局レイ・マンザレクは、Xのアルバムを4作続けてプロデュースすることになる。余談になるが、このことに絡めて俺がいつも思い出すのは、THE DAMNEDの2ndアルバム『MUSIC FOR PLEASURE』(1977年)のことだ。

『MUSIC　FOR　PLEASURE』は、当時PINK　FLOYDのドラマーだったニック・メイソンがプロデュースしている。PINK　FLOYDも、ごく

初期(シド・バレット在籍時)に限ればTHE　DOORS同様、後のパンクに少なからず影響した存在だった。

しかし、77年のPINK FLOYDはシド在籍時とはまるっきり別のバンドと言っても良かった。当時のPINK FLOYDは、観念的なプログレッシヴ・ロック。そもそもDAMNEDのメンバーたちはシドにプロデュースしてもらうことを望んでいたというが、当時シドは既にシーンから姿を消した後だった。それで結局ニックがやってきたということらしいが…もちろんシド本人でもなく、シドに深い思い入れがあったというロジャー・ウォーターズ(当時のPINK FLOYDのリーダーにしてベーシスト)ですらなく、ニックがプロデューサーだったということは、『MUSIC FOR PLEASURE』の制作にあまり良い影響は与えなかったのでは、という気がする。

一方でXとレイのコラボレーションは、互いへのリスペクトに支えられた意義深いモノになったと思う。『MUSIC FOR PLEASURE』が今ひとつピリッとしないアルバムになったのに対して、『LOS ANGELES』はバンドのキャリアだけでなくLAのパンク・ロックをも代表する1枚となった。

閑話休題。この時期Xは、ペネロープ・スフィーリス監督による西海岸パンクのドキュメンタリー映画『THE DECLINE OF WESTERN CIVILIZATION』に出演を果たしている。この映画は今年の3月に日本でも劇場公開されたし、9月にはDVD/ブルーレイとしてリリースされているので、スクリーンや自宅でXの動く姿を見た/見ている人も多いのではと思う(他にBLACK FLAGやGERMSやCIRCLE JERKSなども登場)。

この映画が撮影されたのは1979年12月〜80年5月にかけてのことで、まさにXのアルバム『LOS ANGELES』リリース前後の時期だ。この映画には、アルバム・デビュー前後のXの旬の姿が捉えられていると言っていい。未見の方にはお勧めしておきます。Xが当時の西海岸パンクの代表格のひとつだったことがよくわかると思う。

『LOS ANGELES』は、2001年にライノ・レコーズからボーナス・トラック5曲をプラスしてCD化された(コレが初のCD化だったはず)。オリジナル・アルバムの収録時間はたった28分で、ボーナス・トラックを含めても39分半しかない。

ところで00年代初頭、日本のワーナー・ミュージックが"US Punk evolution!!"というシリーズ名でアメリカン・パンクのカタログをCD再発していて、TELEVISIONやTUFF DARTSやTHE DICTATORSやTHE PALEY BROTHERSなんかが国内盤CDとして再発された。当初そのラインナップにこの『LOS ANGELES』も予定されていたはずだったのだが…やはりセールス的に厳しいと判断されたのか(?)、結局国内リリースは見送りとなってしまった。以後現在に至るまで、残念ながらこのアルバムが日本国内でリリースされたことはない(輸入盤CDは現在でも簡単に入手出来るはず)。

パンク・バンドとしてのX…という点に限れば、この1stアルバムこそが彼らの原点でありピークでもあったと思う。以後のXはスタイルとしてのパンク・ロックから徐々に離れ、3rdアルバム『UNDER THE BIG BLACK SUN』(1982年)以降はメジャーのエレクトラ・レコーズからリリースするようになる。

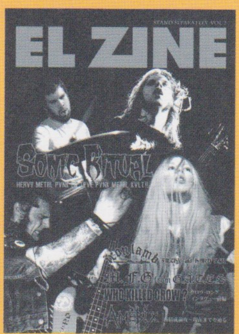
当時英国のインディー・チャートで15位を記録した『LOS ANGELES』だったが、母国アメリカでは商業的にはほとんど問題にならず。当時のアメリカのパンク・ロックは、全国を席巻した英国パンクと違い、都市毎の"点"のようなモノで、それが"線"を伴って全米に拡大して行くのは90年代のこと…というのは、本誌VOL.18でのグランジ特集でも触れたとおりだ。

とはいえこのアルバム、当時から玄人筋での評価はかなり高かったし、最初に書いたとおりEL　ZINEでも取り上げられているような多くのバンドやミュージシャンがXからの影響を口にしている。そんなXの起点、『LOS ANGELES』であります。

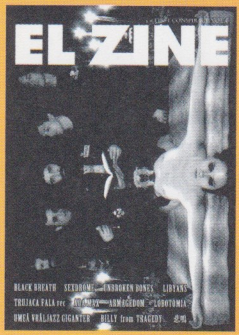


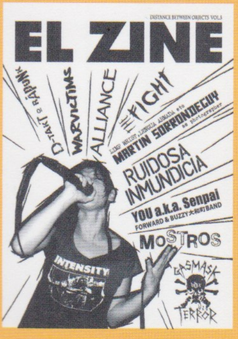


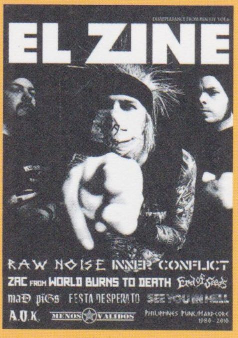


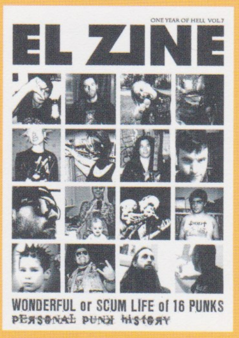


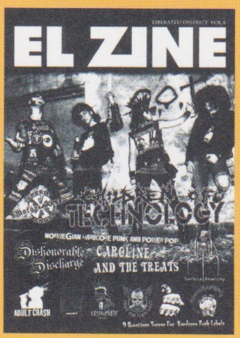


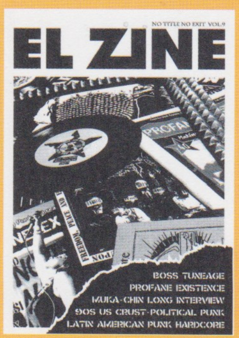


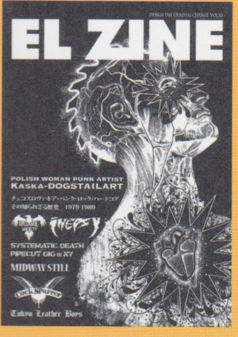


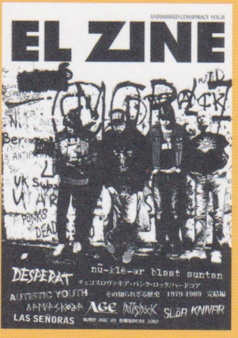


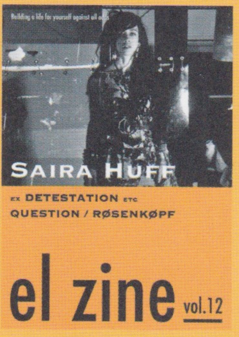


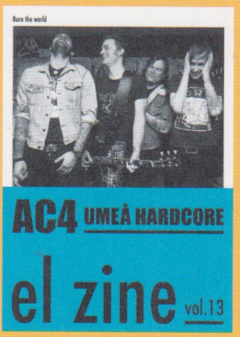








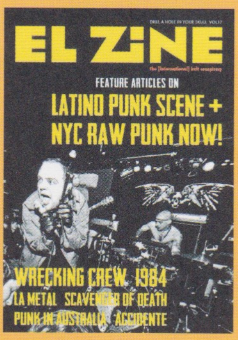


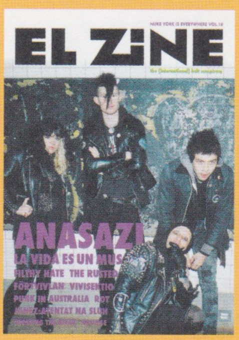


















SOLD OUT : VOL.0, VOL.1, VOL.2, VOL.3, VOL.13
SMALL STOCK : VOL.4, VOL.7, VOL.19, VOL.20
THANKS FOR READING! FOR PUNKS! BY PUNKS!

editor's notes

今号って面白くないですか?いや、常に「ヨシ!今号も実に面白いな!」と自信満々で僕は発行しているんですけど、ちょっとマニアックすぎたりもするので、人によってはアレかな?と思うときも正直あるんです。でも今号はPOISON IDEA&豪華執筆陣によるコラムにRIOT CITY RECORDS、LOS CRUDOS、フェスのレポートに社会的な記事も盛り沢山で、まさに盆と正月が一緒に来たようやわ〜!と、自画自賛しているところです。このまま調子に乗って、年末にもう一冊出せたらいいな〜と画策しているのですが、…どうなることでしょう(汗)。Talk to you soon!

※インタヴュアー及び執筆者名の記載のない原稿は全て山路健二が記した
EL ZINE vol.22　2016年10月20日発行　E-MAIL　unno13@gmail.com
※バック・ナンバーはパンク/ハードコア取扱店　又はhttp://www.juzasha.comにてお求めになれます

the [international] kult conspiracy EL ZINE TERROR OF HERNIATED DISC VOL.22

NON PROFIT AD

EL Z

Riot City Records
Simon Edwards interview

Sadist NEGATIVE

Master Musicians of
Joujouka Festival in

GIG REVIEWS
NOWHERE TO RUN FEST
PUNK DEPARTURE

PSYC



Poison

Interview & Column